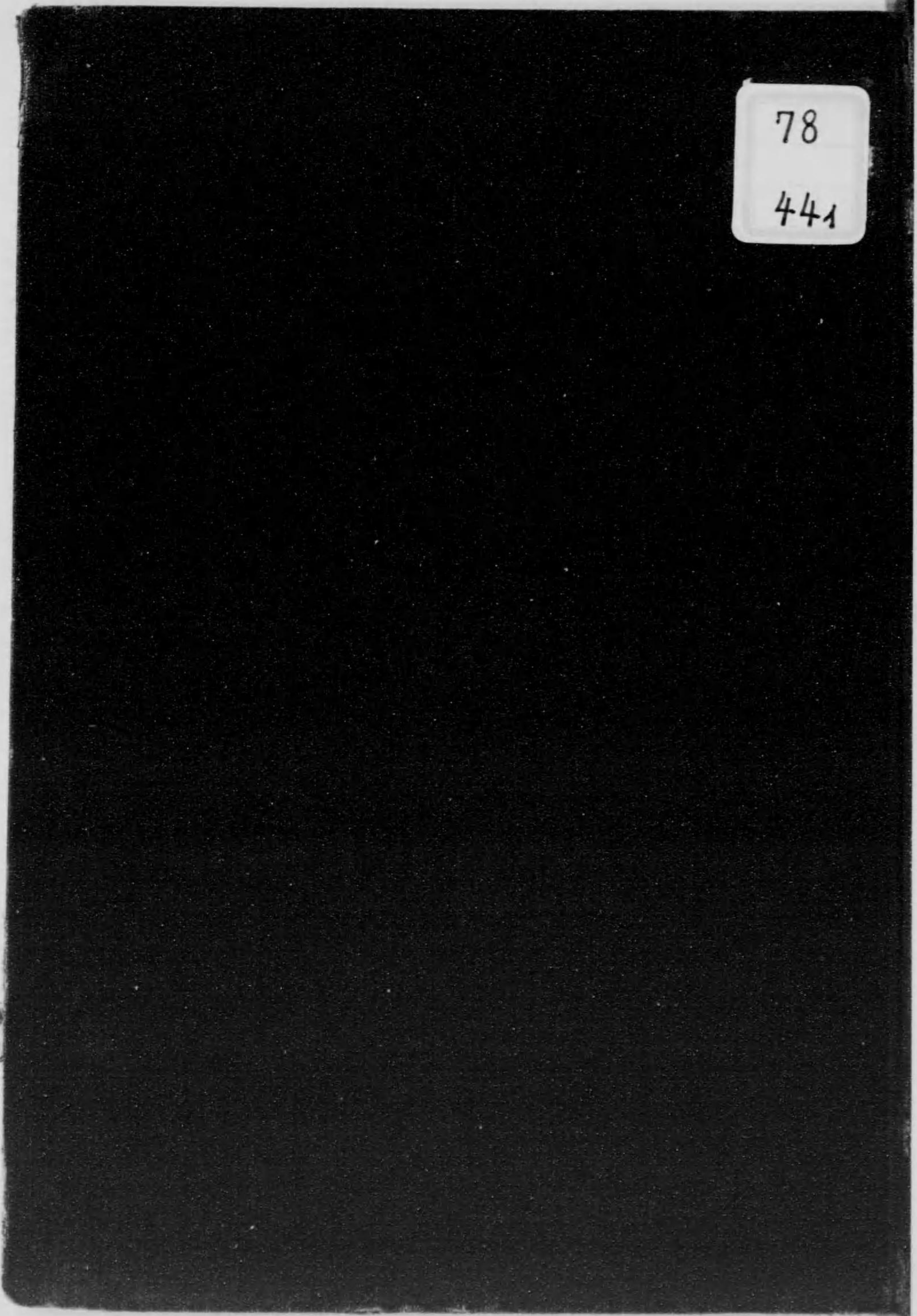


6 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

78  
441

始



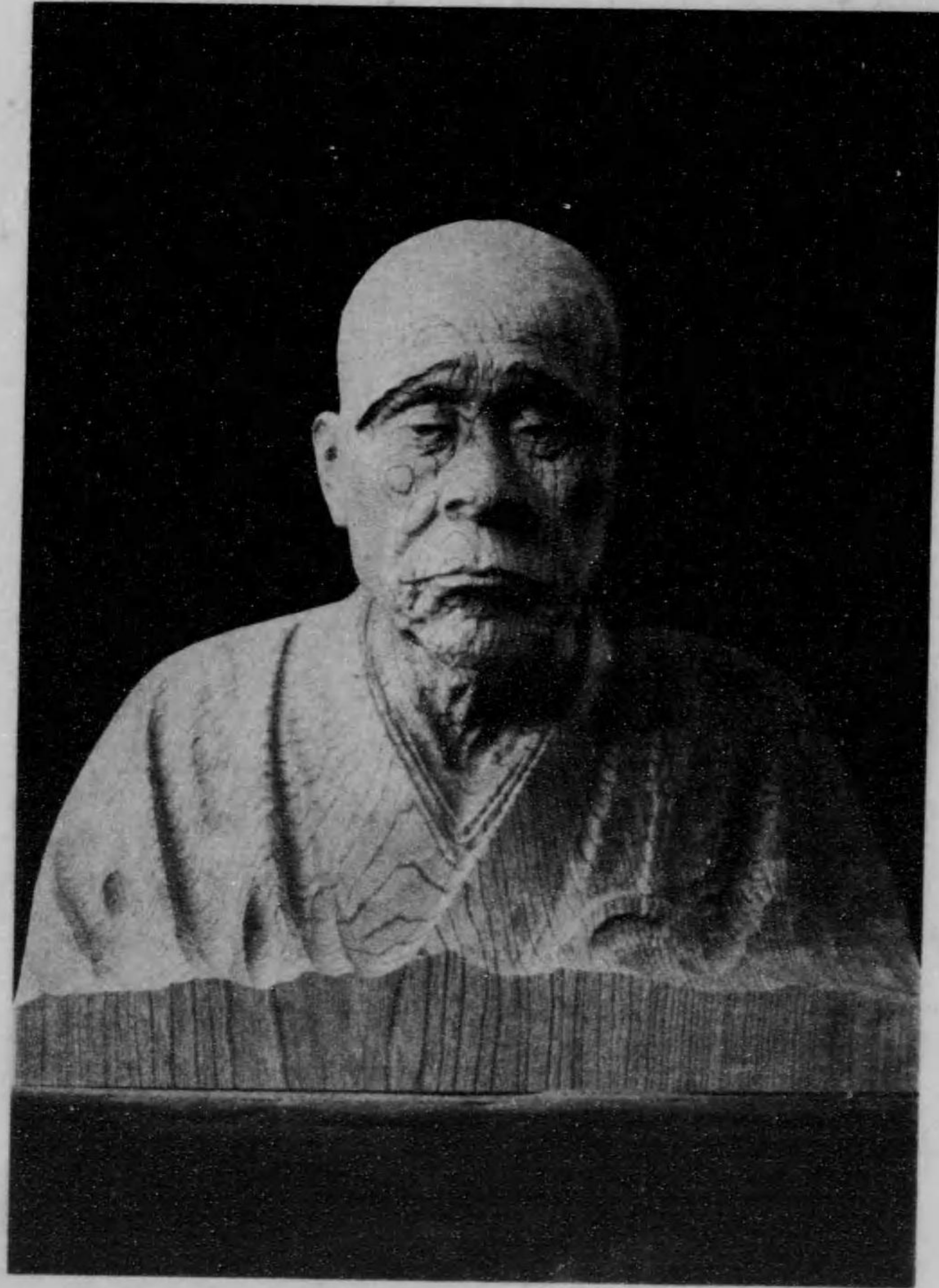
## 第五版はしがき

一、これは、僕の處女作である。今から九年も前（明治廿七年十月五月初版發行）の駄作である。今にしてこれを見れば、觀察平凡、稚氣満幅、甚だ以て、氣耻しいものではあるが、しかし、親心といふものは、不思議なもので、善く出来た子は、善くて可愛く、悪く出来た子は、悪くて更にいとしいものである。まして、九年前の僕には、これが、最良の努力の結果であつて、駄作だの平凡だのとは、憚りながら、毛頭、思つては居なかつたばかりでなく、自分の書いたものが、初めて一冊の書籍になつて、世間に賣り出された時の、嬉しさと誇りとは、今も尙、忘れざるの出来ないうまに、深く、僕の心に刻みつけられて居る。それを、今更、駄作だの平凡だのと、難癖つけて、全然これを弾り去るやうな無慈悲な眞似は、とても、僕には、出来かねる。親馬鹿チャンリンと笑はゞ笑へ、笑ふ門には福来るツさ。

二、第四版がすつかり賣れ切れてから、暫く、重版を躊躇して居たので、今でもポツポツ来る注文を、一々斷つて居るといふ始末。鶏肋でも、煮ればソツア位は取れるのだから、有つても邪魔にならないものなら、有らしめてもよからうと、親の未練に、出版屋の悪心を加味して、いよゝゝ、こゝに、第五版を出すことにした。

三、出すことにはしたが、流石に、そのまゝでは、あまりに、世間を馬鹿にしたやうに取られむも口惜しく、何とか一ツ、景氣をつける工夫もがたと、まづ、恩師、大内青精先生に序文をねだり、畏友、内田魯庵、堺利彦、佐々木照山の三君から跋を貰ひ、新海竹太郎君から、その作、一休和尚像を、口繪にするの承諾を得、更に「一休和尚行實」と、「東海一休和尚年譜」とを巻末に附録し、おかげで、すつかり、満容飾を施して、吾ながら、生れ變つた程のはな／＼しさ。へん、どんなもんだい、これで賣れなきや、買はない方が悪いんだ。……誰だい、そこに居て、附録と序跋とを一冊にした方が、遂に結構だなんて居るのは、……叱々。

大正元年九月 先帝御大葬の前日、例の、丙午出版社の帳場机の上で。



一休和尚  
新海竹太郎作(彫木)

序

以清冽之心。處溷濁之世。而虛懷全身者。求諸古今。叵得也。夷齊餓于首陽。屈原溺于汨羅。其行也固慘矣。仲尼欲乘桴。魯連將蹈海。其志也可憐矣。三徑之詩賦。七賢之清談。其跡雖異。其心事則同。我國中世以還。王室式微。權臣橫暴。道之不行也尙矣。當是時。義烈士。不能忍之者。皆避難於佛海。佛海深廣。游泳自在。佐藤憲清之寓情風月。隨緣樂天。藤原藤房之托迹水雲。任運委命。概此類也。一休純公。受生皇胤。資性俊爽。才拔群賢。氣吞一世。而遭綱紀紊亂。國家危殆之時。母子淪逆境。辛酸備嘗。君臣之義。

1. 11. 20.

丙寅

親子之情。豈可忍默默坐視哉。然時已非也。無復可救之焉。若夫非游泳佛海。則亦第有首陽汨羅之慘爾。純公幸領春于少林。逍遙自適。正偏宛轉。不可端倪。於是世人輒只見明月。不省白鷺。概目公爲風顛漢。吾常憾焉。米峰高島君。夙能知公之心事。乃詳考其生涯。傳之盡蘊。可謂隔世之知音也。吾竊以爲純公者王室無二之忠臣也。而放浪方外。此時耳。運命耳。然米峰未明言之。吾仍贅一言。以弁卷首云。

大正壬子孟秋

青巒居士大内 退撰

## はしおき

一、たゞ一口に「一休和尚」と言うつて仕舞へば、誰の頭にも必ずあの滑稽廳輕、右と言へば左と答へ、上と追つかければ下と逃げ、繩でも縛れず、棒でも打てず、誠に始末におへない禪宗坊さんが浮んで來るであらうが、しかし、それだけで、果して一休の眞面目が、盡きて居るであらうか、どうであらう。

二、自分の見るところによると、「エ、伺ひまするは」と、張扇で叩き出された一休も一休であるし、「一休名は宗純字は云々」と、四角張つた生眞面目な一休も一休である。史家によつて傳へられた一休を重んじなければならぬ。こゝとは勿論であるが、さりとて又、講釋師輩に依つて傳へられた一休も捨て難いのである。

三、若しただ徒に讀者から、これは面白いと歎んで貰はうといふだけならば、聊か講釋師の向うを張つて、僅に一休が半面を描いて置けば、それで済むのであるが、それでは、確實なる傳記を編述して、大に偉人の眞面目を發揮し、

以て、教界の不備を補ひ、修養感化の資料に供す」とかいふ、『教界偉人叢書』發行の趣意にも適はず、殊には、臍の緒切つて始めての著述でもあるから、少しは的の字位は振舞はしても、見たいところからして、行届ぬながらも、兩方面へ手を出さうとしたのである。

四、何がさて、學校に居る時分から、歴史と來ては、六十點かつく、といふ始末、その上、本來頭が不透明で、筆が鈍く、何事もわからない勝、書かれない勝、中途で持て餘して、筆を投げ出したことも一度や二度ではない。それでも、正確な材料が澤山揃つて居るとか、或は書齋へ閉籠つて、研究の眞似ても出来るといふ閑があるとか言ふならば、何とか勘辯のしやうもあらうが、何を言ふにも、帳場机の上へ、怪しげな書籍を數種取り散し、「へい入らッしやい……」『新佛教』一冊……貳拾錢で拾錢のおつり、どうも有り難う、なんぞの、あいま／＼にやつたのであるから、なんぼ欲目で見ても、これで善いとはさら／＼思はない。足らぬところもあらうし、間違つたところも……自分は、自分はないつもりだが……或はあるかも知れない、たい自分は、自分の力で出来るだけ詮穿し、

自分の筆で書けるだけ書いたので、これ以上とあつては、もはや自分の力も筆も及ばないのである。

五、一休の事蹟に就いては、記載の上でも、口碑の上でも、相違の廉が頗る多い。正確に年代などを追うて調べた日には、十中の六七までは、印のお見舞を蒙らなければならぬのである。勿論、こゝにいふやうなことを、一々考證して、どれが正しいとか、どれが怪しいとかいふことを、明確に書き立てるのが、當然ではあらうが、第一、それをやらねば、一休の偉大なる眞面目が、現はれて來ないといふでもなし、第二、自分は、世の博雅の諸君子に、満足を表して貰へるだけの、立派な考證をする程の、材料と史眼とを持合せても居ないので、かた／＼、取捨撰擇は、一に自分の愚考に任せ、彼此相對照するといふことも略し、又、その理由を付するといふことも、見合せたのである。

六、若し自分が、せめて禪宗文學の片端でも、嚙つて居たならば、一休を躍動……とまではゆかずとも、少し氣の利いたものに、することが出来たかも知れないが、しかし何分にも、甚麼や、恁麼の使ひわけさへ吞み込めない分際

では筆の運びの上に、我ながら齒痒いことが屢々あつた。

七、元來自分は、一休を崇拜して居るといふわけでもないし、又一休の親類筋のものであるといふのでもない。従つて、前から一休のことを調べて居たのでもなければ、一休の傳記を書きたいと思つて居たのでもない。たゞ、昨年の暮に宗教研究會の小野藤太君がやつて来て、「これ／＼しかくで、『教界偉人叢書』を發行することゝなつたが、君にも何か書いて貰ひたい、ついでには、一休和尚なんぞはどうだらう」と、こゝろいふやう話が、つい今日、事實となつて現はれたまでである。今となつては、出來もしないくせに、あまり安請合をしたのが、いつそ恨めしい。

八、此の書を著すについては、最初學友豊田孤寒君を煩はして、材料を集めても貰つたし、又君の一休觀をも書いて貰つたことがある。それが殆ど全く、この中に活いて居るのであるといふことを明確にして、一は豊田君の勞を謝し、一は他の功を私しないのである。

明治三十七年九月九日鷄聲堂書店の帳場に於て 高島米峯識す

## 一休和尚傳目次

第一章	一休の年譜	一
第二章	一休の生れた足利時代	一三
第三章	一休以前の佛教の狀態	二七
第四章	一休の前半生	四二
一、	彼が爲人	四二
二、	彼が誕生	四八
三、	彼が修養	五七
第五章	一休の後半生	七二
一、	彼が傳道	七二
二、	彼が道交	八四

三 彼が感化……………九七

第六章 一休の平民的教化……………一〇三

第七章 一休の文學……………一二八

第八章 一休の理想……………一四七

第九章 一休の逸話……………一六三

第十章 歸 結……………一八九

附 記 一休と大徳寺、一休と養叟、一休と義満、  
一休の子……………二〇一

附 録 一休和尚行實、東海一休和尚年譜……………二〇九

# 一休和尚傳

高島米峰 著

## 第一章 一休の年譜

一休の年譜とは言ふもの、實は一休に直接關係のないことの方が多く擧げてあるのである。直接の關係はないけれども、これに依つて、一休當時の社會の状態やら、佛教界の様子の一斑が知れやうと思ふ。つまり、一休を知ると共に、また一休の時代が知れやうとの婆心に外ならないのである。

- 一 歳 (應永元年)紀元二千五十四年、西曆千三百九十四年、後小松天皇の朝、正月朔日、京洛の民家に誕生す、稱して千菊丸といふ。◎足利義満、將軍職を、子義持(九歳)に譲り、次いで太政大臣となる◎長尾景久、學校を政所より足利に移す◎經國關白となる◎相國寺焼け、同年再興す
- 二 歳 (同二年) 義満落筋す◎世人義満を公方と呼ぶ◎四辻善哉致仕す、河海鈔



の著あり

- 三 歳 (同三年) 三管四職六頭を置く◎示現寺源義、東福寺靈見、寂す
- 四 歳 (同四年) 義満北山に金閣寺を建つ◎相國寺七層増建つ◎建仁寺焼く◎鹿苑寺三層塔を建つ
- 五 歳 (同五年) 鎌倉亦三管四職を置く◎朝鮮禁寇を請ひ来る◎崇光院卒す
- 六 歳 (同六年) 初めて、京都安國寺長老像外鑑に投じ、侍童となる、呼びて周建といふ◎義弘叛死す◎洞院公定(系圖家)入道す◎金鐘寺眞覺寂す
- 七 歳 (同七年) 直冬卒す
- 八 歳 (同八年) 義満始めて明主に好を通じ、書を贈る◎皇宮火あり
- 九 歳 (同九年) 明主、義満を日本國王に封す◎明僧道舞一如来る
- 十 歳 (同十年) 遣明使僧歸る、四書詩經集註渡る
- 十一 歳 (同十一年) 義満北山に七層塔を建つ
- 十二 歳 (同十二年) 清叟仁、寶幢寺に於て維摩經を講ずるに當り、一休大衆と共に聽講す、人皆その將來を畏る◎相國寺中津寂す◎明主番冊を贈

- 十三 歳 (同十三年) 始めて、東山慕喆攀公に就いて、作詩の法を學ぶ◎清水寺の塔焼く
- 十四 歳 (同十四年) 光殿司、東福寺の佛畫を描く
- 十五 歳 (同十五年) 春衣宿花の詩を賦し、人口に膾炙す◎義満薨す、太上天皇の號を贈る、義持之を辭す
- 十六 歳 (同十六年) 結制の日、僧侶の虚榮を憤り、二偈を作りて師慕喆に呈す◎將軍、内大臣を兼ね◎明使、義満の表を甲す◎義持使を遣はし、大藏經を求む◎天寧寺周及寂す
- 十七 歳 (同十七年) 中秋無月の詩を賦し、佳句神に入る、清叟仁につきて、外書經錄を學ぶ、謙翁が關山派の宗風を唱ふるを聞き往いて室に造る
- 十八 歳 (同十八年) 足利義持に面謁す◎興福寺五層塔火く◎最樂寺了菴寂す
- 十九 歳 (同十九年) 稱光帝即位す◎南蠻入貢す
- 二十 歳 (同廿年) 一日謙翁、吾蘊已傾倒於子然、吾無左證、故不證汝と告ぐ

廿一歳 (同廿一年)臘月謙翁寂す、後石山寺の観音に詣て、修業工夫七日に及ぶ ◎如雪、畫譜君臺觀を周文に授く、共に漢畫の巧手なり、◎建長寺火  
 廿二歳 (同廿二年)近江堅田の華叟師に投ず ◎聖因傳通院を創立す  
 廿三歳 (同廿三年)糊口に窮し、京師に歸り、香衣を製して資を得 ◎鎌倉亂を爲す◎北山大塔火く◎宥快寂す  
 廿四歳 (同廿四年)華叟と共に謙岩冲公の詩に和し激賞せらる  
 廿五歳 (同廿五年)華叟師より一休の號を受く ◎七社に奉幣して、帝の疾の平癒を禱る◎一條經嗣薨す◎將軍義持、弟義嗣を殺す  
 廿六歳 (同廿六年)宗願、養叟、華叟の怒を招く、乃ち華叟師を宥め、宗願兄を警む ◎釋典を行ふ◎高麗鞋靴と共に對馬に寇す  
 廿七歳 (同廿七年)五月廿日の夜、鴉鳴を聞きて省す ◎義持の醫師、狐をつけたりとして罪せらる◎旅亭に屋號あり◎六月大旱大に饑う◎傳通院聖因寂す

廿八歳 (同廿八年)華叟師腰痛により看護に努む  
 廿九歳 (同廿九年)十月九日、如意庵に、三十三回忌齋を設く ◎義持、明に大藏經を求む  
 三十歳 (同卅年)一日、湛堂と問答す ◎義持將軍を辭し、義量之に代る◎朝鮮王、大藏經を献す◎義持更に大藏經版を求む  
 卅一歳 (同卅一年)太上皇、佛骨を宮中に迎ふ◎後龜山帝崩す  
 卅二歳 (同卅二年)義量薨す、義持再び就職す  
 卅三歳 (同卅三年)相國寺を造る  
 卅四歳 (同卅四年)後小松院に謁し、儲位を定む ◎赤松滿祐反す、討つて之を平ぐ◎善光寺火く  
 卅五歳 (正長元年)六月二十七日、華叟師堅田に寂す◎後花園帝位に即く◎將軍義持薨し、義教嗣ぐ  
 卅六歳 (永享元年)義教征夷大將軍となる◎今川了俊、細川持元卒す◎日隆、本能寺を創む

卅七歳 (同二年) 多武峰僧亂を作す

卅八歳 (同三年) 後小松上皇落飾す

卅九歳 (同四年) 冬和泉を遊化す ◎義教使僧道滿を明に遣はす

四十歳 (同五年) 十月廿日、後小松法皇崩す、先是一休法皇に謁し、心要を述べ、

寶墨等を賜はる ◎蓮華王院を修理す ◎山徒神輿を奉して京師を侵す

◎義教比叡山を攻む

四十一歳 (同六年) ◎山徒神輿を動す ◎因幡堂萬壽寺、頂法寺火く ◎貞成親王、明

徳記、堺記、椿葉記を献す

四十二歳 (同七年) 和泉堺にありて街上一木劔を携へ、當時の僧徒を諷刺す

◎山徒乘運及五山の僧數十人を斬る ◎山徒、中堂總持院等に放火す ◎貞成親王、古今著聞集を上る

四十三歳 (同八年) 開山國師の百年遠忌を營む ◎延暦寺中堂を造る ◎八坂塔

雲居寺、法觀寺火く

四十四歳 (同九年) 源宰相の館に寓す、一日先師の印卷を燼く ◎補氏の族兵

を河内に起す ◎達磨寺を創む

四十五歳 (同十年) 銅陀坊の北、一小廬に寓す ◎新續古今和歌集を選す

四十六歳 (同十一年) 明遠智公寂す ◎持氏自殺す ◎八坂塔、雲居寺及嵯峨釋迦堂

を造る

四十七歳 (同十二年) 六月廿日如意庵(大徳寺内)に住し、廿七日より華叟の十

三回忌を營み、廿九日一偈を題して去る ◎増上寺聖職寂す

四十八歳 (嘉吉元年) 赤松滿祐、義教を弑す ◎興福寺の僧徒、東大寺を襲ふ

四十九歳 (同二年) 讓羽山に入り、戸陀寺を創設す ◎足利義勝を征夷大將軍と

なす

五十歳 (同三年) 大炊御門室町畔に移る ◎義勝卒す ◎藤原有光、尊秀王と謀

を通じ、神羅寶劍を奪ふ ◎四天王寺太子堂火く

五十一歳 (文安元年) 養叟と謀り、關山一派の、舜日峰の入寺を拒まむとす ◎

義政將軍となる ◎南朝の遣胤、兵を紀伊の北山に擧ぐ ◎藥師寺金堂大風のため倒る

五十二歳 (同二年) 二條持基薨す

五十三歳 (同三年) 土州太平を喝破す ◎賊徒財を強奪して徳政と稱す◎等持院火く

五十四歳 (同四年) 龍山の一僧故なく自殺しために數僧獄に繋がる、一休之を憂へ、讓羽山に隠る ◎南禪寺火け天龍寺火く

五十五歳 (同五年) 賣扇庵に寓す、四月嵯川新右衛門逝く ◎天下大に饑う◎妙心寺宗舜寂す

五十六歳 (寶徳元年) 吉野大塔火く◎元興寺大乘院火く◎修驗道士峰起す

五十七歳 (同二年) 佛法の墮落を慨き、規箴を作りて諸徒を警む ◎義政東求堂を營む、四疊半茶室の創なり◎夢窓國師に、佛統國師の證號を加賜す◎淺間山噴火す

五十八歳 (同三年) 大燈國師行狀の末に一偈を附す◎徳政を行ふ◎元興寺金堂火く

五十九歳 (享徳元年) 晴隠庵に遷る ◎南禪寺を再建す

六十歳 (同二年) 大徳寺火く

六十一歳 (同三年) 養叟和尚と隙を致す ◎天下奢侈の風極まる◎京師盜賊蜂起し部下驟然たり

六十二歳 (康正元年) 舜日峰の徒を喝破す

六十三歳 (同二年) 山城薪村の妙勝寺を修し、大應國師の像を安置す ◎八王寺火く

六十四歳 (長祿元年) 熙藏主春浦和尚を罵り其の徒のために害を加へられむとす ◎徳政を行ふ◎南朝の二王子を殺す

六十五歳 (同二年) 赤松の遺臣、神璽を吉野より奪還す◎道灌江戸に築く

六十六歳 (同三年) 請せられて徳禪寺に晋山す、虚堂祖翁の畫像を得 ◎義政、華亭を營み修を極む

六十七歳 (寛正元年) 先師華叟の三十三回忌を營む ◎種月寺謙宗寂す

六十八歳 (同二年) 春嵯峨に遊び、龍翔の塔を修覆す ◎龍文寺正猷寂す

六十九歳 (同三年) 八月痢を患ふ ◎雙林寺正文寂す

七十歳 (同四年)七月賀茂山に入り大燈寺に寓す、臘尾瞎臘庵に歸る。○雪舟明より歸る

七十一歳 (同五年) 後花園帝讓位。○精進院日隆寂す

七十二歳 (同六年) 後土御門帝即位。○義政遊樂佳美を極む、賦役度なし、天下亂を思ふ。○専修寺を伊勢一身田に遷す。○山徒本願寺堂宇を破毀す

七十三歳 (文正元年) 山名細川隆を生じ、京師騒然たり

七十四歳 (應仁元年)應仁の大亂起り、薪村の酬恩庵に亂を避く、瞎臘庵、兵火のために燬く。○相國寺、誓願寺、大徳寺等の諸名刹皆火く。○後花園上皇落飾。○山徒神輿を奉して京に入り、強訴す

七十五歳 (同二年)五月十五日、靈山和尚の一百年忌齋を設く、都鄙の群衆參詣するもの略の如し。○天龍寺火く

七十六歳 (文明元年)七月西兵薪村に入る、直に逃れて大和和泉の諸地を巡化す。○清水寺、長谷寺火く。○快元寂す

七十七歳 (同二年)雲門庵に移る。○後花園院崩す。○相國寺火く

七十八歳 (同三年) 蓮如、一寺を越前の吉崎に創立す。○古今傳授始まる

七十九歳 (同四年) 義政、朝鮮に屏風畫扇を贈る

八十歳 (同五年) 義政職を辭し、義尙嗣ぐ。○勝元卒す

八十一歳 (同六年)勅命により、大徳寺の住持となる

八十二歳 (同七年)薪村の虚丘に壽塔を造る。○蓮如河内に光善寺を建つ。○山徒、六角高頼と戦ふ。○安樂院焼く。○松平親忠、大樹寺を創む

八十三歳 (同八年)四月瘧疾に罹る、五月韻府類冊を呈するものあり、大に喜ぶ。○室町の行宮火あり、典籍悉く焼く

八十四歳 (同九年)九月兵を避けんがため、籃輿にて和泉の小島に赴く。○應仁の亂始めて平く

八十五歳 (同十年)如意祖塔を創設す。○廷臣俸祿充たず、朝章缺典多し

八十六歳 (同十一年)六月新法堂を龍山に營み、鉦材良工期せずして畢く具はる。○北小路行宮火あり。○義政東山に別業を營む。○義尙始めて政を執る。○蓮如、山科に本願寺を建つ

八十七歳 (同十二年)正月三日、江州刺史のために劔篋の像に讃す。◎一條兼

真樵談治要を義尙に献す◎唯一神道唱者占部兼俱侍讀となる◎義政慈照寺(銀閣寺)を建つ

八十八歳 (同十三年)孟夏、新に龍山の正門及び偏門を興して成る、七月落成

の典を設く、十一月瘡再發し、同廿一日卯時薪村に於て泊然寂す

◎一條兼真薨す◎山科本願寺成る◎蓮教興正寺を創む◎紀元二千百

四十一年、西曆千四百八十一年なり

贊曰、有摩薩眼、而可見四天下也、純公出陰界之人、  
摩薩不能窺其度內、然憤世矯時者、危言危行焉、今  
之人、叨譏評、或以爲隨波無、或以爲馳虛遠、夫有格  
外之機者、有格外之事、非墨守規中者、所可得而甄  
別焉、觀純始卒、所謂虛堂東海之兒孫也、辭世之語、  
不復誣而已、(本朝高僧傳)

## 第二章 一休の生れた足利時代

「阿松やめいどのたびの一里づか萬事がこういつた調子で、紛々たるこの浮世のいさくさを解釋し、活殺自在の心境、滑脱洒落の生涯、三尺の兒童からでさへも、何の彼のと持てはやさるゝ、彼一休は、そもどんな時代に生れた人であらうか、凡俗の輩からは、一個幫間の様な滑稽坊主と思はれて居て、その一休の一休たる所以の真骨頭に至っては、滅後四百數十年の今日に至る迄、明に發揮せられなかつたといふのは、如何にも不思議の感に打たれざるを得ないのである、彼は、果して坊間に傳へられて居る様な、たゞ面白可笑しいといふだけの坊さんであつたであらうか、或は慈悲の深い、救世の福音を傳へたところの、高德の禪師であつたであらうか、今彼が眞の面目を描き出さうとするには、事の順序として、まづ一應、彼を胚胎した所の、足利時代の状態を観察しなければならぬ。

今我國二千五百有餘年間の歴史を繙いてこれを見るに、争闘戦亂の全くな

かつた時代といふものは、まづ殆んど見當らない。その中でも最も暗黒なる時代といへば、吾人は先づ指を足利時代に屈せざるを得ない。申すも畏いことではあるが、萬世一系の王家を二つに裂いて、猜疑紛争の絶えた時なく、兄弟は鬩ぎ、父子は争ひ、強奪、兇暴、反撥、凡そこゝろいふような罪惡は、足利十四代を通じて、殆んど止んだことはなかつたではないか。吾人は史を讀んで茲に至る毎に、卷を閉ちて、世道の頹廢が、是れほど迄に甚しかつたかと、慨嘆せずには居られないのである。

建武中興の浩謨は、後醍醐帝が、櫛風沐雨の艱難と、熱烈なる忠臣義士が、濺いだ血の涙とに依つて、夫の暴逆傲奢を恣にして居た北條氏をば、一斧鉞の下に打ち壊した結果であつて、永く麻のもつれた様に、紊れて居た天下は、之に由つて四海波穩に静まり、天下萬姓が、再び日月の光を仰ぐことが出来たのである。然るに中世の暗黒を照破したる一大光明として、永遠に其光澤を垂るべき筈の中興の大業も、やつとその緒についたと思つたばかりで、まだ一年と經つたかたゝぬ中に、あはれ土崩瓦解の運命に陥つたのは、全く時の氣運

の然らしめたところであるとは云ふものゝ、亦主として、帝政の機宜を失つて、一般の輿望を繋ぐことが出来なかつたゝめではなからうか。足利氏は、この缺陷に乗じて、例の姦譎な權謀術策を弄し、容易く天下を横奪したので、彼が一度反旗を擧げるや、天下の人心は、翕然として、恰も春潮の沸くが如く之に赴いた。この事實に就いて考へて見ても、當時の人心が大義名分などの觀念に乏しく、全く勢力に奔ると云ふ風に、非常に腐敗墮落して居たことが明白である。故に當時秋霜の様な、義烈なる忠臣義士などが、雲の様に起つて、大に王事の爲めに奔走したけれども、到底南風競はずで、世は足利の天下となつて了つたのである。

凡べて敵國外患なければ、國常に亡ぶといふ古語の如く、南朝衰弱の時は、北朝が漸く内亂を生ずるの時であつた。戦鬪に勝利を得た足利武士は、山河郊野を跋渉した足を以て、花の都に這入つて來ると、荒々しい鬼のやうな心も、浮華な都の風に酔はされて、腐敗せずには居られなかつたらしい。彼等は、粉黛せる公卿の妻女が、色香に迷ひ込み、財物を賭して之を購ひ、公卿もまた、勢

力ある武士と結託するのが、一身の利益であるので、王昭君が北胡に下るの心地で以て、その結婚を許すものもあつた。甚しいのは、公卿の妻子を奪ひ合つたり、或は公卿の妻女が、反つて恐れ嫌つた北狄に通ずると云ふやうなこともあつて、之が爲めに同族相争ひ、同門相排した例は、當時に於て少しも珍らしくないことである。又諸國から集つて來た剛健質朴の武士は、陣中の徒然なるを慰める爲めに、恣まに財物を掠奪する位の沙汰ではなく、博奕の風は、注んに行はれ、或は武士の魂とも稱すべき刀劔を賭し、或は明日の戦闘に要する甲冑などをさへ、脱ぎ捨てること云ふ風になつた。であるから、一旦緩急の場合にも、甲冑を失ひ、刀劔を持たない武士は、戦ふに術なく、唯鯨波を揚げる仲間に加はるに過ぎないといふ滑稽も演せられたのである。斯様に、鐵のやうに堅かつた武士も、忽ち海月のやうに柔かになり、大義とか廉耻とかいふものは、全く彼等の興り知らざるところであつて、唯彼等の眼中に映したものは、勢利ばかりである。故に彼等の去就は、常に旗色によりて定まり、勢利のある處、蟻の甘きにつくが如くで、敗け色が見えれば、數萬の軍勢も、一夜の中

に雲散して了ふと云ふ風であつた。實に彼等の順逆反覆するのは、恰ど秋天に於けるバロメートルの様であつた。足利全代を通じて、終始北は陸奥の隅より、西は筑紫のはてに至るまで、紛々たる戦亂の災禍が絶えたことのないなかつたのも、是に原由するのである。是に於て、嘗て北條泰時、時頼によりて養はれた、鎌倉武士の遺風と云ふものは、蕩然として跡を天下に滅してしまひ、世は再び暗黒なる光景を呈するに至つたのである。今當時道義の廢頽が、果してどんな状態であつたかを窺はんが爲めに、茲に二三の例を擧げて見やう。

嘗て足利の幕臣土岐頼遠といふものが、途中光嚴院の駕に出遇つたけれども、彼は馬をさへ下らなかつたので、前驅は、田夫、院の啓行を知らざる乎」と叱り付けた。すると頼遠却つて怒り、院乎、犬乎、我之を知らず、若し犬ならば之を射んとて、部下のもの共をして、乘輿を圍んで射さしめたと云ふことである。あゝ、微々たる臣下が、兎も角も時の上皇に對して、故意にこんな大不敬を敢てして、毫も恐懼の念のないことを見ても、當時一般の人心には、大義名分と



云ふ觀念などが、些しもなかつたといふことが分るであらう。既に君民の間にさへ、道義の念が缺けて居たのであるから、況して親子骨肉の間は、勢利の爲めに、矛を以て争ふをも辭しないとは、寧ろ當然であらう。見よ、足利氏が幕府を建てる爲めに、多年苦樂を共にして來た尊氏と直義とは、眞に骨肉の間柄でありながら、區々たる權勢を争ふの心から、干戈を以て相闘ぎ合ひたる末、直義は兄尊氏の爲めに毒殺せられたり、又尊氏と直冬とは、親子の關係であるのにも拘はらず、直冬を征伐したといふやうな事實は、明かにこれを證據立て、居るではないか。斯様に君主と臣民との間に、大義亡び、親子骨肉の間に、人倫失せ、それで以て、どうして、主従の間や臣下の間に、美はしき關係を見ることが出來やうか。要するに、足利氏は、素天下を治むる爲めに起つたのでなくて、全く天下を欺いて之を横奪したも同様である。されば、天下の大道を蹂躪して、餓狼の慾を逞うする様な足利氏を、上に載いた時代に於て、私慾、暴横、反逆、争鬪などの罪惡を禁止しやうとしても、到底行はるゝものでない。然り、實に當時の社會は、暗憊として百鬼夜行とでも云ふべき状態であつ

たのである。

然るに、三代將軍義満の世となつて、南北兩朝の和睦が成立し、幕府を室町に開いて、天下を一統するの緒に着くことが出來たが、是に就いて、最も與つて力のあつたものは、即ち彼の細川頼之である。彼は不世出の宏材を以て、麻の如く紛亂した所の天下を治め、能く幼主を補佐して、兩朝の渾一を謀り、以て神器を萬世に傳へ、老臣宿將を鎮壓愛撫し、賢良を進めて、姦邪を遠ざけ、財力を養ひ、風俗を正すことに心身を委ねたのである。しかし、滔々として腐敗し盡した大勢に反抗して、双手を以て能くこれを防止することが出来るものではない。彼は戒法五章を出して、士風を戒飭し、制法三條を布告して、恢に士氣を刷新しやうと謀つたけれども、恰ど一掬の水で以て、車薪の火を消し止めやうとするのと同じことで、何の甲斐もなかつたのである。彼は即ち一計を案出して、佞坊又は童坊と稱へ、異裝異巾を着け、大小二刀を佩び、法師の風體をした者六人に命じて、營中を徘徊し、義満などに、諛をなし、媚を呈すると云ふ様な醜態を演せしめた。實は是れに依りて、時人をして、阿諛諂佞の風を

矯めさせる手段としたのであつたけれども、暗黒の裡に眠れる社會は、何等の反響をも與へなかつた。彼は決然として、冠を弊履の如くに擲げ棄て、光風霽月を友とすべく、隱退した。彼が滿腔の感慨を吐きたる有名なる詩句、

人生五十愧無功、

花木春過夏己中、

滿室蒼蠅掃難盡、

起尋禪榻臥清風、

と咏したのを見ても、當時の狀態の一般を想像することが出来るであらう。已に精神的に腐敗した暗黒世界は、外界の浮華傲奢の方に向つて奔るのが、寧ろ自然の勢である。我國に於て、足利義滿や、義政ほどの豪奢を極めたものは、他に殆んどなからう。彼義滿は、公卿的榮華を以て、幕府を飾る爲めに、壯麗なる花の御所を室町に構へ、又鎌倉の五山十刹に倣うて、寶幢寺を造り、相國寺を創め、そして三百六十有餘尺もある七層の高塔を樹て、一世の人を驚倒せしめた。彼はまた之にも嫌らないで、更に北山に地を相し、園池を設け、麋鹿を放養し、之を名づけて鹿苑院と稱し、又三層の樓閣を築き、その瀟洒綺麗、實に天下無雙の壯觀で、特にその壁柱戸牖には金を塗り、美を盡し、華を極め、

其の費用ばかりでも、無慮百萬貫の巨額に達したといふ事である。そうして彼は、日夜此の内に起臥して、猿樂や田樂、舞樂、茶の湯などの豪遊逸興に耽つたのである。かやうな浮華病は、たい彼が一生の間ばかりに止まらないで、次から次へ遺傳して、代々一般の俗となつた。就中義政に至つては、彼にも勝つて、結構壯麗、光彩燦爛たる銀閣寺を建て、其の高倉邸の障子を作るに、一間に永樂錢二萬を費したといふことである。二萬の永樂錢と云へば、當時二百石の米を買ふことが出来たのである。又花の御幸と稱する遊幸には、百味を以て百果を作り、相伴の者には金の箸を與へ、供の者の箸は沈香木で作し、金でもつて逆鱗口をこしらへると云ふ風で、其浮華豪奢を極めた事と言つたら、全く吾々の想像の及ぶところではないのである。こゝにいふ風であつたから、國用が不足するばかりで、守護より二十分の一を取る制も廢り、衆民から四公六民の租を取る制も破れ、臨時の課役や賦金は、頻々、徵發せられて、殆んど前代に十倍する様になつた。しかも亦市民からは、倉役といふ名で、債を募り、それが年四回から八九十回にも及ぶことがあつた。そうしてその上に、之を

償還する方法が立たないと、徳政と名づけて、一切の貸借を帳消しにし、すべての権利義務を滅却して了つた。往昔、利上に利を附し、其弊の嵩さむに當つて、帝王の徳を布いてその窮苦を救うたことはあつたけれども、政府自身が借金をして置いて、徳政と云ふ美名の下に、これを踏み倒すといふのは、まゝ何たる暴政であらう。

斯くの如く、蒼生の膏血を絞り取つて、己が浮華驕奢の料に供した義滿や義政は、己に眼中天皇もなく、天下萬姓もないのである。彼義滿は、傲然として、天子は我が爲めに立てられ、朝廷は我が爲めに保たれてあるのではないかと怒鳴つて、遂に太政大臣を強請し、其の儀禮の如きも、亦上皇に擬したといふ程の没分曉漢で、加之明王と交通し、日本國王の號を得て、揚々得々として居た程の呆氣者であつた。そうしてその死するや、天皇はこれに太上法皇の尊號をさへ諡られたので、以て見ても、(縦令義持がこれを辭したにせよ)彼がどんなに暴威を極め、僭越を恣にしたか、わかるのである。

要するに、足利時代の中で、義滿の代が、最も盛榮を極めたとは云ふものゝ、天

下は唯その一時の虚威に服したに過ぎないので、決してその善政に歸服したのではない。換言すれば、國民は、彼が燦爛たる榮耀浮華の光に打たれて、一時眩惑したといふに過ぎないのである。そうして上の好むところ、下これより甚しきものありで、世は舉げてこの浮華奢侈の惡風に染み、國民は蕩然として腐敗の渦中に捲き込まれたのである。ところが、一方では又、九州や、四國あたりの浮浪の徒、志を中國に得られないので、去つて運命を海外に賭するものが、勃興して來た。彼等は、鬱勃として燃ゆるが如き不平を、叢爾たる内地で遣ることが出來ない爲めに、之を海外に向つて放つたのである。夫の倭寇の名が、鷄林の小兒の泣を止めたこと云ふ事實に徴しても、其威勢の猛烈であつたと、その侵害の猖獗であつたことが、わかるであらう。彼等の寇する所、風に草木の靡くが如く、財物は奪はれ、家屋は焼き拂はれ、婦女子は擒にせらるゝと云ふ仕末で、朝鮮支那の沿岸は、その侵掠の爲めに、人烟全く絶えたところもあつたといふ程である。是に於て、朝鮮の恭愍王が、自ら五軍を督して、倭寇を防禦するに努めた甲斐もなく、却つて大敗し、爲めに京師は震撼して、都

を遠く鐵原に遷さうとし、倭寇は進んで威鏡道の北青を蹂躪するに至つた。彼等の眼中には、將軍義滿もなく、鷄林八道もなく、實は大明國をも空うして居たのであつて、その勢の凄しかつたこと、言ふものは尋常一様でなかつたのである。

國民の多くが、天下一統の下、浮華快樂の夢に耽つて居る間に、外に於て、斯んな大騒動を演じて居た者がある計りでなく、内國に於ても、亦之にも劣らない所の自稱豪傑輩が跋扈して居たのである。當時「らつば」といふ野武士があつて、滿腔の野心を抑へきれず、諸國を横行して、強盜となり、窃盜となり、亂暴狼藉に至らざるところなく、その勢の猖獗なることは、諸侯でさへも、之を征服することが出来なかつたといふことによつても、知ることが出来る。たゞそればかりではなく、彼の北條氏直が、二百人のらつば賊を扶持して居たなどは、即ち諸侯が、却つてこのらつば賊を利用して、敵國を苦しめる利器としたといふ證據とするに足るではあるまいか。

是を以て見れば、燦爛たる外形上の泰平を装うて居た足利幕府は、恰ど火山

の上に築かれた家屋の如く、其地盤に不平の炎が鬱結して居つて、いつでも噴出しようとして居たのである。故に義滿の死は、其動搖の動機となつて、鎌倉に於ては持仲と持氏とが争鬭を始めるし、室町では義持と義嗣とが兄弟戦争を起す様になり、是れから天下は鼎の沸くが如き状態となつて、紛争、反撥相尋いで起り、其中葉以後に至つては、天下禽奔獸走の状態で、終に應仁の亂に至つて、轟然爆發したのである。

吾人は茲に至つて、一疑問に打たれざるを得ない。それは外でもないが、斯くの如き暗黒時代に於ても、國民思想の反影たる文學は、全く缺けて居なかつた。即ち足利學校は上杉憲實の手に依りて再興せられ、東西の士にして、茲に學ぶものゝ多かつたとは、決して王朝時代にも劣らなかつた位、且文學上の製作に於ても、流麗典雅なる大傑作、『太平記』あり、又其調の雲烟繚縹にして、其文章の瑰麗なる謠曲などがあつて、優に足利時代を飾るに足るのである。又時代の光明とも云ふべき宗教も、決して衰へて居なかつた。彼の尊氏の尊崇歸仰したところの夢窓國師の如き偉僧が出て、禪宗を汪んにし、義滿の如

きも亦大に佛教の外護に力を致し、當時鎌倉京都に於ける五山十刹は、文學上の實權を掌握して居たばかりでなく、當時の政權に對しても、多大なる勢力を占めて居たのであるからして、足利時代は、全く精神界の光明を失つたと云ふことが出來ないのである。已に文學もあり宗教もあつて、共に相應の勢力を有して居たこの時代に於て、社會の表面は何故にこのやうな慘憺たる暗黒な状態を現出したのであらうか。この疑問は或は當時の宗教界の真相を窺つて、それで以て解決することが出来るかも知れない。次に「一休以前の佛教状態」といふ一章を設けたのは、主として、一休を生み出した時代の、宗教界の有様を知るの必様からでもあるが、又、聊かその間の消息を明にしやうがためでもある。

苦中樂 (狂雲集)

酒喫三盃未温唇、曹山老漢慰孤貧、直橫身火宅中看、一刹那間萬劫辛、

樂中苦

此是羅盤曾所經、麻衣草坐六年情、一朝點檢將來看、寂寞靈山身後名、

### 第三章 一休以前の佛教状態

佛陀大悲の法雨が、始めて我國土を濕す様になつてから、今日に至るまで、上下茫茫凡そ千三百有餘の星霜を經、此の間に、十有餘の宗派の枝葉は、森々として繁り、普く群生を化益した所の功德といふものは、げに無量無邊である。されど、盛衰消長時には社會に害毒を流したこともないではない。今其の弊害の起る所以を考へて見るのに、或は朝廷が佛教を優遇し過ぎたのも、その一原因であらう、或は一般に腐敗して居たその時代の空氣に感染したといふことも、其一原由であらう。斯くの如く、内外諸他の原因が、相呼應して、滔々たる腐敗の潮流をなしたに違ひはないが、しかも其の根本的大原因は、佛教が始めて我國に傳へられた動機そのものにあること、と思ふのである。即ち佛教を我國に始めて傳へた所の趣意と、之を信奉するに至つた精神とが、暗々裡に、我佛教の遺傳的特性となつたのが、その主なる原由であると思ふ。凡て宗教は、たゞ自然の儘に放置して、決して傳播せらるゝものではなくて、

必ずその宗教の眞髓たる、信念の發洩に由らなければならぬことは、特に普遍的宗教の明證する所である。夫の初期基督教が、暗黒なる古代羅馬を風靡するに至つたのも、もと一ボーロが、身を犠牲に供して、その福音を宣傳した所の、彼が熱烈なる信仰の發洩に過ぎないのである。又印度の佛教が、佛滅後三四百年頃より、峻険なる葱嶺を踏破して、遙に中央亞細亞地方から、支那にまでも傳播せられ、或は海を渡り山を越えて、錫蘭、緬甸、暹羅地方に、佛陀の法音を宣布せられた所以も、全く當時阿輸迦王の様な、摯實熾盛なる佛教の信念に基因したことは、決して疑ひのない事實である。要するに宗教の宣布せらるゝ所以は、一般の生靈の心中に、活ける信念の種子を扶植して、始めてその宗教の枝葉が、森々として繁りに茂ることが出来るのである。然るに我國に、最初佛教の傳へられた原由を考へて見るのに、少しく是と趣きが異つて居る様に感ぜらるゝのである。そは何故であるかと云ふに、欽明帝の十三年に、始めて百濟の明王は、其臣西部姬氏等をして、金銅釋迦佛の像及び經論幡蓋などを献上したのが、抑も佛教が我國に傳はれる嚆矢であつた。尤もこれ

より前にも、支那や三韓と交通の頻繁であつた西陲の地には、佛教といふものはどんなものだ位は、心得て居たものがあつたかも知れないし、又繼體天皇の十六年には、梁の司馬達等といふものが、大和に來て草庵を營み、佛像を安置してこれを禮拜して居たといふこともあるが、それはまあそれとして置いて、さて佛教を我國に傳へた百濟王の眞意は、果してどうであつたらうか、決して宗教的傳道のためではなく、當時の國勢上の政畧から出たものらしいのである。いまその大法流通の徳を讃せる上表の文を見るに、その中に、

此法諸法の中に於て最殊勝たり、解り難く入り難し、周公孔子も尙ほ知る  
こと能はず、此法能く無量無邊の福德果報を生じ、無上菩提を成辨す、譬へば人の隨意の寶を懷きて、須ある所に逐ひ、情の儘なるが如し、云云。

とある。斯くの如き上表文に接した當時の我が國民は、如何に之を解得し、之を奉體したであらうか、是れ實に重大なる問題である。何となれば宗教はその國の風土氣候政治風俗等の外面的事情と、其國民の宗教的性情の內面的

事情とによりて、其特徴を發揮される者であるからである。願ふに、我國に於ける太古の民は、餘他の民族に比較して、多少宗教上の觀念に乏しかつたことは、一般の學者の首肯する所で、夫の神道と云ふのも、もと天然崇拜と祖先教とが合一せられた神話の傳説に過ぎないので、則ち我が國土を創造し玉へる我民族の祖先の大靈か、天地の間に存在して居ると信じて、之に向つて祈禱を捧げ、之を祭事すれば、必ずその靈驗があると云ふ、極めて幼稚淺薄な宗教的思想を抱有して居た國民の間に、佛教は、突如として輸入せられたのである。故に彼れ等は此の上表文に於ける「解り難く入り難し、周公孔子も尙ほ之を知ることを能はず」と云へる、幽玄深遠なる教理的方面を疎外して、唯、無邊無量なる福德果報を生ず」といへる、現世利益の方面に重きを置いたので、當時疫病が非常に流行した爲めに、排佛家は是を以て、國神の譴罰であると云つて、佛像を焼き棄て、しまふ、崇佛家は、却つて是れ佛像を燒棄てた爲めに、佛の冥罰の然らしめた所だと辨じた事實に就いて考へて見ても、當時國民の宗教心が、餘り淺薄で現金的であつたことが明かである。斯様に我國に佛

教を傳へた所以は、唯形式的であるのみならず、亦之を奉體した所の精神までが極めて幼稚で、物質的形式的であつた。之れが我國宗教の遺傳的特性となつて、永遠に腐敗の源泉となつたのであるまいか。現に文化發展の頂上にある明治昭代に於てさへ、宗教と言へば、たゞ一概に、物質的形式的祈禱のものであるとして解せられ、且つその方面が最も盛に行はれて居るではないか。然るに、當時新來の佛教と、我國固有の神道とを融合して、政教一致の根柢を築くに與つて力のあつたものは、即ち聖德太子であつて、太子が制定せられた所の憲法十七ヶ條は、此精神の煥發せられたるものであつた。孝德天皇の朝、族制政治の弊害を打破して、國家を統一したところのあの大化の革新以後に至つては、佛教は全く國家的となつて、特に奈良朝の頃、行基、良辨などの高僧が出て、爾後歴代の天皇、佛門に歸し給ふものが多かつた。故に我が國初期の佛教は、全く朝廷佛教であつて、佛寺を建て、佛像を造り、専ら祈禱祭式を行ふ事が、當時佛教の主眼であつた。そしてその守護の利益を蒙り、災禍厄難を除滅するために、金光明經だの、仁王經だの、般若經だのといふお經が、宮中

を始めとして、諸國到る處で盛に誦讀せられたり、又莊嚴盛大なる儀式を設けて、祈禱を執り行はれたので、要するに當時の佛教は、祈禱除災を以て主眼となし、全く形式的物質的宗教であつたのである。併し、來世往生の様な宗教的信仰は、全く其萌芽だもなかつたといふのではない、推古帝の朝に造られた、法隆寺金堂の釋迦佛像光背銘に、

蒙此願力、轉病延壽、安住世間、若是定業、以背世者、往登淨土、早昇妙果、云云、とあるのを見ても、未來往生の觀念がおぼろげながら存して居たとは疑ひない。しかし、言ふまでもなく、こんな思想は、決して深邃なる宗教的信仰より發つたものでなくて、現世に於てその利益を享受することが出來ない爲めに、來世に於て之を獲得せんとするに過ぎないのである。さればその究極する所は、則ち祈禱除災の觀念にあるので、其弊害に至つては、彼此更に擇ぶところがない。奈良朝に至つて、祈禱佛教が最も盛榮を極めたと共に、其の弊害もまた劇大であつた。特に元正帝の如きは、元明帝の爲めに、冥福を祈らんとて、華嚴經八十卷、大集經六十卷、涅槃經四十卷、大菩薩經二十卷、觀音經二百卷

を寫し、二千六百有餘人の僧尼を請じて、齋を設け、また金泥の願文を作りて、前代の帝王の冥福を祈ると云ふ風に、祈禱佛教は天下を風靡するの勢となつた。従つてその弊害はますます甚しくなつて來て、妖僧横行して邪説を唱へ、巧に愚民を惑はし、寺院佛像盛に築造せられ、爲めに國用は窮乏を告げ、佛教は全然官教となりて、腐敗し、墮落し、其極は、玄昉や道鏡の如き、政教混同の大弊害を醸す様にさへなつた。要するに奈良朝の佛教は、専ら祈禱除災を主眼として、多く我が上流社會に行はれ、その外形的佛教の光明は、燦爛として輝いて、一時天下の人目を眩せしめたけれど、未だ下層社會に感化を與へることは殆んどなかつたのである。

此の時に當つて、政治的中心が、奈良の都から、平安に遷移すると共に、一新旗幟を樹てたものは、即ち傳教と弘法とであつた。傳教は夙に、奈良佛教が、帝城に出入し、貴族に倂し、豪奢驕慢を恣にした爲めに、腐敗墮落を極めたことを看破して、自ら叡山に本據を占め、山佛法と稱へて、以て夫の宮佛法、貴族佛法に反對し、廣く衆生を教化するに努め、又弘法は、即身成佛の玄理を説き、そし



てその現世祈禱の方規は、天下を風靡する様になつた。しかし後代に至り、この山佛法も、その末流の徒に依りて、遂に宮佛法貴族佛教となつてしまつた。即ち彼れ等は、徒に鎮護國家を標榜して、威權を弄し、輿馬牛車に乗りて宮城に出入し、忍辱の衣の下には甲を撰ぎ、三世諸佛の幢相と云ふ袈裟で以て圓顛を裏み、遂に干戈を動すの魔道に墮落して了つた。又一方は、平安朝廷の道場たる東寺にあつて、宮中に出入し、その加持咒法を以て、病魔邪魔を禳ふと云ふ密教の事相を振り廻はして、迷信のバチルス<sup>バチルス</sup>を天下に瀰漫させ、實に前代に勝るの弊害を後世に残したことは、歴史上燎かな事實である。

然るに、清新なる氣運は這の裡に胚胎せられ、法然、親鸞、榮西、道元、日蓮等の諸大明星が、平安の末造に出現して、天下の暗黒を照破するに至つた。實に彼等は、此類敗滅亡の淵に沈まうとして居る正法を興隆して、永く鎮されて居た佛教の眞光明を發揮せんが爲めに、平安の末より鎌倉の初めにわたり、法鼓を亂打して一世を聳動せしめたのである。その壯觀は、我國宗教史上、未曾有の出來事であつて、其結果は、從來たゞ祈禱を行うて、求福禳災を主とした形

式的貴族的佛教が、こゝに一變して、箇人の安心立命を重んずる、平民的實際的宗教となり、鎌倉時代の中頃、天下の生靈は、此新光明に浴して、樂しき泰平の夢路を辿ることゝなつたのである。然れども、盛なるもの必ず衰ふる世の常として、さしも隆盛を極めた鎌倉佛教も、漸く衰へて、世は再び暗澹たる戦亂となるの兆は現はれ、足利時代は、正にその過渡の時に際して起つて來たのである。

然らば、足利時代に於ては、各宗派の狀態が、果してどんなであつたらうか。南都にては北條時代の初に明慧宗性、解脱等の諸大徳が出て、大に宗風の振張に努めたけれども、唯學匠として貢献した外は、さして影響もなく、足利時代となつては、空名の存するに過ぎないといふ有様であつた。又叡山の方は、再び舊時の盛觀を見ることは出來なかつたとは云ふものゝ、山徒の横暴は毫も減らないばかりでなく、日吉の神輿を奉じて、強訴喧擾することは、殆んど止んだ時がないといふ始末、是れから山徒と三井寺との紛争が起つて、遂に三井寺を焼き拂つたといふやら、南北の紛争やら、梨本青蓮二門の紛争やら、

叡山東寺の紛争やら、此くの如き事件が相次いで起つて、世を騒がし、却つて叡山の荒廢を急がしめた。特に新宗教に對する態度は、嫉妬排毀の念が旺んであるところから、或は妨害を加へたり、或は流竄に處したり、或は坊舎を毀つたり、寺院を焼却したり、卑劣極まる亂暴を公行して憚らなかつた。その觀面の罰として、應仁の亂後、織田信長の爲めに、全く焼き滅されたのは、寧ろ當然とも言ふべき事である。

翻つて新宗教の狀態を見るに、淨土宗、眞宗、日蓮宗は、易行の大道を開拓し、その熱烈敬虔なる信念を以て之を宣傳するや、天下靡然としてその教化に沿し、鎌倉時代より引つゞいて、上は月卿雲客より、下は田夫野叟に至るまで、普く行はれるに至つた。これ等の各宗、それこれ一盛一衰はあつたが、概して漸次成功の域に向つて進んだのである。しかし、この外に、尙足利時代に於ける佛教の代表者とも稱し得べき程に、勢力のあつたのは、禪宗である。禪宗の我國に傳はつたのは、遠く奈良朝以前であるが、謂はゆる臨濟禪が我國に傳はつて、漸く盛んになり、本邦禪宗の開立を見るに至つたのは、榮西が宋から歸

つて來てからの事である。當時平安佛教は、王政の弛廢と共に、腐敗墮落の極に達して居たところへ持つて來て、不立文字教外別傳を稱へ、紛々たる形式的佛教の表に脱出して、以心傳心の新福音を以て、社會の腐敗を刷新しようとしたのである。その後大覺禪師が來る、時頼が建長寺を建て、これを請する、佛光國師が時宗の請に應じてやつて來る、圓覺寺が建つ、と言ふやうな工合で、大に武家の歸依を受け、その繁榮を極める様になつた。然るに榮西の滅後、道元は宋から歸つて來て、愈々その教勢を張るに至つた。彼は粉々たる俗塵を避け、閑地の道場に就きて、清新なる禪風の眞面目を發揮し、普く化益を僻地に布いた。是れ所謂曹洞禪である。故に後年に至つて、曹洞禪は多く世の權威勢力を度外視して、専ら僻地に行はれたのに反し、臨濟禪は、兎角權勢に阿附し、事相を傳へて、鎮護國家の祈願をなすの餘臭があつた所以は、全くその宗祖たる榮西及び道元の遺風に原由するのであるまいか。

臨濟禪の法脈は足利時代となつてますます、隆旺を極め、殆ど全く武族の傀儡師となつて、政權に干與し、俗務に執掌し、物質的榮譽華奢に耽溺して了つ

た。特に義満時代に及んでその絶頂に達し、禪宗の眞面目を失ひ、再び平安佛教の弊窩に陥つたのは、是れ實に我が邦佛教の遺傳的痼疾とでも言ふのであらうか。蓋し足利尊氏が、北條氏の轍を蹈んで、深く禪宗に歸依したのは、實に心靈上の安慰を得んか爲めばかりではない。時の禪僧が足利氏覇業の樞機に參與して、大に効を奏したからである。その本尊と仰かれて居たのは、則ち當時の傑僧疎石禪師であつた。疎石は京都禪宗の基礎を大成した。夫の聖一大應二國師の後に、大に禪宗の旺盛に就いて力を盡し、特に後醍醐天皇が、その道聲を聞き召されて、禁闕に入らしめて佛心宗を説かしめ給ひ、後足利尊氏の深き歸仰に依つて、天龍寺の開山祖となつた。之より禪宗の勢力は、旭日の天に登るが如く、獨り宗教界のみに限らず、亦社會上に於ても大に權勢を弄する様になつたのである。又室町幕府の三代將軍たる義満は、南禪寺の名僧妙葩を延いて北山の別莊に請じ、義満自ら着けて居た金襴の袈裟をこれに着せ、自分は妙葩の袈裟を取つてこれを着け、甚しきは、妙葩の靴をさへ執つたといふことである。あゝ夫の眼中王者なく、天下萬姓を一呑みに

する程の傲慢なる義満をして、こゝに至らしめたる妙葩の力も、亦偉なりと言はなければなるまい。たゞそればかりではない、義満自ら勸財して、相國寺を建て、後不幸にして烏有に歸するに當つて、再び諸國に令して木石を献せしめ、段錢を課して遂に七層の高塔を起し、實に天下の壯觀を極め、南北の僧千人を請じ、自ら法會に臨んで塔供養を營んだ。此時鎌倉五山十刹に倣つて、京都の五山十刹を定め、妙葩を僧録司として天下の僧尼を司らしめた。後、一代の華美を盡した所の夫の金閣寺は、建立せられ、又義政の銀閣寺が築造せらるゝに及んで、禪宗の旺盛は其極點に達したのである。

されど翻つて思ふに、不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛の佛心宗は、區々たる世の榮華に迷はず、權威に媚びず、一切の形式的執着を脱却し、前に釋迦なく、後に彌勒なし底の、大悟徹底を得むとするのが、其本旨ではなからうか。位階勳爵何ものぞ、浮薄な精神に寫つた影に過ぎないではないか。金錢財寶何ものぞ、卑劣な心の中に生へた一種の腐菌であるのである。されば影の様な權勢に溺れ、腐菌の様な財寶を追求して、一時燦爛たる外觀に迷うた當時

の禪宗は、全く精神の死んだぬけがら禪であると謂はねばならぬ。吾人は夫の道元禪師が時頼將軍よりの優渥なる券状をつき戻し、後嵯峨帝より下賜せられた紫衣を三度まで辭退して、一向に化を草薺に垂れた所の、高潔な徳を追憶に堪へないのである。之に反して、夢窓國師の如き、又普明國師の如き、名聲噴々たる高僧が、倨傲無頼の尊氏や、豪慢不避の義満の傀儡師となつて、彼等をして兇暴を恣にせしめ、萬世不滅の汚點を歴史上に残さしめたのを、惜しむと共に、その徳に疑を挟まざるを得ないのである。故によし文學藝術の衰微に赴くを支へ、或は内政外交上に多少の効績があつたにもせよ、一世の浮華榮譽に心酔して、旺盛を極めた足利時代に於ける臨濟禪は、最も腐敗墮落したものであると斷言するに憚らないのである。

かやうに足利時代の宗教界を通觀すると、淨土宗や、真宗や、日蓮宗のやうに、社會の下層に向つて、福音を傳へて居た者は別として、當時社會の表面に立て居た、臨濟宗の如きは、實に宗教として、その本來の面目によつて、その天職を盡して居たのではなく、たゞ形式虚儀の一面を擴大し、口を祈禱除災に藉

りて宮庭柳營に出入し、權勢に阿附し、野心と迎合し、寧ろ足利の暴政に油を注ぐとがあつても、これを諫止しこれを善導して、少しでも世を濟ひ民を利するといふやうなことはしなかつたのである。即ち足利時代には、宗教があつた、文學や政治の方面へまでも巾を利かす程の宗教はあつたが、借しいかな、たゞそれは宗教の形骸が、文學や政治と相交渉したのであつて、宗教の精神は、全く抜けて居たのである。是を以て、折角巾を利かせて居ながらも、時の社會の敗徳亂倫腐敗墮落を救濟するどころか、宗教自身が、またその渦中に捲き込まれて、遂に能く宗教の宗教たる眞面目を發揮することが出来なかつたのである。而して一休は、實にこの宗教無功德の時代に生れたのである。

佛誕生 (狂雲集)

三世一身異號多、何人今日定諦訛、婆娑來往八千度、馬腹驢胎又釋迦、

佛成道

天上人間稱獨尊、今朝成道受誰恩、分明稱子流星眼、便是靈臺的々孫、

佛涅槃

滅度四天老釋迦、他生出世到誰家、二千三百年前淚、猶洒扶桑二月花、

## 第四章 一休の前半生

## 一、彼が爲人

人は假面を被つた秘密的動物である。人間の皮一枚の下には、靈妙不可思議の神機が潜んで居て、常に神出鬼没、到底繩墨の見で之を看破することは困難であるのみならず、自分で自分の顔を知ることが出来ない様に、自分で自分を知らぬことさへも中々困難な事である。況して、彼の驚天動地の偉業をなし遂げた英雄豪傑に至つては、恰も東坡の詩にある、横看成嶺側成峰、遠上高低各不同、不識廬山真面目、只緣身在此山中」と同様な感なからざるを得ない。されば苟くも人の真面目を看破するには、その虚偽なる假面を剝がして見なければならぬ。凡て人を赤裸々にして見ると、恰も小兒のように極めて無邪氣な、天真爛漫なものであつて、彼の一舉手一投足も、猶ほその秘密を語りその機微を暴露するのである。

今、一休の經歷を叙述するに先ちて、吾人はまづ、彼は如何なる人であつたか、

又彼は如何なる天職を負うて居たか、その大體を知るの必要がある。しかし、吾人の觀たところでは、凡てその真面目を看取することの難きこと、彼一休の如きものは、甚だ稀であるやうに思はれる。或は彼の生れた時代が恰かも暗黒なる大戦國時代の前であつたために、歴史的證跡は多く兵燹にかゝつて湮滅して了つたといふやうなこともあるであらうし、或は又當時、俗僧輩の群を脱出し、權勢に阿附せず、名利を追はず、二束三文の安坊主でさへ、師號を賜つた時代に、身は時の帝の孽子に生れ、求めて得られないものゝ無い境界を捨て、一簑一笠、偏に己れの修養と世の教化とに身をやつして居たところの彼は、自然表だつた記録に書き遺されるといふやうな機會も少なかつたらうし、又そんなことは、彼の本意ではなかつたのであらう。従つてたゞ纔に『狂雲集』『一休和尚行實』『同年譜』位について、彼が面目を窺ひ得るだけで、その他に種々なものもないではないが、殆ど全く、後人の捏造に出た奇談怪説ばかりであつて、到底講釋師や、落語家の材料以上の價值は認められないのである。故に彼が八十八年の生涯、恰愴な頓智小僧より、叢を啼つて梵天に

捧げ、泊然示寂したまでの事蹟について考へて見るに、彼は慈悲深き高德であつた様でもあるし、冷淡極まる法師であつた様でもある。憂法慨世の革新者のやうにも見えるし、滑稽洒落な輕薄漢の様にも見える。夫の『狂雲集』は實に彼が暖皮肉であつて、又以て彼が真髓の寫眞と云うても善いと思ふが、今此詩集を繙讀するに、才華亂發、應接に遑あざらしむるが如きものは則ちこれありと雖も、實は憂法の精神と熱誠なる訓戒とがその大部分を占めて居て、彼の颯爽滑稽の面影は、あまり見えないのである。又彼の『骸骨』の如き、『假名法語』の如きも、真摯熱誠の信念、紙上に彷彿たるの感がある。たゞ『佛鬼軍』一篇行文頗る諧謔を極めてはあるが、これとても妙法を説いて、里耳に入り易からしめやうとの意に外ならないのである。それこれ考へ合せて見るに、一休の全生涯を通じて、慥かに彼が性行及思想に於て、前半生と後半生との間に、一大溝渠を劃することが出来ると思ふ。即ち彼の前半生は修養の時代で、彼の後半生は教化の時代である。修養時代に於ける一休は、颯爽快活でなくて、寧ろ眞面目の人であつた。樂天的でなくて、寧ろ厭世の方であつた。彼が

十五才の時、説法説禪、擧姓名、辱人一句、聽吞聲等の二偈を作つて、當時の僧侶の腐敗を憤慨した事蹟や、又、心靈上の煩悶に驅られて、湖底の藻屑と消え去らんとした事蹟や、街頭木刀を挟んで、虚偽の佛徒を罵倒した事蹟に徴して見ても、慥に彼は真摯熱烈の氣概があつたに相違ないのである。然るに彼の後半生に於ては、殆んど別人ではあるまいかと感じられる程に變化した様に思はれる。即ち前の圭角稜々たる氣概は化して、圓轉滑脱の人となつた。前の真摯熱烈の氣象は變して、冷靜にして颯爽の人となつた。是れ彼が悟道の結果でもあらうが、その主なる原因は、全く彼が境遇の然らしめた所であらうと思ふ。

然らば彼が眞面目は奈邊にあるかと云ふに、吾人は、彼は將に傾倒せんとする佛教を挽回興起すべき宗教革命家でなく、又彼は文學史上一新機軸を出した文學者でもない。彼の本領は寧ろ平民的教化にあつたのであると推斷するのである。即ち當時形式の末に流れ、荒蕪し切つた佛教界に鋤犁を下して、眞正なる佛教の神髓を顯揚し、之を最も赤裸々に、一般人民の胸中に扶植

しやうとしたのである。従つて彼は虚偽虚飾を惡み、外儀形式を排する念深く、そのために却つて人情禮儀の小樊籠中にまご／＼して居る連中からは、狂と譏られ滑稽と笑はれたのである。然れども、彼は自己の良心を欺くに忍びなかつたものと見え、常に己の欲する所は直にこれを行ひ、己の欲せざる所は斷然排斥するに躊躇しなかつた。彼自ら歌うて曰く、風狂々客起、狂風來、往姪坊酒肆中」と然り、彼が一生に於て、或は禁戒を犯し、魚を捕へて自ら之を料理し、或は酒肆に入つて亂酔し、姪坊に通つて流連した様なことも、全く無いと云はれない。しかし、これは當時の僧侶輩が、表面如何にも殊勝らしく見せかけて、裏面でいろ／＼の不徳を敢てして居るのや、或は徒に形式の末に拘泥して、根本の精神を忘却して居るものどもを、諷刺するの舉であつたかも知れない。兎も角、彼は意志の人であつて、主動的の心を以て、物に役せられるといふことがなく、常に能く物を役して行つたのである。故に時々外界の現實と衝突するを免れなかつたけれども、彼は徹頭徹尾、自己の所信に鞭つて、驀直進前し、絶えて一步も退いたことがなかつた。彼は是れが爲めに

感情をも殺した。然れども、彼は全く血と涙との枯渴した人ではない。否、彼の皮下には、常に熱烈なる血涙が流動して居たのを、彼の意志で以て之を抑壓し、冷却して居たので、彼の笑の中にも、彼が滑稽の中にも、はた彼が狂態の中にも、常に燃ゆるが如き血涙は沸いて居た。而して彼が後半生五十有餘年の傳導教化は、實にこの温き、無限の涙泉より流れ出たのである。

要之、一休は、宗教の革新者として、虚榮虚儀の社會は之を許さなかつた。茲に於てか、彼が熱涙は、冷かなる皮を以て蔽はれ、慨世憂法の念熾なりし彼は、一轉して諷世嘲俗、滑稽洒脱の奇僧と變せざるを得なかつたのである。されば彼が永久不朽の天職は、平民的教化に在つたといふ推斷は、蓋し妥當ではあるまいか。曾て明の張應麟が彼を評した句に、

學通儒典、道闡禪宗、爲叢林之表、率致參望之尊崇、源々才思、落々心胸、觀止水而自安、行藏有定、取狂雲以爲號、變化無蹤、是宜衍兒孫之昌盛、續燈燄於海東也耶。

といふのがある。一休の眞面目を發揮して餘蘊なしと謂ふべきではあるま

## 二、彼が誕生

室町幕府の威勢四海に振ひ、天下の寵兒たる足利義滿は、その光榮と顯達とに飽き果て、その子義持に、將軍の職を譲つた年、即ち應永元年の正月朔日、朝暉燦として東天に閃めきたる時を以て、洛西の賤が伏屋に呱呱の産聲を擧げた一麒麟兒があつた。この麒麟兒は何者であるか、爾來今日に至るまで、兒童走卒もなほその奇行を稱し、機智に服して居るところの、彼の有名な一休和尚その人である。彼名は宗純、幼名千菊丸、畏くも後小松天皇の孽子である。母は藤原氏、南朝簪纓の胤で、初めは吉野の行宮に從がうて居つたが、後、南朝の和成ると同時に、後小松帝に奉事することゝなつた。然るに帝は、その容色の美しくしきと、その才華の優ぐれたるとを以て深く寵愛せられたが、遂に一休の託胎を見るに至つたのである。然らば一休は、よしんば庶腹に出でたるにもせよ、素これ萬乘至尊の胤であつて見れば、竹の園生の御一人とし

て金殿玉樓の中に、一生光榮ある運命を荷ふべき筈の人である。然るに不幸なるかな、嫉妬の神は、后宮の口を假つて之を妨げた。彼は南帝の怨を報じようが爲に、毎に劍を袖にして、帝の隙を伺ひ奉つて居る」と譏言した者があつたので、之れが爲めに、己に懷妊して居た藤原氏は、無念の涙を呑みながら、住み馴れし宮殿を後に見て、洛西の陋せき矮屋に身をのがれることとなつた。一休は斯様な悲惨の境遇に産れ出で、茲に育つたのである。蓋し、一休の母、藤原氏の事に就いては、信據するに足る程の史的記載が乏しいので、彼の女の性格及び經歷は、これを明瞭に知ることが出来ないのは、寔に遺憾の事であるが、兎に角、彼女は、決して尋常の婦人でなかつた事は勿論である。願ふに金壁燦爛たる殿中に在つて、やんごとなき際の御寵愛を一身に集め、榮華を極めて居た彼女が、一朝あられもない讒言に依つて、忽ち打つて變つた哀れな境界に沈むに至つたその心の中は、どんなであつたであらうか。若しも彼の女が、尋常の婦人であつたならば、必ず嫉怨の炎に焼かれたかも知れぬ。然るに賢明にして敬虔の念深き彼の女は、暗黒の機を轉じて永



遠の光明を認めたのである。即ち電光の様な、はた朝露の様な、現世に於ける一切の浮華虚榮を抛げ棄て、翻然として永遠無窮なる人生の一大事因縁を捉へ得たのである。今彼の女が臨終に際し、遺言の書として残して置いたと傳へらるる所の文書を見るに、彼の女の性情が、頗る明白に寫されてある。いはく、

我々娑婆の縁つき、無爲の都におもひき候。御身よき出家に成り玉ひ、佛性の見をみがき、そのまなこより、我々地獄に落つるか、落ちざるか、不斷添ふか、そはざるかを見玉ふべし。釋迦達磨をも奴となし玉ふ程の人に成り玉ひ候は、俗にても苦しからず候。佛四十餘年說法し玉ひ、つひに一字不説とのたまひし上は、我と見、我と悟るが、かんやうに候。何事も莫妄、想あなかしこ。

九月上旬

千菊九殿へ

不生不死身

かへすくも方便のせつをのみ守る人は、くそ蟲と同じ事に候。八萬の諸

聖教をそらによみても、佛性の見をみがかずんば、此文ほどの事も解しがたかるべし。

これとてもかりそめならぬわかれてはかたみとも見よ水莖のあと。この文書は、果して母氏の筆になつた者であるか否かは、吾人と雖も、多少疑がないでもない。併し、一休の母氏は、始め淨土の教理に深く歸依して居られたが、一休が常に佛心宗の禪理を説き勸めた爲めに、遂に甚深微妙なる禪道に歸入せられたのが事實であるとすれば、あながち、之れ位の見識を持つて居られなかつたとも言へない。兎に角、從順温和を旨とする婦人として、釋迦達磨をも奴となし玉ふほどの人に成り玉ひ候は、俗にても不苦候と云ひ、或は、かへすくも、方便の説のみを守る人は、蠢蟲と同じ事に候。八萬の諸聖教をそらに讀みても、佛性の見を磨かずんば、此の文ほどの事も解し難かるべしと云へるを見ても、當時の腐敗墮落せる世態を超越して、一世を空うせるその氣鋒、實に當るとの出來ない所があるではないか。滿室の蒼蠅拂へども去り難く、起ちて禪榻を尋ねて清風に臥したる夫の細川頼之が、滿腔の不

平を吐いて去つてから、未だ數年と経たない時のことであるから、一世の風潮は華奢に流れて、諂諛とか排擠とか、讒謗とか中傷とか、凡そこの種の惡徳の跋扈したその當時、特に宗教界は、唯々方便の末にのみ拘泥して、眞佛教の精髓を失ひ、所謂「糞蟲」と同様な坊主や、八萬の法藏を讀破して、その面目の何であるかも知らない様な、街學僧の巾を利かして居た時に當り、一婦人の身を以て、忌憚なくこれを喝破した所などは、實に千古の鑑戒とすべき所である。あゝ夫の紛々たる八家九宗を一目に睨み、棒喝元來兒戲に類す、座禪畢竟何の要をか爲すと、廣い世界に更に別天地を開いた奇僧一休は、この非凡賢明なる母の血を傳へて、生れて來たのである。

彼の母氏は、何時頃まで存生して居たか、それさへも分明ではないが、『一休年譜』に就いて見ても、應永廿一二年の頃は、屢々來往して居たらしい。又、『一休諸國物語』の中にも、一休が母氏の爲めに、法話をなし、法語を書き送られたことを記してあるので、已に俗縁を離脱して、萬法一如の佛道に入つた彼も、猶ほ親子の間に繋がれてある、綿々たる愛情の絆は、絶つに忍びなかつた

のであらう。否親子の至情として、どうして、此の悲惨の境遇に寡居して居る、母氏を省せず居ることが出來やうか。然り已に俗縁を脱した彼は、清らかな神聖な法縁を結んで、彼の女を慰藉するに努めたのである。元來彼の母氏は、深く淨土の教理に歸依し、明け暮れ稱名に餘念のない、實に敬虔なる信者であつたが、直指人心、見性成佛と説く禪宗を奉ずる一休は、稍もすれば、方便の末に拘はる念佛宗に満足しない處からして、彼は更に自己の信じて居る禪の法味を呈した。即ち『水かゞみ』とか『假名法語』とかいふ雙紙を書いて送つたのである。特に『假名法語』は、能く深遠なる禪の神髓をば、極めて平易に、且つ明晰に説き表はしたものであつて、或は和歌を引證し、或は經文を擧げて、反覆叮嚀に説いた所は、言々吾人の胸を刺すの感があるのである。即ち人生のはかなきことを説き、名利に奔るの迷ひを擧げて曰はく、

夫れ人間のあり様、萬事とゞまることなし、もとより生のはじめをしらざれば、死の終りをわきまへず、やみく／＼ばうく／＼として、苦の海にしづむ也。こゝを佛のあはれと思召して、色々の御方便にて衆生をすくひ給ふ、(中略)

名利と申すは、其身の名をあげ、人にほめられんとおもふ心をたねとして、堂塔を建立し、ときの富貴におごれり、かくの如きの人を、佛はふかくきはせ給ふ。

と説き、更に母氏の安心立命に就いて、説き示して、

御としもはや、くれくれちかくならせたまへば、なにの御望み御座候はんや。殊更、地獄の話を、もしろしめされ候へば、ゆく水の如くに、御こゝろもたせ給ひて、御むねのうち、何ごとも御座なく候へば、世尊御一體の御身に、御座あるべく候。

と云ふに至つては、孤寂の裡に、老い玉へる母親を懐ふの誠心、實に至れり盡せるものがあるではないか。更に、遇ひがたき法縁の深きを歎じて、古例を擧げて曰はく、

古舟田の御方丈にて、ほどなく宗建をはじめまゐらせ、人々すぎゆかせ給ひて、夢とはおぼし召さず候や、申してもつくしがたきは、かやうに御けなげに御入候て、わたくしもながらへ、佛法の御事ども申しあげまゐらせ候

事、他生の縁ふかしと存候。

更に語を續けて、

母にて候もの、事おもひ出し参らせ候へば、一しほそなたへまゐりたくこそ候へ。はやそれさまの御覺悟も、大安樂の道に御心づき候へば、めでたく満足いたし候。御なぐさみなどには、御看經もしかるべく候。云云。

斯様に、世の人情の絆を断ちて、菩提の道に入つた一休も、世の母の事を思ふにつれ、「一しほそなたへまゐりたくこそ候へ」と、綿々たる親子の情を禁じ得なかつた。而かも母氏が、大安樂の道に心づきしを見て、漸やく満足したのを見ても、彼が母に對して法味を呈し、その大安樂を與ふるに努めた孝心は、なんとゆかしいことではあるまいか。

一休が母に法を勧めた事跡に就いて、『諸國物語』には、左の如く記してある。

一休和尚の御袋は、浄土宗にて有とかや、一休常にかな法語又は水かゝみといふ双紙を送りて、道をおしへ給へども、しかく御悟りもなく、明暮唯念佛のみにて過し給ふ。一休聞し召し、一段の御心入なり、念佛にて佛にな

らせ給ふ事は、更に疑ひなけれど、此所より愚僧が庵へ御出あらむに、何の疑ひなく、御出あるべし、是よく常に道しり給ふ故に、苦もなくうか／＼と歩き給ひても、庵へは御出有なり。又かた田舎人が、わが庵を尋ね來たらんに、いか程道にまよひても、我等が庵ある上は、何れ尋ねあふ也、其尋ぬる迄の心苦しき間が、迷なりと仰せられければ、然らば何にても示し玉へと仰せられける、一休さらば、一句申して見參らせんとて、

目なしとち／＼聲についてまませ

昔人の悟りとやらんを悟る、その習ひ始めに父母もなく、(中略)御袋の曰く、いへはいはすいはねはむねにさはがれておもはぬさきや佛なるらむとあそばしければ、一休よろこび玉ひて、取敢へず、一首を讀み玉ひける、

いまははやこゝろにかゝる雲もなし月のいるべき山しなれば  
とよみ給ひて、御工夫尤も／＼とて、喜びてかへり給ひける。

此記事は、果して信するに足る者であるか否か、疑はしいものではあるが、母子の間の真情の、髣髴たる者があるから、参考にもと茲に附記したのである。

### 三、彼が修養

嘗て興春作なる者、大燈國師の行狀を撰んだが、その中に、國師が備さに艱苦辛酸を嘗め、寒乞を忍んで修行せられた事跡に就いては、毫も記載してなかつたので、一休は即ち筆を探り、その末に、

風殮水宿無人記、第五橋邊二十年、

と記したことがある。今吾人は、更に此の句を採つて、一休に呈するのである。世人唯一休が滑稽洒脱であるのを見て、未だ彼が眞面目を顧みるものは尠ない。彼が後世に至る迄、上は王侯貴紳より、下は兒童走卒にまでも、追慕せられて居たといふのは、唯彼が廳輕滑稽であるからといふばかりではない。一休の一休たる所以は、全くその清く高い徳があるからである。徳の光は歲月の經て行くに従つて、益々世を感化することが大である。そして其徳といふものは、唯人の天賦に依るものであるといふよりは、寧ろ自己の修養に由るのである。修養に依つて、研げば研ぐ丈、磨けば磨く程、その徳の輝きが長く且

つ廣くなるのである。一休をして永遠に偉大ならしめたのも、畢竟彼の修養に依るのであると謂はねばならぬ。彼が半生は、實に辛酸を嘗めて苦學した修養の歴史である。栴檀は二葉より芳はしいと云ふ諺の通り、彼が六歳のとき、已に京師安國寺の長老、像外鑑禪師の下に投じて、侍童となつたが、鑑公はその才智の秀いでたるを愛して、名を與へて周建と呼んだ。十二歳のときに、清叟仁藏主が寶幢寺の前に居て、維摩經の講筵を開かれたときに、黃吻兒である彼は、殊勝にも大衆の間に加つて、之を傾聽したので、當時の人々は、一休が未だ幼少でありながら、已に老成の態度があつて、實に前途恐るべきものであるとを驚嘆したと云ふことである。是で見ても、彼が年少已に吞牛の志を抱き、氣鋒群衆に擢でて居たところが想像せらるゝではないか。已に蓋世の抱負を有つて居た彼は、十三歳のとき、東山の慕喆禪師に就き、作詩の法を學ぶとなつた。彼は毎日一首つゝを課業として、研鑽琢磨した。甲斐あつて、その技量は卓然として現はれ、當時詩名高き祥球書記といふ人は、一休を目して作者の風が具つて居るとて、大に稱揚したと云ふ程である。その時に見惠

侍者と云ふ人が、彼れに向つて、吾が祖別源翁の作つた秋風白髮三千丈、夜雨青燈五十年と云ふ詩句を常に誦したなら、屹度佳境に入ることが出来るであらうと誨へて呉れた。これから彼は、大に切磋して、非常に造詣する所があつた。一日長門の春草に就いて詠じて曰はく、

秋荒長信美人吟、徑路無媒上苑陰、榮辱悲歡目前事、君恩淺處草方深、又十五のとき、春衣宿花の詩を賦して曰はく、

吟行客袖幾時情、開落百花天地清、枕上香風寐耶寤、一場春夢不分明、又彼が十七歳の時、中秋無月の詩を賦した。佳句殆と神に入るとも稱すべきである。曰はく、

是無月只有名明、獨坐閑吟對鐵檠、天下詩人斷腸夕、雨聲一夜十年情、と、彼が詩才の卓絶なること、寔に驚くべきもので、當時の人口に噂灸せらるゝやうになつたのも、無理からぬことと思ふ。しかし、一時此く詩才を以て世に鳴つた彼も、實は唯風流韻事を楽しむの詩人として、一生を終るべき人ではない。彼が眼中には、常に憂憤慷慨の紅涙が湛えられてあつて、滔々たる時

勢の腐敗に對して、濺がすに居ることが出来なかつたのである。或る時、結制の式が行はれたが、僧徒は喜んで、その氏族門閥を記して、得々として權貴に媚ぶる風があるので、年少なる彼、尙且、之を聞くに恐びず、耳を掩うて堂を走り出で、慨然として、二偈を作つて、慕詰翁に呈した。その偈に曰はく、

説法説禪舉姓名、辱人一句聽香聲、問答若不識起倒、修羅勝負長無明、  
犀牛扇子與誰人、行者盧公來作賓、姓名議論法堂上、恰似百官朝紫宸、  
言々句句、痛憤の鋭鋒、當時俗僧輩の肺肝を刺すの慨がある。されど、如何せん、當時の叢林は、頹敗の極に達して、能く一柱で以て、支へて行かれる者でない。三十年後にもなつたら、子の言は必ず行はるゝ様にならう、それまで持忍して是を待てよ、との慕詰翁の慰諭に依つて、涙を呑んで口を噤んだ。蓋し、世は室町幕府の全盛時代であつて、浮華豪華の氣風は一世を傾倒し、五山僧徒は、區々たる權勢を笠に着て、俗事に頭出頭没し、遂に眞佛教の福音は、靡然として地を拂ふの状態であるのを見ては、彼はどうして冷淡に構へて居ることが出来やうか、而して年少氣銳の彼が眼中には、實は已に天下を空しうして

居たのである。それは、或時、一休が外書及び經錄の師、清叟仁藏主の處へ、將軍義持が尋ねて來た時に、これに接した様子でも知れるのである。『一休年譜』に  
師年拾八歲、顯山相公、留心心宗、色色革弊、聞清叟壽像、偕着金伽黎、一日遽到  
庵所、欲見彼像、徒侶股栗、師偶在庵、請持、頓子出迎、相公立、砌下、赤松越州侍旁、  
少年美丈夫也、師立屋簷上、欲親度、與頓子於相公、赤松公咄之、進而出手、接頓  
子、師握其手、而作盼色、相公覽此像、了回、駕從者曰、自非禪者、殆不見有此舉、蓋  
師豪邁、以之可概見也、

とある。徹々たる雜僧の分際で、當時、空飛ぶ鳥をも墜す程の、威勢赫々たる足利將軍に對してさへ、些、子も憚り畏るゝ所がなかつたといふのは、以て彼れが豪邁の氣象を見るに足るではないか。

彼は當時爲謙翁が、關山派の宗風を、西金寺に唱導せらるゝに、參會した。爲謙翁は、高懷一世に秀てた人であつて、靜閑なる庵房に門を閉ぢて、修養するのを楽しみとして居たのである。ところが、學德卓絶して居たので、その師、妙心寺無因禪師が、左券を譲らうとしたが、翁の謙遜の心より、之を辭した。そこで此

號ある程の英僧である。一休翁の室に入つて、親しく侍すること、恰と五年の久しきに及び、其間勵精刻苦して、修行に努めたのである。然るに爲謙翁は、一日一休に謂ふよう、吾が蘊已に子に傾倒し盡した、しかし、吾は左證とて別段何も無いから、汝を證しない」と。是で見ても、一代の宿徳から、有爲の大器と認許せられた彼一休が、非凡の英才であるといふことがわかる。而かも閑房に靜居して、世の豪華を冷視して居た爲謙翁は、清貧に甘じて居たとは云ひながら、殆んど糊口の資糧にさへも缺乏がちで、翁の入寂した時の如きは、葬祭を營むの資さへ無かつたので、爲めに一休は、空しく心中で喪を行ふに止まつたと云ふことである。あゝ骨髄に徹する程の貧窮の境遇に在つて、殆んど五年の星霜、一味平等の清高なる法味を楽しみつゝ、師弟の契を完うした彼等が情義は、なんと世の龜鑑として賞するに足る美談ではなからうか。

已に主翁を喪うた彼一休は、恰も喪家の犬の様になつて、茲を辭し、清水の觀音に謁で、母氏のところへ立寄り、それから、彼はすこゝと歌の中山の清閑寺の邊を通つて、路大津の驛に出た。實は彼非常の空腹に弱り切つて居たの

であるが、驛亭の人、彼が形容のみすばらしく、彼が顔色の青ざめて居るのを見て、「オイ坊さん、どうしたのだい、お師匠さんから叱られてもしたのか、それとも又、繼母に苛められでもして逃出して來たのか、まア何にせよ、定めしひもじからう、幸ひ今餅が出來たから食べなさい」と親切こめて呉れたのである。彼が境遇の悲惨なとは、實に極はまれりと云はなければならぬ。彼は乃ち石山の觀音の前に行つて、道念堅固に修行すると一七日、何等かの靈驗を庶幾した。甲斐も現はれなかつたので、彼が胸中は、今や心靈上の紛亂の極に達し、苦悶やる方もなく、觀音の像前に起つて、遙に琵琶湖を望んだ。湖神果して何等の感を彼に與へしか、此の時彼は竊に意うらく、「吾今身を水中に投じて、以て我が運命の如何なるかを試みやう、若し我が命を全うすることが出來たならば、そは實に大士の加被の然らしむる所であつて、我が前途には必ず一道の光明を認め得べく、若しそうでなければ、則ち魚腹に葬られるであらう、縦令魚腹には葬らるゝとも、これ此の一念、何時の世にかは素志を貫徹せずして止むべき」と、決然將に湖中に投じて、空しく水底の藻屑と化せんとす

る一刹那忽然彼を抱き扱めたものがある。顧みれば、是れ母氏より遣はされた使者であつた。身を毀ふは孝にあらず、悟道の機は他日に待つも、未だ敢て遅しとすることはないとの切なる諫言に依つて、彼は遂に母の下に引き還した。されど懷疑の雲に蔽はれて、真如の光明にあこがるゝ彼は、憤然母氏の下を辭して、再び琵琶湖畔の堅田に赴ひき、當時鉗錘嚴峻なるを以て嘖々たる華叟師の門下を訪づれた。がしかし、華叟師は、果して門を閉ぢて之を拒んだ。一休は其人の徳望を慕うて、敢て險峻艱難を厭はず、唯一縷の光を辿つて來て見れば、無情にも斷はられ、進退茲に谷まれりと云ふ境遇に陥つたのである。而かも彼は、往古二祖慧可か、達磨を少林に訪づねたとき、達磨は門を閉ぢて顧みなかつた爲めに、毅然として雪中に立ち、その臂を斷ちたる熱烈な求法心を想起し、吾一たび謁することが出来なければ、死すとも茲を去らないと決心して、露に眠り草に宿りて、少しも屈しない。夜は漁舟に投じ、旦には菴の前に詣ること四五日を経たる時、華叟は偶々門を出で、村齋に赴かうとする。一休がまだ門の側に蒲伏して居るのを見、左右を顧みて、前日の僧猶

ほ此に在り、水をぶつかけて逐ひ拂へ」と云ひ殘して出て行つたが、齋終つて菴に歸つて見ると、一休は猶ほ屹として去らうともしないので、遂にその熱誠に感じて、延き入れて面談し、是より彼は契機投合して、孳々として日夜參請することゝなつた。是れ實に應永二十二年の事、時に一休は年二十二であつた。華叟はもと、徹翁和尚の門下であつて、天性高潔嚴正、一步も假籍しないと云ふ風で、後此の禪興庵に蟄居して、足圍を越えないこと、殆んど十年に及んだ。であるから、濫りに佛法を唱ふるとなく、而かもその學徒に對しては、常に辛辣苛峻大抵のものは、閉口して逃出す程であつた。然るに一休は、毫もこれを畏れず、これを厭はず、孜孜兀々として前後九年の星霜、辛酸を嘗め盡して參究した。その熱誠至情は寔に感すべきことではあるまいか。

華叟は元來清貧に甘んじて、世俗に助を請ふとは斷じてしないので、會裡枯澹なると甚しく、朝夕の齋盂も充分霑ふとが出来ず、冬夜寒を凌ぐ衣に乏しき爲め、彼は菴の湖畔に瀕せるを幸に、平素心易き漁夫の舟に入り、その蓬を借りて宿まり、工夫沈吟して曙に達するところが屢々であつた。文盲なる漁夫も、



彼が熱心にして、且つ能く饑寒に耐へることを憫んで、毎に食物を供養したが、その妻は、却つて、刻薄にも湯釜を打ち鳴らして、彼が修行を妨害したと云ふことである。彼が艱難に遭遇したとは是ればかりではない、その學資屢々窮乏する毎に、京師に歸つて、香包などを製造して、僅の金を儲けては、直ぐ墾田に赴いて苦學に勵んだのである。その苦心慘憺たることは、言語や筆紙に寫し難いのである。されど、彼の師華叟は、彼に對しても決して辛辣苛峻なる待遇を緩めなかつた。或時一休に命じて藥を剉ましめたところが、誤つて指を傷め、出血淋漓として藥研を染むるに至つた。華叟之を見て、血氣盛りの汝にも似ず、何といふ指の軟弱なとぞや」と叱責して、毫も慰色をあらはさなかつた。是れで見ても、華叟の峻嚴にして、一步も假さないことの一般を想像することが出来るであらう。併しながら、華叟が一休を視ること、尋常一様でなかつたといふことも、また大に注意しなければならぬことである。一休が二十四歳の時、當時作者を以て鏘々たる、謙岩冲公が訪ねて來て、開爐の偈を華叟師に呈した。そこで師は之に和して、

展開兩手當爐處、 陝府鐵牛白汗流、

と書き、そして更に後句を一休に附けさせた。一休即ち、

撥盡寒灰瞞寂子、 瀉山眼重火星流、

とやつた。華叟は是に於て、得々として謙岩公に向つて、此子、老僧より一頭地を抜くと誇つたといふ位で、華叟師が、彼を大器として重視したことは非常なものであつた。彼が一休といふ號は、即ち華叟師が與へられたので、或る日彼は替者が、妓王寵を失つて遂に落髮するの曲を演ずるを聞いて、忽ち得るところがあつた。そこで師は此號を附與したとの事である。

かように、彼が華叟師に事へて、刻苦參學すると茲に六年、一夜、碧水天に連かなる湖上に舟を浮べて居ると、忽ち鶉鳴一聲蒼涯より落ち、一休こゝに於て脱然とし頓悟し、詰旦その所見を擧げて華叟に示した。すると華叟曰はく、此は是れ羅漢の境界、作家の衲子に非ず」と。一休曰はく、某羅漢を喜んで作家を嫌ふのみ」と。華叟即ち曰はく、汝は是れ眞の作家なり」と。彼は即ち偈を作つて曰はく、

十年以前識情心、噴悲豪機在、即今、鴉笑出塵羅漢果、照陽日影王顏吟、と。是れ實に應永二十七年五月二十日の夜である。あゝ、彼が十有餘星霜の、慘憺たる研鑽苦行の効空しからずして、茲に廓然として大悟徹底の境に達するところが出来たのである。然れども大悟徹底の境と云ふのは、あながち無爲恬淡枯木冷灰化するといふ意義でもなければ、又決して一枚の證券を得て、揚々として坊守りとなるといふ事柄でもない。その眞意は、蓋し煩惱の妖雲を拂ひのけて、不動の信念を確立し、以て群生を教化するといふにあるのである。然るに當時の僧侶は、唯一枚の證券を得れば、吾は某の宗風を繼嗣し、某の嫡孫であると云ふ風に、徒に區々たる外儀に拘泥し、空位虚名を弄して、亦佛教の眞髓が、奈邊にあるかを顧みない状態であつた。是に於て、豪邁不羈なる一休は、師華叟か、宗師徹翁より、代々傳へ來つた印書を渡さうとするのを、地に擲ち袖を拂つて去つた。この一事、たま／＼以て彼が氣慨の、天を衝くばかりであつたことの、一般を推知するに難くないのである。應永二十九年の十月に、如意庵で法會の修められたときに、金光燦爛たる法衣袈裟を纏へる衆

僧の中に、あつて色褪せた布衣を着、草履を穿いて居た一休は、師華叟が、汝獨り威儀のないのは何故ぞ」との間ひに對し、意氣軒昂として、似而非僧侶の響に傲ふを欲しないからである」と答へ、又、彼が泉州堺に居た頃、一木劍を手に持つて市街を横行した時に、人を殺すの劍を持てる一休の舉動に就いて一驚を喫したる市民は、こゝに群りて之を詰問すると、一休慨然として答へて曰ふやう、汝等知らずや、當今の賈知識は、丁度此木劍と同様である。室にあるときは眞劍の様でもあるが、室を出し赤裸々にして見れば、何んぞ料らんたい、これ一木片たるに過ぎない、これではとても、人を殺すことさへ出来ない、況んや人を活かすとなどがどうして出来やうや」と、眞摯なる此言、以て當時の虚飾に溺れて居た、似而非僧侶の心中を抉ぐるに足るのである。斯様に、彼が心裏に鬱結せる憂法慨世の熱血は、常に沸いて居て、機に觸れ、時に應じて、痛憤の餘沫を迸らしたのである。

然るに曩に一休は、師より證券を渡されたのを地に擲け棄てた時に、華叟師が、その法嗣なる宗橋と云ふ夫人に託して、我が滅後、彼に付託せよとて、一紙

券を渡されたが、後それは源宰相の下に託されて在つた。一日、一休源宰相を訪問して、偶然之を得、彼意らく、情々現時の状態を見るに、佛の大法は、靡然として頹敗し、玉石混淆して、その真眼目を了會する者とは、殆んど見當らない。纔に一紙券を得れば、得々として曰はく、吾某の法を嗣ぐと、此くの如きの似而非僧侶いよく跋扈して、正法ますます地に落つ、あゝ感しい哉」と、慨然その相傳の印記を手に把り、これを裂いて、遂に一炬に燼してしまつた。是れ、永享九年、彼が四十四歳の時の事であつた。その券の奥書に曰く、

純藏主悟徹後、與一紙法語、道是甚麼繫驢概拂袖去、可謂瞎驢邊滅類也、臨濟正法若墮地、汝出世來扶起此、汝我一子也、念之思之。

應永二十七年五月日

華 叟

あゝ十一年の星霜、師弟の契こまやかに、汝は我が一子也」とまで頼りとせる師華叟は、臨濟の正法若し地に墮ちなば、汝出世し來つて之れを扶起せよ」と遺託して、溘然圓寂せしより、已に十年の歲月は夢とばかりに過去つた。而して今や正法は空しく暗雲に蔽はれて、腐敗の渦中に陥り、滔々たる緇衣の徒

は、俗權を弄して豪奢浮華を恣にし、日夜姪樂行遊に耽るの状態を思ひやるときは、一休の心中は、どんな感があつたであらう。されど、滔々たる世の頹勢に對しては、到底一柱で以て能く支持して行くことの出来るものでない。彼を思ひ、此を考へた彼は、内痛憤極まりて、絶望の深淵に沈まんとし、外厭世の手は彼の心身を捕へて、將に孤寂の地に誘はんとしたのである。然れども、先天的に洒脫の性情を有てる彼は、翻然として執着の境を脱し、圓轉滑脫、以て大法を弘布傳道することゝなつたのである。是に於て、艱難辛苦研學參究の前半生と、布教傳道に一身を捧げたる後半生との間には、劃然一大溝渠の存するが如き感があるのである。

自 贊 (狂雲集)

靈山孫言外的傳、蜜漬荔枝四十年、兒孫有箇瞎禿漢、願得老婆新婦禪、  
華叟子孫不知禪、狂雲面前誰說禪、三十年來肩上重、一人荷擔松源禪、  
風狂々客起狂風、來往娼坊酒肆中、具眼衲僧誰一拶、畫南畫北畫西東、  
分明畫出許渾圖、吟憐徑山天澤鬚、嗜譽求名不受利、風流寂寞一寒儒、

## 第五章 一休の後半生

### 一、彼が傳道

應病與藥と云ふことは、佛教を宣布する、鍵鑰である。即ちその對手たる衆生の根機の如何に依つて、説く所の法を順應して行かなければならぬ。世は戦亂の衢と化し、天變地異が屢々臻る様な時代には、人生の無常を説き、穢土を厭離して淨土を欣求する、的の福音は、最も人心の奥底に響き渡るのである。然れども天下が旺盛を極め、滔々として浮華豪奢の物質的迷夢を樂んで居る時に當つては、如何に人生の無常迅速なることを説き、厭世悲哀の法鼓を打ち鳴らしても、馬耳東風何等の影響だも見る事が出来ないのである。榮華極まつて人の哀れを知ると云ふことがあるけれども、厭世の觀念の風が吹きすさむ頃は、已にその時代の衰滅の兆の現はれた時である。今一休の時代は、殆ど室町全盛の時代であつて、特に五山の臨濟が最も威勢を逞うした頃である。當時の佛教は實に墮落して、正法は全く地を拂ふの狀態であつた

とは云へ、その外觀は、勢威隆々として、俗權を壓倒する程の有様であつた。斯様な時代に出てたる一休が、么微の一身を擧げて、その弊害を革新せんとするの、恰かも双手を擧げて泰山を撼さうとするよりも更に困難の事である。故に若し、彼をして尋常一様の僧たらしめば、或は墮落の渦中に捲き込まれるか、さもなくば、絶望の極、西行を學んで厭世の客となつたかも知れない。しかし、彼の本來の性情と、當時の狀勢とが、それを許さなかつた様に思はれる。是に於てか彼は、憂憤の虫を抑へて、俗世の波の漂ふに任せ、圓轉滑脱活殺自在の境に身を託したのである。されど、彼が眞骨頭たる熱誠なる布教の精神は、その心の奥から、決して消え去るものでもなければ、又消え去つたのではない。彼が一擧手一投足の間にも、その機微を洩らし、隱約の裡に、群生を教化教導する所が多かつたので、一休の一休たる本領、實に茲に在ると云うてもよからう。

彼が教化を布くに當つては、眼中もとより貴賤貧富の差別を措かない。彼即ち曰はく、

凡そ四姓の吾が門に入る、皆釋氏を稱す、其食を乞うて命を資け、法を乞うて姓を資くるを以て也、亦何んぞ貴冑望族、之れあらん哉、今の世、山林叢林の人を論ずる、必ず氏族の尊卑を議す焉、是をしも忍ぶべしとせば、孰れをか忍ぶ可からざらん乎、云云。

彼が眼中に映する者、上は王侯大臣より、下は農工商に至る迄、苟くも一味平等の法海に入る、どうして、區々たる階級、上下尊卑の別を立てやうや、應永三十四年に、後小松帝が王位を稱光帝に譲り玉ひしより、常に一休を宮中に召して、道を問ひ禪を譚し玉ひ、特にもとは親子の間柄であることなれば、鐘愛の情最も濃やかであつたと云ふことである。後、稱光帝疾篤くして、皇嗣未だ定らなかつたが、當時伏見、常磐井等の四宮あつて、衆議決しない、そこで一休密に、

常磐木や木寺のこすえつみすてよ世をつぐ竹の園はふしみに

と、奏聞した。是に於て崇光院の玄孫なる伏見宮彦仁王が、大統を継ぎ玉ふことに運んだとの事である。併し此歌に就いては、新井白石の『讀史餘論』などに

も、『南朝記』を引いてさて「この歌をかゝれたものは、今も世の寶物だなど、言つて、大切に傳へて居るものもあるから、或はそんなことがあつたのかも知れないが、何んだかどうも疑はしい」と云うて居る。どうも的確な史證が残つて居ないから、直に斷言は出來ない。兎も角一休は、夫の五山十刹が、足利の俗權に阿附して、時の豪奢に性根を腐らせて居るに反し、専ら朝廷を念ふことが深く、亦宮中にては、一体に歸仰せられた事が一方でなかつた。特に永享五年、後小松帝か不豫に渡らせられ、登遐の前數日、一休を召させられた。一休は即ち龍牀近くに咫尺して、心要を演べたところが、帝の御感斜ならず、直に先朝の遺墨や聖草飛白數帖を把つて、親しく一体に賜はり、

朕雖在天、以此併法寶、屈矣、國祚陰翼、師本職而不在、朕言也、

と、仰せられた。斯くの如く、優渥なる歸仰と寵遇とを蒙りたる一休は、深くその大恩を感佩し、平素一針をさへも蓄ふることを欲しなかつたに拘らず、唯此の御遺物のみは、これを小葛籠に藏して、常に身を離さなかつたと云ふ事である。後花園帝も亦深く師に歸依し玉ひて、屢々法を問はれた。斯様に一休

がやんごとなき帝室の歸依を忝うしたのは、親子たる契りからして然らしめたのであるかも知れないが、しかし亦以て、その高德の感化が預りて力があつたのだと云はなければならぬ。

然れども、一休の真意は、管に貴顯の歸仰を受けて、それで以て得々として居るといふやうな者ではない、寧平民的傳道教化が、彼の本領であるのである。彼は巍峩たる大殿堂や、金壁燦爛たる伽藍に住み、浮華な外儀に拘々せる當時の僧徒の弊害を看破し、従つてこれを賤し、これを嫌ふこと甚しく、常に紛々たる雜鬧を避けて閑地を擇んだ。則ち永享十年の頃から銅駝坊の北の一小廬、見るから垣は壞れ、簀は敗れて人の住むべき所とは思はれない程の、其一小廬に、彼は楽しんで、蒲席を設け、道の爲めに沓ふもの、外は悉く謝絶した。然るに同十二年六月耆老の請によつて、如意菴に住することとなり、先師華叟和尚の十三回忌の法齋を營んだが、參詣人雜沓し、集り來るもの各自香錢を懐にして、彼が住庵を賀し、その紛擾謂はん方もない有様である。そこで一偈を菴の壁に貼り、一簣一笠、颯然として、茲を去つた。その偈は、

將常住物置菴中、木杓箆籬掛壁東、我無如是閑家具、江海多年簑笠風、  
といふのである。又退院に就いて、養叟和尚に寄せて、その真懷を吐いて曰く、  
住庵十日意忙々、脚下紅絲線甚長、他日君來如問我、魚行酒肆又姪坊、  
と、彼は永くこの俗氣に充ちたる寺院に止まるに堪へずして、遂に閑地を辿つて讓羽山に入つた。深山幽谿、眞に俗塵を脱したる靜境である。彼はその山路の峻峻なる景を叙して、

吞聲透過鬼門關、豺虎蹤多古路間、吟杖終無風月興、黃泉境在目前山、  
と言つた位で、山紫水明の好境は、この讓羽山に於て見ることは出来ないで、却つて豺虎も棲む様な荆棘蓬々と鬱茂せる處であることは、あり／＼と描寫されてある。更に彼は、山居に就いて詠じた。

姪坊十載興難窮、強住空山幽谷中、好境雲遮三萬里、長松逆耳屋頭風、  
と、彼は茲に尸陀寺を創めた所が、彼を慕へる徒侶は、後を追うて到る者多く、皆法の爲めに一身を犠牲に供する輩であつた。彼等は、山に薪を拾ひ、深淵に清水を掬ふと云ふ風で、共に辛酸勞苦を厭はず、師弟の情濃かに、法の爲めに

研鑽を怠らなかつた有様は、誠に美はしい理想境とでも言ふべきであつた。彼は即ちその熙々たる和樂の境を示して、

歸宗一味日興餘、典座山中功不虛、休竟淨名香積飯、何時鱸有美雙魚、  
といつて居る。然れども、彼は永く寂寞の地に光風霽月に嘯いて居る者ではない、彼は一年を経て、室町の邊りの、静閑なる寓所に住することゝなつた。彼は寂寞なる幽境より、再び熱鬧なる都市に入るに際し、その滿腔の感懷を吐いて曰く、

狂雲誰識屬狂氣、朝在山中暮市中、我若當機行棒喝、德山臨濟面通紅、  
その意氣實に天を衝くとも言ふべきではあるまいか。是に於て彼を訪づれて、法を聴くもの朝夕踵を接し、従つて彼が德望高く四邊に鳴り渡り、歸仰の道俗雲の如くに慕ひ集り、従つて彼も亦南船北馬殆んど席の暖まるに暇なく、法鼓を鳴らして、佛陀の福音を宣傳するに力めて居た。然るに或時意外の出來事は、洒脱彼が如きものをして、尙且つ憂憤死を決せしめんとしたとがあつた。それは彼が如意庵に住して居た頃であつて、文安四年、一日大徳寺

の精舎に於て、一人の僧が故なく自殺したのを、官に密告する者があつた爲めに、その繁累によつて、囚はるゝ者五六人に及んだ。一休は之を聞いて、苟くも忍辱の衣を纏へる僧侶にして、獄裡に投せらるゝとあつては、實に佛界の一大汚辱たるのみならず、亦我一門の不名譽之に過ぎたるものはないとして、憂苦懊惱の極、心疾に罹り、潜に讓羽山に逃れた。彼は將に山中に遁逃せんとするに當り、その感懷を述べて衆徒に示した。

愧慚禍起自蕭牆、我見折人如劍鋸、從此空山幽谷路、誰人來踏板橋霜、  
又人が京都から山中へ尋ねて往つて、大徳寺事件の様子を話したので、彼は復讐勃たる感懷を吐露した。

文安丁卯秋、大徳精舎有一僧、無故而自殺矣、好事之徒、遂譖之官、繫其餘殃、  
而居囚禁者七五輩、足爲吾門之大亂、時人喧傳焉、予聞之、即日晦迹山中、其  
意蓋出於不忍耳、適學者自京城來、說本寺件々之事、愈弗勝慨歎、作偈言懷、  
時值重陽、故成九篇云、

地老天荒龍寶秋、夜來風雨惡難收、對他若作是非話、彷彿雲門闢字酬、

慚我聲名猶未報、參禪學道長塵勞、靈山正法掃地滅、不意魔王十丈高、  
 停囚一月老虛堂、身上迤邐休斷腸、苦樂寒溫箇時節、黃花一朵識重陽、  
 清淨本然現大千、現前境界是黃泉、慣戰作家赤心露、眉間掛劍血澆天、  
 正傳傍出妄相爭、曠劫無明人我情、人我擔來擔子重、空看蛺蝶一身輕、  
 上古道光今日明、議論臨濟正傳名、屋前屋後樵歌路、憶昔山陽笛一聲、  
 棒喝德山臨濟禪、商量三要與三玄、漢王鑄印却消印、胡亂更參三十年、  
 近代久參學得僧、語言三昧喚爲能、無能有味狂雲屋、折脚鑊中飯一升、  
 風外松杉亂入雲、諸方動衆又驚群、人境機關吾不會、濁醪一盞醉醺々、  
 彼は實にその心痛のあまり、遂に自殺の決心をしたのである。然るに此事が、  
 天聽に達したので、直ぐ勅使を遣はし、之を戒められた。その詔に曰はく、  
 和尚若し此舉あらば、佛法王法俱に滅せむ。師豈に朕を捨てむや、師豈に國  
 を忘れむや。

と。この優渥なる勅命に依つて、漸く氣を復して京都に皈り、是より彼は、瞎驢  
 菴に遷り、或は山城薪村の酬恩菴に轉し、機に應し所に隨ひて、法音を傳へ群

衆を教化すること、尠くなかつたのである。特に彼が獨特の滑稽諧謔を演じ  
 て、人をして啞然たらしめ、呆然たらしめ、笑ひつゝ、戯れつゝ、不知不識の間に、  
 これを馴致感化したのである。  
 一休が一大戰禍の襲來すべきことを豫言して、常に諸徒を警戒したことが  
 あつたと言ふ時から、十有餘年を経たりし應仁元年の六月、戰雲濛々として  
 京都は兵馬の衢と化し、干戈は日夜に動いて血雨頻りに降るといふ時、彼の  
 瞎驢菴も兵火に罹つたので、遂に逃れて薪村の酬恩菴に入つた。然るにこの  
 村の父老は、一休の來村を喜び、子女の慈母に接するの眞情を披瀝してこれ  
 を待つたといふとである。今や天下は戰雲に蔽はれて人心恟々、恐れ戦き狼  
 て騒いで居るにも拘らず、此處は獨り和氣洋洋たる春の如く、人皆欣び樂  
 んで師の法音を聽いて居たといふとに依ても、彼の感化の大なりしは明か  
 である。翌年靈山和尚の一百年忌を營むに當つて、都鄙の男女老少を擇はず、  
 皆彼の風を慕ひ集りて、彼が高徳を欽めた。是時實に彼の齡七十五である。翌  
 年七月に至り、此淨地も亦兵馬の蹂躪する所となつた爲めに、遂に大和、和泉



攝津の諸地を巡回して、弘法の爲めに一日も寧日がなかつた。

一日廣徳寺の柔仲和尚は、勅命を賚らして来て、一休に紫野大徳寺の住持たるべき旨を傳へた。すると彼は辭するに辭せられず、已むなくこれをお請けして、入山するとなつた。是れ文明六年二月二十二日の事で、當時彼は齡八十一歳の老年であつた。願ふに彼が一簑一笠を友として、福音の宣傳の爲めに奔走すること、茲に四十有餘年、或は中途兵禍の爲めに逐はれ、或は係累の爲めに逃れ、南船北馬、一日も安寧に費やすなく、群生に教化を興へ來つたのが、一朝足利時代に於ける五山十刹といふその十刹の一なる大徳寺の住持となるべく、優渥なる勅請を蒙り、而かも紫衣まで賜はつたとあつては、是れ實に人生の一大光榮であるのである。しかも彼は果してこれを歡び受けたであらうか。

大燈門第滅殘燈、難解吟懷一夜氷、五十年來簑笠客、愧慚今日紫衣僧、その憂法慨世の赤誠より、五十年一日の如く、一簑一笠の客として、到る處福音の宣傳の爲めに盡瘁せしに、一朝無上の光榮を以て紫衣を賜はりしは、素

是れ當然の數であるに拘らず、一休は却つて之を愧慚すと洩らせる彼が高懷は、實に萬世に欽仰せらるゝ所であるまいか。而して彼はたゞ名のみに住持として身はまた雲水の間に入り、終生この恩賜の紫衣を着用しなかつたのは、その如何に平民的美風を顯彰するに意が深かつたかを推知し得らるるではないか。

彼は既に八十有餘の高齡に拘らず、一日も安逸を貪る様なことではなく、たゞ一意法音の宣傳に力を盡して居た。彼が新村に壽塔を建てた時などは、近隣の老幼群れ集りて、争うて其勞を分ち、直ちに竣工したといふのは、又以て彼が徳の如何に高かつたかを想はしむるに足るのである。然るに彼は、この頃から兎角疾病に犯されて、老耄衰弱し、特に夏日炎威に苦しむこと最も甚しく、竹林に涼を納れんが爲めに、籠に乗りて林中を逍遙し、或は小亭に憩うて鬱悶を慰めたと云ふことである。而かも世事は、彼をしてその晩年に至るまで、安逸に休養せしむることなく、文明十一年再び兵禍の襲ふ所となり、籃輿に乗りて泉州の小島に亂を避け、尋いで攝州に行きて、慈恩寺に如意祖翁の

一百年忌を營み、說法教化の爲めに、暫くも足を休めることがなかつた。文明十三年の孟夏、大徳寺の正門を興し、池を堀るに當り、一門の徒侶各その力を致してこれに従事し、漸く落成の式を舉げ、未だ幾何も經ざるに、彼は偶々瘧疾に罹り、薪村の酬恩庵で泊然眠るが如くに入寂した。是れ實に文明十三年十一月二十一日のことで、天壽八十又八、法臘八十又三、その辭に曰く、

須彌南畔、誰會我禪、虛堂來也、不直半錢、

と、門下法弟一同、慈親を喪ひでもしたかのようになり、追悼措かず、その全身を昇いで酬恩庵慈楊の塔下に埋葬した。

あゝ八十八年の生涯、擧げてこれを平民的教化の爲めに捧げた彼一休は、死する時にも、夫の光榮ある大刹に於てせず、却つて山、幽に蒼く、水、遠く清らかなる僻邑に於てした。されど彼が徳光は、後世に至るまで、燦として輝いて居るのである。

## 二、彼が道交

吾人は、一休の生涯に就いて、その大體を述べ了つたが、彼の性格や、洒脱滑稽であつたばかりでなく、また貴賤上下の階級的偏見を存して居なかつたので、その交る所は大に廣く、上は貴顯紳縉の家より、下は野叟下婢に至る迄、親しくその感化を蒙つたのである。併しながら、彼は虚偽不正に對しては、決して一步も假さなかつた代りに、人と交るには、眞摯な誠實な態度をとつたのである。故に一方には、當時の權勢に阿る賈智識や、外儀に拘々せる似而非僧侶などに對して、始終排撃して措かなかつたが、他方には、本願寺の蓮如上人や、左海の一路居士や、知蘊居士などとの道交は、極めて眞面目に、極めて親密であつたことは、後世に至るまで、有名なる逸話として、言ひ囃されてある所である。以下試みに、最も親善であつた數者を擧げて見よう。

蓋し、眞宗中興の祖蓮如上人は、一休より二十二年後、即ち應永二十二年二月二十五日に、山城の東山大谷に誕生したのであつた。當時の眞宗の狀態は、元弘の亂後、大に衰頹し、「フミ讀ミ給フ燈油スラコトカケ」法燈永遠に消滅せんとする有様であつたが、蓮如は斯る間に起ちて、千辛萬苦の末、遂に大に宗風

を振興し、次代實如のときには、「富帝王ノ上ニモ出デ」後柏原帝即位の時には、「二萬貫ノ金ヲサ、ゲ奉ル」に至らしめた程の英僧である。今一休が蓮如と道交を結んだ事蹟に就いては、坊間種々の傳説もあるが、併しそれによつてその真相を捕へるとは頗る難い。兎に角、蓮如と一休との性情は、一見すると、全く相反對して居た様である。即ち、前者は燃ゆるが如き信念を以て、宗運の衰頹を挽回し、社會の墮落を救濟しやうとするに反し、後者は冷靜洒落なる態度を以て、一世を諷刺痛擊して措かなかつた。されば、前者は感情の人で、後者は理性の人、彼は火の如く、此は水の如しとも言ふべきである。斯様に全く矛盾反對せる兩者が、親しき道交を結んだ所以のものは、唯々眞摯の情を以てしたからである。即ち潔白なる眞情が投合したのである。そしてその交りが、何時の頃からであつたかといふことは、判然とはわからないが、一休が「山姥」の謠曲を作つたときに、中途、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は緑花は紅」と云ふ句の終りが、どうもうまく落ちつかないので、叡山に行つて、なかのよい人に相談をして、始めて「のいろく」と續けられたとの事である。

その親しい人とは、即ち蓮如上人の事である。そうすると、蓮如が叡山に上つて無動寺の覺成阿闍梨に就いて研學したのは、永享三年より同九年に至る七年間で、即ち十七より二十三歳の血氣盛りの時代、一休は當時三十八歳より四十四歳の間であつた。寛正二年十一月本願寺に於て、蓮如が十日十夜の間、高祖親鸞の二百回忌大法會を修するにのぞみて、一休もまた參詣して、呈上した和歌がある。

末世相應のこゝろを

襟卷のあたゝかそふな黒坊主こいつが法は天下一なり

このうち一休は、蓮如に祖師の像を懇望したので、蓮如は當時の名畫たる、芝法眼慶舜に命じて、親鸞の眞像を寫さしめ、自ら題名を書いておくつた。一休はそこで、その上にこの歌を題して、山城薪村の酬恩卷に藏しておいたとの事である。また或人が馬の圖に、この兩法師の贊をもとめた。一休まづ、

馬ぢやげな

次に蓮如は、

そうぢやげな

と題したこの話は、叢林に傳へ稱する所である。然るに一休が文明十三年十一月、まさに入寂せんとするに當り、門人の宗臨に遺囑して、歿後中陰の式は、善友山科本願寺の蓮如に託して、淨土念佛の廻向を修行する様依頼した。宗臨はそこで、その事由を蓮如に告げると、蓮如笑つていはく、我つねに禪師の活身を引導し了つたから、入寂の後は、念佛の功力に據るの謂れはない。唯佛陀の慈恩に酬いるの念佛勤行せられよと云ひ遣はしたとの事である。これで見ても、その道交の篤きこと、決して尋常でなかつたことが窺ひ知られるのである。

一路居士は、もと仁和寺の門主であつたが、世俗の紛々たるを厭ひ、ひそかにのがれて草菴を泉州石津の上市村にむすび、そこへ身を隠した人である。その歌に曰はく、

身を隠す庵の軒の朽ちぬれば生きても苔の下にこそすめ  
月や見ん月には見えしながらへて浮世をめぐる影も耻かし

彼が本名及び其性行に就いては、徵證すべきものがない。兎に角詩歌をもてあそび、清貧をたのしみ、風月を友として居たのである。一休が攝州住吉に居た時に、一日居士のもとに尋ねて行つて、卒然として問ひかけた、萬法有道如何是一路と。居士即ち對へていふ、萬事可休如何是一休と。これより互にゆきよかひて、心法を談じたとの事である。居士つねに草庵の側に畚をつるしてゆきゝの人の志をうけ、手取鍋にて粥を炊ぎ、またこれを洗ひ、湯を沸して茶を喫した。狂歌一首あり、いはく、

手とり鍋己れは口がさし出たぞ難炊たくと人にかたるな

ある日、村童等戯れに馬沓を入れおきければ、わが糧すでにつき果てたりとて、遂に食をたちて寂した。その庵居のあとは、寺となりて、一路山禪海寺と號し、大徳寺の末刹となつた。

又一休の門下には、知蘊居士夫妻及び村田珠光などいふ有名なる人があつた。知蘊居士性は、蜷川諱は親當、通稱を新右衛門と云ひ、足利義教に仕へ、政所の公役を勤め、右衛門少尉に任せられた。夙に武術に通じ、又和歌を好み、諸方

の宗匠に参詢して、獨脱の妙に達した。世に集外歌仙と稱する者の一に居り、且つ書に堪能であつた。或る夜、鳥邊野を過ると、四邊鬼氣沈々たる間に、一人の女が、茶毘の火に向つて坐禪して居た。其有様少しも恐怖の念がないようである。そこで親當恠みて、之を咎めると、女の曰はく、

夏蟬のもぬけはてぬる身となれば何かのこりてものおぢをせん

と。親當これを聞いて、直に悟道の貴むべきを感じ、普く當時の禪家を歴訪し、終に一日一休を山城の酬恩菴に訪づれた。一休問ふ、什麼の處より來る。親當曰はく、和尚の國より來れり。一休いはく、甚麼の事かある。親當いふ、鴉は鴉鳴を作し、鵲は鵲噪を作す。一休いはく、此外更に有ることなきか。親當曰はく、吉野の櫻花、今正に盛なりと。一休即ち機相投じ、先づ茶をすゝめて曰はく、何をがな參らせ度は思へどもだるま宗には一物もなし。親當之を謝して曰はく、

一物もなきを給はる心こそ本來空の妙味なりけり

と。これより親當、一休を師として参禪し、後薙髮して知蘊居士と號し、是より

往來いよく頻りに道交ます。濃かであつて、従つてその一揆一撓の人口に膾炙せるもの、虚實取りませ、非常に多いが、今一休か親當の間ひに答へて咏んだ和歌數首を掲げやう。

邪正一如と云ふことに就いて

生れても死ぬるありけりおしなべてしやかも達摩も猫子も杓子も

空即是色と云ふことを

白露のおのが姿は其のまゝにもみぢにおけるくれないの露

色即是空と云ふことを

花を見よいろかも共にちりはてゝ心なくても春は來にけり

又佛法の心得を問ふに、

佛法はなべのさかやき石のひげ繪にかく竹のともすれの音

尙この外に『道歌問答』と言ふ者がある。これを見ると、親當と一休との道交が、果してどの位の程度にあつたかといふこともわかるし、又一休が人生觀、一休が教化、及び一休が理想などの一端がほの見えるのである。

## 道歌問答

門松はめいどのたびの一里づか馬かごもなくとまりやもなし (一休)  
 年越はめいどの旅の間屋場か月日の飛脚あしをとめす (親當)  
 光陰は矢ばせを渡る舟よりもはやいとしらばすゑを三井寺 (一休)  
 分限に粟津にせゝをつかふなよこゝろ堅田にしまつからさき (親當)  
 金銀は慈悲となさけと義理と耻身の一代につかふためなり (一休)  
 世の中は貧者有徳者苦者樂者なん者か者とて末はむしやくしや (親當)  
 今日ほめて明日わるくいふ人の口なくも笑ふもうその世の中 (一休)  
 世の中は乗合舟のかりすまひよしあしともにめいしよ舊蹟 (親當)  
 一休もやぶれ衣で出るときば乞食坊主と人はいふらむ (同)  
 袈裟ころも有かたそうに見ゆれどもこれも俗家の他りき本願 (一休)  
 衣よりけさより俗の古じゆばんおのが伎倆できるぞたふとき (親當)  
 振袖も留袖とこそかはれどもはだかにすればおなじからだよ (一休)  
 骨かくす皮にはたれも迷ひけん美人といふも皮のわざなり (親當)

皮にこそ男女のへだてあれ骨にはかはる人かたもなし (一休)  
 なにごともみな偽の世なりけりしぬるといふもまことならねば (親當)  
 生れてはしぬるなりけりおしなべて釋迦も達磨も猫も杓子も (一休)  
 さとりなば坊主になるなさかなくへ地獄へいつて鬼にまけるな (親當)  
 鬼といふおそろしものはどこにある邪見の人のむねにすむなり (一休)  
 極樂やちごくがあるよとだまされてよろこぶ人におぢる人々 (親當)  
 この世にて慈悲も悪事もせぬ人はさぞや閻魔もこまりたまはん (一休)  
 地獄とは何をいはまのこけむしろいと欲とで身をやぶる人 (親當)  
 死んでから佛といふもなにゆゑぞ小言もいはす邪魔にならねば (一休)  
 死んでから佛になるはいらぬものいきたるうちによき人となれ (親當)  
 追善にあうたほとけが盆棚へとしくくればうかむせはなし (一休)  
 ほとけとはなんだらぼうし柿のたね下駄も佛もおなじ木のはし (親當)  
 ほとけにもなりかたまるはいらぬもの石佛らを見るにつけても (一休)  
 迷ふなよ五りんの石の墓じるしつみかさなりてあるとおもへば (親當)

引導は無事なるときにうけたまへまつこの旅におもむかぬうち (二休)  
 ひとり来てひとりで歸る道なるにみち教へんといふぞをかしき (親當)  
 ひとり来てひとりかへるも迷なりきたらずしらぬ道ををしへん (二休)  
 つまや子が側でなげくもきゝいれず死んでゆく身になんの引導 (親當)  
 極樂は十萬億土はるかなりとてもゆかれぬわらじ一足 (二休)  
 歳々に悪魔外道のながさるゝその西方にゆきたくもなし (親當)  
 きのふ過去けふの現世にあす未來おきての神に寐ての身佛 (二休)  
 一代の守本尊をたづぬるにわれ人ともに飯と汁なり (親當)  
 世の中はくうてかせいでねて起きて扱その後は死ぬるばかりぞ (二休)  
 肉もなくよくしやれかうべ穴賢めでたくかしくこれよりはなし (同)  
 浮世をばなんの絲瓜と思ふなよぶらりとしてはくらされもせず (親當)  
 世の中はへちまの皮のだん袋そこがぬければ穴へどんぶり (二休)  
 あら樂や虚空を家と住なして心にかゝる造作もなし (二休)  
 欲あかを洗ひおとせばさつぱりと襦袢につけしのりぞたふとき (親當)

煩惱の眼にばゝをふんづけて福はおしいとほしいとのよく (二休)  
 やけば灰埋めば土となるものをなにかのこりてつみとなるらん (親當)  
 親當の妻も亦一休に就いて禪要を聞き悟道に入つたものであるが、その歌  
 に曰はく、  
 あさいとのながく短くむづかしやうむのふたつをいつかはなれん  
 と、斯く夫婦もろ共に、一休の教化によりて、高潔の道契を結んだのは、寔に殊  
 勝の事ではあるまいか。  
 珠光氏は村田童名を茂吉といひ、南都の空市檢校の男であつて、幼少の時、稱  
 名寺の僧となつた。十餘年の間、稱名寺中法林菴に住して居たが、遂に法業を  
 怠つて破門せられ、二十五歳にいたりて、ついに還俗して、一休の俗弟となり、  
 工夫參學した。然るにこの珠光、坐禪するときに、睡眠する癖がある爲めに、之  
 れを某醫に問うたところが、醫は即ち茶の苦味は興奮に効あることを告げ  
 た。彼は之を聞きて大に喜び、梅尾の茶をもとめて、つねに之を喫して、大に其  
 効を解し、住する所の紫野大徳寺中眞珠菴に於て、來院の客賓に之を饗し、是

より茶事の式法を定め、自己の必要を究明し、數寄の妙術に達した是より先き、一日一休が喫茶の要を問ふに對へて、千光國師の喫茶靜心法を以てした。一休又問ふ、趙州の喫茶如何、珠光嘿然として言なし。是に於て一休茶を珠光に與へ、珠光がその茶碗を捧げて、將に吞まうとする一刹那、一休忽ち一喝を下し、鐵如意を揮て珠光の手にせる茶碗を叩き割つた。而かも珠光は少しも動じた様子なく、泰然自若と落着いて居たが、暫くして珠光は禮した。一休更に、喫茶旨無の時什麼と問ひかけたが、珠光無言のまゝ、立つて玄關に出ると、一休又茶を喫して去る時如何と問詰めた。珠光やがて答へて曰はく、柳は綠花は紅の眞面目と。一休はそこで微笑し、遂に印可を與へた。珠光は後六條堀川に茶室を造り、専ら茶を事とした。是れ實に本邦に於て茶儀師匠の先祖である。珠光晩年に及んで、その高足武野紹鷗を招ぎ、茶道の奥意を傳授し、かつ一休から貰つた圓悟禪師の墨蹟及び投頭巾の茶入、鶴の一聲の花入を授け、曰はく、こは我が數寄の師なれば、この道の證を後世に傳へよと。又珠光常に門人を戒めて曰はく、茶の徳たるや、須らく儉を守るを以て旨とすべし、故に

足らずして足れりとなす、美麗をこのむこと勿れ、信を以て交はらざれば茶友にあらず、専ら内を務めて外を飾ること勿れ、戲言は必ず狂を發す、語實儀にあらざれば言ふこと勿れ、業は心身を離るゝと勿れ、行住坐臥その本分を動かさざるを以て至れりとなすと。然るに珠光は享年八十一にして歿し、眞珠庵に葬ることゝなつた。その門下より有名なる人多く輩出して、後世斯道を天下に普及せしむる様になつたのである。

### 三、彼が感化

吾人は已に一休が友に對し、はた門弟に對するにも、必ず己が胸襟を披き、誠心を以て交り、又は教化したことを述べた。要するに、彼が一般世人を化導するにも、亦之に外ならないので、その赤裸々なる所、却つて凡衆の眼には奇怪に見ゆるのである。今『雲萍雜志』に載せたる逸話は、之を證する適例である。

一休禪師、紫野におはせし時、宅間某、御こゝろやすく参りて、物語りのついでことに、御異見申やうは、君には、尊き御僧にて御はしませとも、餘りに打



つけに人を教化し玉へば、在俗の輩は、物いまひなどいたせるものどもばかりにて、かへりて弘通に便りよからで、志しあるものも、はては遠ざかり侍るなり、非凡のやからは格別、凡夫には、とかくめでたき事を申させ玉はりたし、さあらば、悦びて歸依し参らする者多かるべし、なべて人は、よろしきとは、己がことゝばかりおもひて、あしきことは、皆他人のうへとのみ心得る慣ひにて侍る。と申したるに、禪師こたへて、よし／＼心得たりとて、筆をとり玉ひて、佛家に在住すれば、いましめを以て本とし、三寶の海に入れば、まことを以て本とす、身死して巖根にありては、骨また淨し。と書して、外にめでたきことはしらすとの玉へりとかや。

是れ實に彼の眞情赤心を表白したものである。凡て人は、假面を被ふれる動物であつて、常に秘密の幕を以て、心の醜陋なる方面を覆ひ隠すところに努めて居るのであるから、偶々人の内部を赤裸々に暴露するものに接すると、却つて驚愕の眼をあげてこれを見る。一休は這箇の假面を撤去し、區々たる威儀に拘束することなく、その眞面目を以て、世人を化導しようとしたのであ

る。故に虚偽の假面を被れる凡人の眼には、彼が一舉手一投足も、奇怪に見えたので、是れ彼が風狂滑稽と云ひ囃された所以であると思ふ。彼が尺八を吹いて人家の軒に立ち、木劍を腰にして往來を活歩し、正月の元日に鬪體を竹竿の先に吊るして「御用心」と振れ廻り、或は偶頰を賦し、和歌を詠じ、機に臨み變に應じて、滑稽洒脱の振舞ひをしたのは、一般世人の眼には、如何に馬鹿氣て見えもし、如何に狂氣じみて映つたものであらう。而も斯くの如き狂態を演せる一休は、社會の老若男女より、慈母の如く慕はれ、嚴父の如く敬はれた所以のものは何故であらうか。若し彼が眞に狂氣じみた醜態を演ずるものであつたならば、誰あつて彼に敬慕の情を寄するものがあらうか。唯冷笑と嘲罵との裡に葬られて了つたであらう。然り彼は、滑稽狂態の外に人に感動を與へる所の何物かを持つて居たのである。冷かなる表面のその下には、燃ゆるが如き活火が潜在して居たのである。活火とは何ぞや、即ち所謂赤誠であつて、この赤誠の活火が、機に觸れて絶えず表現せられ、世人の心琴に接觸して、一種の感動を起さしめたので、是れ即ち宗教的感化と云ふべきもの

である。されど彼は、この宗教的感化を施すに、夫の熱烈なる涙を以てするかはりに、常に洒落なる笑を以てした。故に一見頗る非常識的であつて、殊にその甚しきに至つては、全く狂漢の様にも誤解せられたのだが、しかし親しく近侍すると、却つてその徳に服するやうになるのであつた。普通のものは、遠くから見ればこそ尊くも思はれ、立派にも見えるのであるが、近づいては誠にお話しにならないものである。然るに一休は全然その反對の觀があつたのは、益々以て彼の大なるに感ぜざるを得ないではないか。彼が文明九年九月兵亂を避けるがために、永く住み馴れた山城の新村を去るとき、の如きも、老幼男女となく、一村の民舉りて集り來り、道を遮ぎりて慕ひ、或は轡を攀ぢ、或は衣を曳き、涙を揮つて別を惜んだと云ふ事蹟や、又應仁二年に靈山和尚、一百年忌を執行するに當りて、凡そ都鄙を論せず、一休の徳を欽め、彼の風を慕へるものは、少となく、老となく、皆馳せ集りて伊蒲の供を助けたと云ひ、是等「一休和尚年譜」に記載してある事蹟に徴して見ても、彼が世民に感化を與へたことの如何に深大であつたか、その一般を想像すると、が出来るのである。

る。要するに、彼が呵々と笑ふ中にも、無量の教訓がこもつて居るのであるし、彼が馬鹿氣た狂態の裡にも、世の弊害に對する無限の熱涙が潜んで居たのである。是れ即ち、世を憤り時を矯る者は、言を危うし行を危うすと見らるゝのであるけれども、その心衷に皓々たる赤誠が閃めいて居るのである。故に彼が如く、洒脱滑稽、風流無礙で、全く善惡邪正を超脱して居るが如きものも、猶ほ虚偽不正を惡むこと甚しく、その氣鋒の鋭きこと、之を破責して一步も假さないのは自然の數である。文安三年の頃、舜日峰の徒にて、土州太平といふもの、一日一休を訪問して曰く、徳山門に入れば便ち棒す、其の口未だ合はず、後句將ち來る。一休返詰して曰く、本有圓成の佛、甚麼の處より來る。平曰く、看々。一休打して曰く、龍頭蛇尾の漢と。平遂に無言にして逃竄したと云ふことである。斯様に、對手が參禪に熟達して自負して居るものでも、彼の面前に到ると、皆機を奪はれ、茫然口を噤んで逃げ去ると云ふ、その機鋒の峻鋭なること、驚くべきではあるまいか。又當時禪林の腐敗し墮落せる状態を見て、慨然として曰く、熟々諸方を視るに、邪解は牛毛の如く、正見は鱗角の如し。と云ひ、遂に

緇徒の箴戒を定め、若し之に背き不正を行ふ者あらば、鞭撻して之を獄に繋ぐべし、是れ法の姦賊にして、吾が怨敵なり。」と謂へるを以て見るも、どんなに不正を悪めるかい分るであらう。世人が一体の名を聞いて、直に敬慕の念を起す所以のものは、全く彼が天真爛漫として、一小汚點をも留めざる赤誠、即ち彼が嬉笑怒罵より一舉手一投足に至るまでが、皆此の赤誠を發露したものであるからである。一体の滅後茲に殆んど四百有餘年であるが、彼の名は、直に人をして風流無礙、洒脫滑稽の感を惹起せしめ、その人を景慕追懐に堪へざらしむるのである。あゝ、一体の感化も、亦偉大なりといふべきではあるまいか。

宗純、心機快活、談諧戲設、物我相忘、貴賤一視、志存慈惠、  
隨得隨施、兒童馴愛、烏雀就啄、(野史)

## 第六章 一体の平民的教化

吾人は、已に一体の一生涯に就いて、その大體を述べ、彼の本領は、平民的教化にあることを論じたが、更にこの章に於て、少しく平民的教化が、當時如何程の效果影響を興へたかを調べて見たいと思ふ。

元來、佛教に難易二門があつて、その對機に依りて法を説くこと、恰も應病與藥の如しと云うて、上根のものは、眞實深遠の教理を以て誨へ、下根の者は、方便易行の道を以て導くようになつて居るのであるけれども、我が平安朝以前の佛教は、貴族的の傾向が盛んであつて、平民的教化は普く行はれなかつた。是れが爲めに、その弊所を打破して、新に平民的福音を唱道したのは、即ち鎌倉佛教である。特に親鸞、法然、日蓮の宗教は、我が天下を風靡し、山村僻邑に至るまで、普くその教化に浴する様になつたのは、我が佛教史上に、顯著なる事蹟である。然るに、禪が我が國に傳播せらるゝ様になつたのは、同じく鎌倉時代であつたが、唯道元の曹洞禪は、専ら閑寂の地を擇んで禪定を修め、北陸

の野のごとき、教化の未だ普く行はれて居ないところに、一宗の基礎を定め、大に平民的教化を努めたのに反して、榮西の傳へた臨濟禪は、兎角權勢に阿附し、貴族的臭味を帯びて、専ら武門の間に流行し、現に榮西が日本佛教中興願文、『興禪護國論』を撰して、當時の政治家の意を迎へたといふような始末で、従つて臨濟禪は、武門政治の跋扈と共に、大にその教勢を振張する事となつた。即ち北條泰時、時頼、時宗等の歸依によつて、淨妙、東勝及び建長、圓覺等の大刹が建てられ、泰時の行勇に於ける、時頼の道隆に於ける、時宗の無學に於ける、その關係は甚だ親密であつて、禪宗が他宗を壓して、獨りその法幢を高く掲げるこゝとなつたのである。足利時代となつて、鎌倉禪に枯杭して、京都の禪は、聖一、大應の二國師によりて大に勃興を來し、尋いて夢窓起つて足利尊氏の崇敬を得、所謂五山の礎を固める様になつた。世は足利の天下となつて、華奢を姿にする様になると共に、五山十刹の下に、幾多の英僧林の如く輩出した。空谷、絶海、義堂、妙葩などは、足利義滿、義政等の歸依を受けて、天下の政權に干り、文學、外交等、彼等僧徒の掌中に握り、一世の盛況を極めるに至つ

た。斯様に、足利時代に於ける所謂五山禪は、殆ど武士的宗教として、専ら中流以上の間に行はれ、下層界には、その教化普く行はれなかつたのは、實に禪の大缺陷であると云はなければならぬ。是の時に當つて、この臨濟の中に居て、獨り貴族主義に反し、政治結託主義を痛撃して、斷然平民的教化に一身を委ねたものありとせば、豈稱讚すべきではあるまいか。彼一休は即ち其人である。元來、榮西が臨濟禪を我が國土に宣揚するに至つたのは、恰かも源空一派の淨土門が盛んに唱導せられた反動の觀がある。即ち淨土門は人類を貶して末代劣機の衆生となし、一切中の最勝たる彌陀一佛に依憑しなければならぬと説く、所謂純粹他力の説を唱ふるに反し、佛心宗は、人類を擧げて本來成佛の性を具有し、人類を以て諸佛の本體として、直指人心、見性成佛と説く、所謂純粹自力の法を弘めた。淨土門は專修易行の念佛を説き、厭穢欣淨の福音を宣べ、専ら平民的教化をなし、佛心宗は之に反して、唯佛與佛、以心傳心の法

であつて、直指人心見性成佛といふ、極めて直截で崇高な理義を會するにあつて、専ら中流以上の士人を化導した。淨土門は實際に稱名勤行を専修して、現世利益祈禱を排斥したるに反し、佛心宗は、専ら理想の堂奥を示して、悟道の終極を尙ひ、稍もすれば現世祈禱をなすをも辭しなかつた。斯様に淨土門と佛心宗とか、相對立して、一は主として教化を廣く下層社會に布き、一は貴族士人の宗教として大にその勢力を上流に得る様になつたのは、實に鎌倉時代佛教の雙壁として、宗教史上の一奇觀である。

蓋し禪宗の説く所は、大に從來の佛教と趣きを異にして居る。即ち天台眞言の如く、高遠幽玄の教理を究めんか爲めに、名相文字に拘泥するのでもなし、又淨土門の如く、實際を尙ぶの餘り、卑屈に陥り俗化するといふのでもなく、唯不立文字、教外別傳、直指人心、見性成佛と説くのである。道元即ち曰く、

教外といふは不立文字也、所謂禪宗なり、學ぶべき師もなし、示すべき機もなし、教ふべきものもなし、只自獨覺法なり、(中略)只一念不生の處に指向ひて、自己の本分を打開す、是れ禪宗の大綱なり。

而してその見性とは何であるかと云ふに、曰く、

見性とは佛性也、萬法の實相也、衆生の心性是也、此性は有情非情に渡り、凡夫賢聖に普くして、都て住す所なし、(中略)又此性は色に非ず、有に非ず、無に非ず、住に非ず、明に非ず、無明に非ず、煩惱に非ず、菩提に非ず、全く實相なし、之を覺るを見性と名つくるなり。

こゝに至つて始めて大悟徹底と名つけるのである。然らば大悟とは何ぞや、曰く、

大悟といふは、心は本より不生なり、法は本より無法なり、煩惱本より是れ菩提なり、心として求むべき心もなし、法として尋ぬべき法もなし、煩惱として斷すべき煩惱もなし、本より菩提なるが故に、菩提として證すべきなしと悟るを大悟と名づく。

斯くの如く、拈華微笑の正法眼藏により、直指人心の妙理に達すと説くと、ころの佛心宗は、夫の道の道とすべきは常道にあらず、名の名とすべきは常名にあらず。無名は天地の始、有名は萬物の母、故に常無欲以て其妙を觀、常有欲

以て其微を觀ると説いた老子の道教と、略その軌を一にして、單刀直入、活殺自在の教理は、夫の恬淡にして活機を尙ぶ、武士の歸依する所となつたのは當然である。然るに、臨濟曹洞共に同じく佛心宗と稱し、その頓悟の大機に至ては、共に本來無一物、何處惹塵埃と云ふ、六祖慧能の心契以上に出るのでもないし、又唯佛與佛、以心傳心といふ第一義諦の法門に於ては、秋毫の異同もないのであるが、しかし、臨濟は階級禪を主とし、曹洞は嘿照禪を尙び、表面に顯はれた行儀提撕に差異がある。殊に臨濟宗の氣風は峻峻で、機關禪とも云つて、大に活氣がある。「人天眼目」にその特徴を示して、

臨濟宗は、大機大用羅籠を脱し、窠臼を出つ、虎の如くに驟き、龍の如くに奔り、星の如くに馳せ、電の如くに激し、天關を轉じ、地軸を幹らし、天に冲る氣を負ひ、格外の提持を用ふ、卷舒擒縱、活殺自由なり。

と言つてある。之に反し、曹洞禪は姑息禪とか、默然坐地、解脱の深坑とか云つて、家風綿密である。即ち曰はく、

曹洞宗は家風細密にして、言行相應す、機に隨ひ物に應じ、語に就いて人を

接し、他の來處を看る、忽ち偏中に正を認むるものあり、忽ち正中に偏を認むるものあり、忽ち相兼帶し、忽ち同、忽ち異なり。

斯様に臨濟と曹洞とは、その趣きが異つて居る。従つて、我國に始めて之を傳へた、榮西及び道元其人の性情も、餘程異つたところがある。即ち榮西は元民家の出であるに拘らず、専ら上流に教化を布き、權勢を尙びて貴族的臭味を帯びたるに反し、道元は貴族の出であるのに、主として草莽の間に教法を弘め、専ら平民的化導に力を致した。その結果として、曹洞禪は廣く北陸邊陲の地に流布したが、臨濟禪は武家政治と運命を共にして、室町幕府の盛時に當り、その光榮旺盛を極むる様になつたのである。

然れども、宗教宣布の對手とする所は、唯一部分に限らるゝのでなく、一般社會人類を化導するにあるのである。然るに人類には、賢愚智鈍の別があるからして、之を教化するに、自然に難易の二門を生ずるので、彼の幽玄高遠なる天台に於ても、權實兩門を開いて、上根の徒に向つては一念三千の妙理を説くけれども、無學文盲の一般人には、到底その妙理を解せしむることは覺束

ないから、そこで至極の妙理に到達せしむる方便の易行門を案出するといふような工合に、今禪宗に於ても、日夜生計に營々たるものに向つて、如何に考案の工夫を勤めた所が、到底行はるゝものでない、若し彼等が樹下石上に達磨を學ふとしたならば、唯餓死するより外はないのである。そこで、是等無知なる衆生のために、唯心所變の玄理を容易に了解せしめ、宗教的信仰を起さしむるところの、方便易行の道がなければならぬ譯となるのである。蓋し、我國に禪の始めて傳へられたのは、餘程古いことであるが、最澄が延暦二十一年に入唐して、脩然禪師より北宗禪を傳來したのが、その後、南都北嶺の間に傳へ行はれて居たけれども、たゞ一の修養法として位のものであつて、それに依つて、宗教的教化などいふやうなことは、行はれて居なかつたらしい。然るに榮西道元等が、南宗禪を傳來せしより、宗教的教化を廣く一般に布くに至つたので、苟くも國師と稱せられる程の人々は、皆假名法語といふものを殘して置たのである。然れども、言語文字以外に超絶したる禪宗は、稍もすれば高遠なる言理に奔りて、教化傳道を疎外する傾向があつて、特に臨濟

禪は、徒に權勢に阿附したり、さもなければ、山水明媚の間、光風明月に嘯いたりして、兎角平民的教化を顧みざるの弊が起つたのである。這箇の弊を打破して、中古佛教に眞光明を興へたのが、即ち一休であるのである。一休の一生は、殆どこの平民的教化の爲めに、犠牲となつたと言つてもよい位である。彼が冷靜恬淡たる精神の裡にも、眞摯なる信念が燦え立つて居た。彼が滑稽諧謔の間にも、確乎不可動の信念は、潜んで居た。彼が狂態の中にも、慈悲の涙は流れて居たのである。従つて、吾人は、彼を以て曾呂利輩の廳輕者と、同一視することの妥當でないことを斷言せざるを得ないのである。否、一休の一休たる所以の眞面目は、實に平民的教化の熱烈なる信念である。たゞ夫の滑稽狂態の如きは、彼が性情の然らしめたるもの、もとより與つて多きに居るではあらうが、又當時の如き社會に在り、當時の如き宗教界に居て、しかも臨濟禪の立脚地に立ち、平民的教化をなさんとするものにとりては、已むを得ない手段の一つであつたかも知れない。即ち當時虚偽虚榮を以て蔽はれたる社會の、愚蒙を啓き、罪惡を匡すには、或は狂態を演じ、或は滑稽を爲

すの必要もあつたのであらうと思ふ。さればこそ、彼が當時子女老翁に至るまで、親の如くに慕はれ、佛の如くに崇められたのみならず、後世に至るまで、兒童走卒も、その名を聞いて、一種追慕の念を起さしむる所以である。

彼が平民的教化に努めたる法語は、今に傳はつて居るものが少くない、勿論後人の偽作に出たものも多いが、その中で『あみだはだか物語』、『二人比丘尼』、『假名法語』、『水鏡』などは、有名なものであつて、一休の眞作として信ずるに足るものである。今彼が法語に就いて、その口吻を窺ふに、平易明晰にして、而かもその眞摯熱誠なる心持が、紙上に溢れて居るのである。『あみだはだか物語』に、小笹の少將爲忠と云ふ人が、我無智愚鈍の身なれば、坐禪參學の道に至りがたいといふので、彌陀他方の教へに就いて尋ねた。そこで一休は彌陀に就きて説いて曰く、

阿彌陀佛とは、石の中の火の如し。此火は法界十方の虚空に滿々として、空劫已前より有る火なり。縮るときは、芥子の内にも籠り、石の中にとありと雖も、目にも見えず、其石を探れども、熱くもなく、冷くもなし。自ら現はれ出で

燃ゆることなく、又去りて消ゆることもなく、何時も絶えず有りて、鐵を合せは忽ち火の顯はれ出るが如し。彌陀佛も、法界の虚空に、自然として、空劫已前より、いつも絶えず有りて、來て現はれ玉ふこともなく、又去て隠れ玉ふともなし。名號を稱へ、眞實信心深き衆生の機の前には、來迎ありて光明を照し玉ふ、之を淨土と定め住み玉ふ。縦へば大空の月、諸々の水に宿り玉ふといへども、濁れる水には宿り玉はず、澄める水にのみ宿り玉ふが如し。又水晶は、内外眞實清淨にして、正に清ければ、同じく顯し宿り玉ふ故に、水火を取るもの也。然れども濁れる玉には現はれ玉はず、阿彌陀佛も此の如し。(中略)阿彌陀佛は、邪見放逸なる人、貧しき人、賤き人の嫌なく、總して皆宿り玉ふと雖ども、内外清淨にして、眞實の心なければ顯はれ玉はず。縦へば不淨なる泥土の底に交りたる石をも、取り揚げて清淨にして打出せば、火の現はれ出るが如し。衆生の誠の心は、鐵と石とを打合はすに似たり。是れ阿彌陀佛の根本也。然るを釋尊末世の衆生の爲めに、利益方便を廻らし、阿彌陀佛とは名つけ玉ふ也。わが宗には、悟りと云ひ、又佛性と云も是也。云云。



と。彼は更に淨土に就いて説明して曰く、

人間も、觀念工夫を以て、彼の一心の根本を磨き立て、見性成佛すれば、頼むべき淨土もなく、恐るべき地獄もなく、遁るべき煩惱もなし、善惡不二なり、生死自在にして、生の中何れへ生せんも心の儘なり、之を則ち眞如の珠とも、又は如意寶珠とも名けて、言語道斷、安樂にして言の葉にも述べ難く、樂み極まる、故に能く悟りたる處を極樂淨土と名づけ、愚痴の凡夫に之を顯はし玉ふなり。

阿彌陀とは南(皆身)にあるを知らずして西を願ふははかなかりけり斯くの如く、他力本願の淨土門を、巧みに自力修行の佛心宗に融合調和して、宗教的信念を鼓吹した所、最も巧妙を極め、また頗る卓見と稱すべきではないか。是れ所謂禪の易行門を開いて、下層無知の者を誘ひ、善道に進ましめんとする老婆心といふべきものである。

彼は、亦『假名法語』に於て、地獄極樂に就いて説いて曰く、

ある人、達摩大師に問ふ、地獄とはいづれの所ぞや、答へて曰く、汝が心中に

貪嗔痴の三毒是也。貪嗔痴とは、貪欲とはよろづの愛念執着の欲を申す也。嗔とははらを立つる念を申す也。痴とは愚痴とて何事も心のままになき事をかなしみ、我と我心をなやます事を申す也。此三毒かくの如く善惡の報を造り出し、地獄に落つる也。地獄とて、別に餘の世界ある事にては非ず。又問ふ、極樂とはいづれの所ぞや、こたへて曰く、極樂淨土とて、ほかにある可からず、汝が心中の三毒をはらふ所、即ち淨土なりと答へ給ふ。

これ亦平易適切に、平民的教化を試みたのである。蓋し淨土門の流行するや、未來淨土の觀念は、全く世人に誤解せられ、その弊として、現世に於ける罪惡も、一念發起して彌陀を信じさへすれば、未來は必ず救はれると謂ひ、遂に現在社會に於ける道義を犯し、不信を逞うする様になつた。之れが弊害を看破して、頂門に一針を加へたのは、即ち一休である。かやうに厭世的觀念を打破して、現世に於ける幸福平和の重んずべき、所謂樂天的思想を鼓吹したのは、是れ實に當時の一大藥石であつた。

一休が、斯く平民的教化を唱へて、専ら下層社會の迷闇を開拓するに努めた

のは、當時豪奢に耽溺して、下層の教化を顧みなかつた貴族的宗教家の跋扈に憤慨したからである。故に彼は、這般の俗僧に一大痛棒を啖はして、毫も假借しなかつたのである。「骸骨」の中に曰く。

古へは、道心をおこす人は寺に入りしが、今は皆寺を出づるなり、見れば、坊主に知識もなく、坐禪を物憂く思ひ、工夫を爲さずして、道具をたしなみ、座敷をかざり、我慢多くして、たゞ衣を着たるを名聞にして、ころもは着たるともたゞとりかへたる在家なるべし、げさ衣は着たりとも、衣は繩となりて身をしばり、袈裟は鐵のしもくとなりて身をうちさいなむと見えたり、云々。

由來、本來無一物、何處惹塵埃と云うて、物質的形式的以外の境に超然として、恬淡高潔たるべき禪宗僧侶でありながら、區々たる名利の奴隸となり、徒に權貴に阿り、燦爛たる袈裟や衣を着けて、揚々と誇つて居るのは、その精神の腐敗した證據である。彼は之れが爲めに、憤然として起ちて、之を痛撃して措かなかつた。そして自ら平民の友として、下層界の老若男女に向つて、切々た

る傳道の化益を布いたのは、其志操の高潔なるを、なんと嘆稱すべきではなからうか。彼が已むを得ない事情で、紫野の大徳寺の住持たる勅命を拜した時に、五十年來、篋笠淡如、勅黃捧照、莫愧于懷哉と嘆じ、又その紫衣を賜はるに及んでは、大燈門第滅殘燈、難解吟懷一夜冬、五十年來篋笠客、愧慚今日紫衣僧と慨いた。吾人は此を思ふ毎に、常に夫の永平の道元を追懷するのである。道元は天下の權家の造寺を斥け、更に尊貴の恩賜に對して辭すると再三、而かも許されないので、乃ち一偈を打して曰く、

永平雖谷淺、勅命重重重、却被猿鶴笑、紫衣一老翁、

と、その恬淡にして富貴名利に戀々たることなく、一身を高潔の處に安んじて、孜孜平民的教化の爲めに盡瘁した高懷に至つては、兩禪師共にその揆を一にし、實に千歳の好龜鑑と云ふべきである。

惟ふに、平民的教化の成功は、まづ高遠奥妙の教理を、最も平易に説くことを一要件とする。而して一休は、この點に關して、實に一種獨得の妙所を有して居た。即ち彼が般若心經を解説したるものを見るに、極めて簡潔で明晰で、そ

していろ／＼の例證を擧げて、丁寧親切を盡して居る。あれなれば假令どんな愚昧のものでも容易に了解することが出来るのである。又『水鏡目なし用心』の中に、愚蒙の者を諭して曰く、

本來もなき古への我なれば死ゆくかたも何もかもなし

ゆく水に數かくよりもはかなきは佛をたのむ人の後の世

作りおく罪の須彌ほどあるならばゑんまのちやうにつけ所なし

釋迦といふいたつらものが世に出て、おほくの人をまよはするかな

是は是非は非にしておき、生は生、死は死、花は花、水は水、草は草、土は土、我は

これ何ものぞ何者ぞと、頭頂より尻までさぐるべし、さぐるとも、さぐられぬところは我なり。

心とはいかなるものをいふやらんすみ繪にかきし松風の音

我法をいはいでもいらぬ春の花もひらけてちりて土とこそなれ

斯くの如く、幽遠奥妙なる唯心の教理を、下根劣機の一般人民をして、了解せしむると云ふことは、頗る困難とする所であるに拘らず、彼は敢て淨土門の

方便説を假らずして、最も直截に平易に、而かも趣味津々たる中に、一般に分らしむる様に説きたる所、彼獨得の長所で、夫の道歌や、狂詩や、假名法語の様なものは、皆人をして、嘻笑諧謔の裡に、現世の樂しむべく、又自身の貴ぶべきことを知らしめ、遂に厭世憂鬱の雲を以て蔽はれたる社會に、一道の樂天的光明を示し、而かも本を忘れて糞土に狂奔せる當時の社會を戒めた點に於ては、彼の効蹟や偉大なりと言はなければならぬ。

彼が平民的教化に努めたのは、管に文筆の上ばかりでなく、前章既に詳述した通り、彼の一生は、殆んど南船北馬、四方に法鼓を鳴らして、平民的福音を宣傳するに費したのである。彼が一般人民の最も祝すべしとする年の元日に當り、竹の先に鬮體を吊して、御用心／＼と呼び廻りしが如きは、全く狂的舉動に類して居るけれども、而かも當時の社會が、舉りて豪奢浮華の風に漂うて居るその迷雲を披かんが爲めの一警策に過ぎないのである。かやうに仔細に吟味すれば、彼が演じた滑稽諧謔の千態萬狀は、一として何等かの教訓でないものはない。然りこれ以て、社會の弊害を諷刺し、これ以て、宗教的

信念を吹込み、これ以て、人間道德の扶植を試みたのである。故に一面には、高遠なる佛教の妙理を平易に説いて、社會人民を教化すると共に、他面には、社會に於ける虚偽不正に對しては、露骨に單刀直入的に、或は諧謔を以て、或は狂態を以て、之を矯正訓戒したのである。是れ彼が一生の奇行として、喧傳せらるゝ逸話に依つても、明に看取し得らるゝ所である。

吾人は今、彼が平民的教化の爲めにもしたる、夫の『假名法語』が如何に眞摯で適切であるか、その一般を知る料に供せんが爲めに、その一部を左に擧げやう。

一休が母藤原氏に送りたるかな法語

古へ今に至るまで、うき世のありさま、夢の如くにさへ思召され候へば、何事も御心のとまる事御ざ候ましく候。爰を佛御觀念有て、法華經の文に、觀彼久遠、猶如今日と御のへ候。此文の意は、かの久しきとをき事を見玉ふに、同じく今日のことくに見玉へとの御事にて候。天地ひらけはじまりしより已來、かはることなしと、萬の事をさとりたまふとの御事にて候。しかれば、

ば、さのみ深く御不審あるましく候。佛法と申は、執着をいましめ玉ふのみ、さらに心をとめても、其甲斐なきことにわざと見まひらせ候を、まづ禪家にもちひ申候。かやう申候事、證據なく候へば、如何とおぼし召候やと存じて、むかしの事を大かた引申入候。都に夢窓國師とて、日本にかくれなき御僧のまし／＼ける。其頃は、尊氏將軍の御代なり。かの夢窓國師さとり

歌に、

夢の世にゆめの如くに生れ來てつゆときえなん身こそやすけれ  
夫れ人間のありさま、萬事とよまることなし。もとより生のはじめをしらざれば、死のをはりをわきまへず、やみ／＼ぼう／＼として苦の海にしづむなり。佛こゝを哀とおぼしめして、色々の御方便にて、衆生をすくひ玉ふ。されども、人間のこゝろ不同にして、惡道へあゆみをすゝめ、善き方へは心すゝみがたく、いたづらに光陰をおくり、六道あはれみの業果たえず。たま／＼教にしたがふといへども、名利の善をなすことばかりなり。名利と申すは、其身の名をあげ、人にはめられんと思ふ心をたねとして、堂塔を建立

し、ときの富貴におこれり、斯くの如くの人を、佛はふかくきはせ玉ふ。まことの道は、萬事法度をそむかず、其世にしたがひて、かたく法を守る人を、佛道に成就の人と申すなり。御としもはやくれちかくならせたまへば、なにの御望御座候はんや、殊更地獄の話をもしろしめされ候へば、ゆく水の如くに御心もたせ給ひて、御むねのうち何ごとも御座なく候へば、世尊御一體の御身にて御座あるべく候。こゝを佛三部經に、已心の彌陀、唯心の淨土とのべ給へり。此の文字の心は、おのれがこゝろ彌陀、たゞ心の淨土と申す也。然れば、千萬億土とは、御ねがひあるまじく候。

佛とは何をいはまのこけ庭たゞしんしんにしくものはなし

此歌の如く、御受用候へば、なにをも佛心と見まゐらすべく候。古へ舟田の御方丈にて、ほどなく宗建をはじめまゐらせ、人々すぎゆかせ給ひて、夢とおぼし召されず候や。申してもつくし難きは、かやうに御けなげに御入候て、わたくしもながらへ、佛法の御事とも、申しあげまゐらせ候事、他生の縁ふかしと存じ候。因果經に、自身誰ならんと佛も御のべ候。又母にて候も

のは、七十六にして、去年御はてられ候、心昌と申せし人の辭世のうたに、

世々ごとに見えつかくれつすむ月の替はらぬ色をたれかしらまし

この歌を口すさみて、其後はそれさまへ参りて、御菩提の心をすゝめ申し候へと、くりかへし申され候ひつる。かの御めいをそむきがたく存候て、たびくゝまゐり候ひつる。母にて候ものゝ事、おもひ出し参らせ候へば、一しほそなたへまゐりたくこそ候へ。はやそれさまの御覺悟も、大安樂の道に御心つき候へば、めでたく満足いたし候。御なぐさみなどには、御看經もしかるべく候。御心つくしては、努め努め御さた候まじく候。大般若の文に、一切不行を佛の行とすと御座候。爰をもつて、むかしさる知識の歌に、

あら樂や虚空を家と住なして心にかゝるそらさへもなし

いづるとも入るとも月を思はねば心にかゝる山の端もなし

是れは生死にとりあはぬところの歌にて候。よくくゝ御工夫あるべく候。

又弘法大師の御辭世に、

今ははや後世の勤もせざりけりあうんの二字のあるにまかせて

いづれもさとりの人、かやうにひまあき候やうに申しおかれ候、又慈鎮和尚のうたに、

かりの世にまた旅ねして草枕ゆめの世にまた夢を見るかな

ひきよせてむすへは草の庵にてとくれはもとの野原なりけり

これは色相のうへを、かろく思召候へとの心にて候、いつの日いつの時、御大事きたりまゐらせ候とも、御心の内に、何事も思し召すまじく候、病難もしいたくせめ來るとも、そのくるしみにまかせて、相はて候へと、大唐の黄檗禪師の傳心法要と申すにも、かきおかれ候、日本にては、聖徳太子、病難の時、この歌あそばされ候。

浮雲はいくへもかゝれ空に消え月はくまなきひかりなりけり

この歌の心は、何事もとりあひ候はで、無念無想の所をもちる候へとの御事にて候、又由良の開山のうたに、

何ごとも夢まほろしとさとりては現なき世のすまひなりけり

この歌の心は、如何なる大王皇后の外、上下の人々もかなしみ給ふは、死の道にて候。こゝをさへ御覺悟候へは、すなはちあんやうの淨土、九ほんの蓮華にまとはれて、大安樂の御身とならせ給ふべし。大世尊の御說法にも、女人成佛のかたき事をとき給ふ。かやうの事を聞しめして御道心すてさせ給ふまじく候。そのとわりをあらゝし申上候。男子に生をうけ申し候ても、のこらず成佛すべきにあらず。ことに龍女は八才にして三國に名を残し申候。御經にもほめ給ふ。しかれば、女人こそなほも御たのもしき事にて候へば、成佛とて、べちにたつときひかりもはなち、奇特をも見せ申し候事は有るまじく候。御悟にて、御心中に、これぞ御不審候はぬと思召候事、御座候を大悟と申す事に候。佛御入滅の後、祖師先徳のさたし給ふ御法にも、見理受用の二つにて御入候。さんがくをも、御太儀に思召まじく候。其教は、祖師のいろく、苦勞し、朝夕のぎやう體をなし、五戒五百戒を立てられ候事も、尤も一身のさたにて御いり候。御女房衆の御さとりありしは、嵯峨天皇の后、檀林皇后也。其外人の數をしらず、美濃國は興性寺の、千代野と申す女さとりて候、そのうたに、

とやかくとたくみし桶の底ぬけて水たまらねば月もやどらす  
 かやうの事をきこしめして、けふよりは禪宗のさんがくに御心をつくし  
 給ふべしがいふん御てをひき申すべし、まづくさくさくの心をたせ  
 玉ひ、後の世を御たすかり候はんと、御覺悟候へとすゝめ申す者は、なにも  
 のぞや、又かやうに不審をかけ候者は、なに者ぞや、目に見えずして、さま／＼  
 なり行く故に、六道輪廻のたねとなる事を、佛の三毒と説き給ふ。一にけん  
 どん、二に怒りはらたつ事、三に愚痴の心、此三つをたち候へと、古へ今に至  
 るまで、しめす也。之をしらざれば、愛執の心なきが故に、人をねたみそしり  
 あれば、うらみごんして、たがひにくるしみの涙をなかし、袖をしぼる也。こ  
 れみな一心のわざ也。久しく遠き事を觀じ、物をわすれざるも一心なり、四  
 百四病をうけ、大苦をうくるも一心也。雪霜のさむき事をいとひ、大温のく  
 となすも心也。されば此の心一つを取留めかたければ、六道のごうたえず、  
 生に生をかさね、死に死をつぎ、うきしづむのみ也。此の心といふものは、い  
 かにとはんじ申すに、かげかたちもなきものなり。かたちなきゆゑにきえ

うせず。然れば、生もなく死もなし。こゝを佛とも、金剛の正體とも、べ玉ふ。  
 無相にして有なるが故に、古來よりゆきといまる事なし。住所更になし。色  
 相の生滅にあづかるによつて、無常と、き、又は犬死とのべて、これをあは  
 れみかなしみ、定離と申す也。かやうに申し入候は、御心かたちなき所を御  
 覽せられ候へと申すものにて候。なに物か色相をさつて、佛神とも鬼神と  
 もなり申すべく候や、淨土穢土の事をもつて、御分別あるべく候。御不審は  
 れ申し候は、まよひの雲、千里萬里の外にはらひ、一として御心といまる  
 事あるまじく候。爰を大正覺と申し候也。こゝにいたりて、色もなく、相もな  
 く、聲もなく、一念もなし。これによりて、心經にも、色即是空、空即是色と説き  
 玉ふ。一心の外にべちの物なし。本より經もなし。心は無始無終にして、住所  
 なし。爰を開いて、天地草木の畢竟してみる法はあさく候。見ざる法はふか  
 し。はやくまづ死のきづなをはなれて、大解脱の御身とならせたまふべし。

(後略)

## 第七章 一休の文學

一休は、つねに門人等が文字の間に頭出頭没することを戒めた。そして文字に拘泥して、その骨髓を没却するの愚を哀み、嘗てこれを嘲ける詩を作つて曰く、

人具畜生牛馬愚、詩文元地獄工夫、我慢邪慢情識苦、可嘆波旬親得途、  
傑作詩文金玉聲、言々句句諸人驚、閻王豈許雅頌妙、鐵棒應惶鬼眼睛、  
苦樂愛憎影與身、寒温喜怒境兼人、平生吟興黃泉路、地獄門前桃李花、  
と斯くの如く、文學者を以て、閻王の痛棒を免れないと罵り、詩文を以て、地獄の工夫であると嘲りながら、彼自身は果して地獄の工夫をなさざりしか、否一時は随分これがために浮身をやつしたところのある彼一休は、果して文學者としての天職を擔うて生れたものであらうか、はた彼は文學界に幾何の貢献をなしたであらうか。

吾人は已に足利時代を暗黒時代なりと論じたが、併し之を以て、直に歐洲中

世紀上半に於ける、ダークエージに擬するのは、決して穩當でない。夫の五山の僧徒によつて維持せられた當時の文學は、爛然異彩を放ち、常に明國と交通して文藝の扶植に努め、遂に隆盛なる徳川文學を産み出すの源泉となつた。然るに之を以て、彼のベネデクトの僧徒が、辛くも文運の餘命を香烟一縷の中に維持したのに比するのは、安當でないことは勿論である。蓋し鎌倉以後の文學の權は、漸く緇流の手に掌握せらるゝ勢で、長明、西行に續いて、兼好、頓阿の輩や、平家の作者といふやうなものが興起して來た。特に北條氏の末より、足利氏の時代は、天下の爭亂絶えず紛起した爲めに、文教は全く地を拂つて、世の塵雲を超越した、緇林の間に隠れて了つた。そして禪林は足利時代の勃興と共に、汪んになつて來て、隨つて文教は漸く鎌倉、京洛、五山の緇徒の手に、左右せらるゝ様になつたのである。

今當時の文學の状態を一瞥するに、北條顯時によりて建てられた金澤文庫は、應仁の亂に至るも、猶ほ釋奠の禮をも舉げ、圖書は貴賤を問はず、篤志の徒に貸與して居たが、此に出入したものは、全く五山の禪僧であつたと云ふこ



とである。又古書逸篇を藏せるを以て有名な足利學校は、上杉憲實の再興に依りて、東西將士の子弟は、翕然として此に集り學んだが、その師權を握つて居たものは、即ち當時の英僧義堂である。斯様に足利時代に於ける文教は、全く緇徒の手に歸して、時代の風潮を動すことが少小でなかつた。而してその文教の林は即ち五山である。されば足利文學は、則ち五山文學である。と云ふも、決して過稱であるまい。五山禪徒が足利氏の歸依によつて、天下政教の實權を握り、文教を注にする爲に、文物の輸入を謀りて明と交通すると頻繁となつた。是に於て宋元明の文化輸入の影響は、五山文學に異彩を放たしめ、虎關の韓文に於ける、中岩の楊子に於ける、雪村の莊子に於ける、一菴の柳文に於ける、或は絶海、靈彦の唐詩に於ける如き、雄健清新なる風潮を勃興する様になつた。而して超然世塵を脱したる叢林の別天地に於て、泉水靈にして掬すべく、風月清くして嘯くべきの處、五山文學は世の紛亂に關せずして蔚然として興つたのである。

足利文學の特徴とする處は、優柔平板に失したる紳縉的思想を脱して、幽玄

深遠なる佛教思想を注入し、文體には氣格あつて自ら品位あり、而かも瀟洒脱落の風か具はつて居る。是れ全く直截にして活機に富む禪徒の手によりて、外來の思想を吸収し咀嚼して、能く我が固有の思想に融和せしめたからである。彼の小島法師の作であると云ふ『太平記』の如きも、その文章は壯大雄偉、巧みに和漢及び佛典の語を混和し、しかも尙頗る流麗なるもので、優に足利文學を飾るに堪へ。特に夫の謠曲の如きは足利時代の誇りとするに足る所のものである。これは義滿が世阿彌、觀阿彌を寵してから、猿樂、田樂など、種々の舞曲を折衷して新曲を案し、遂に謠曲を興す様になつたのである。而して謠曲の文章は、多く一體、正徹の如き五山禪徒の手に成り、新古文學の粹を集めたものである。その思想の莊大崇高なること、その調の雲烟縹渺にして、文章の瑰麗絢爛であることは、足利文學の珍とする所である。

吾人は、足利文學に於て、更に忘却することの出来ない一特性があると思ふ。それは足利文學は、彼の平安朝文學が、金殿玉帳の間に、華奢なる手に依つて弄せられた、縉紳的臭味を脱して、雄健瑰麗なる氣風を帶ぶる様になつたの

は全く武族の娛樂に供せられたからであるといふこと、而かも之と共に酒脱滑稽にして、平易直截なる風潮が大に勃興して來て、文學をして社會的たらしめ、平民的たらしめた事である。彼の謠曲が猶ほ貴族的臭味を脱しないのに反して、狂言の如きは、當時の俗語を排列して、極めて滑稽的に、諷刺的に、訓戒を含めて作られたもので、自然に一般人民の視聽を引き、一種の娛樂として、教訓として、普及せられる様になつた。その影響の大なることは云ふまでもなく、謠曲が徳川時代に於て、淨瑠璃本の素因をなした如く、狂言は徳川文學の小説や脚本の素地となつたのである。

又之と共に、連歌が大に流行した。蓋し從來の和歌は、格調を定め、句法に拘泥し、徒に古風を尙んで、區々たる規矩を以て束縛した結果、歌道凌遲してまた振はなかつたのであるが、こゝに於て這箇弊害を打破して、一新機軸を出したる連歌が勃興して來て、獨り上流社會に弄ばれたばかりでなく、普く下流社會に移つて、即ち平民文學となつたのである。この連歌を興したものは、僧善阿救濟などで、後、二條良基や、宗祇、宗鑑などが出て來て、大に斯道の隆盛に

努めたので、遂に發句、俳諧の如き、全く平民的文學として、一般に普及せらるゝことゝなつたのである。この他に、御伽草紙の如き、滑稽諷刺的文學も、普く流行した。要之、足利文學の光明は、暗黒なる社會の中に在りて、たゞ世の塵雲を脱したる五山に於てのみ、閃めいて居たのであつたが、應仁の亂以後、足利氏の衰運につれて、普く社會に行き渡る様になつたので、徳川文學の萌芽は、已に這の裡に潜んで居たのである。

斯の時に當りて、足利文壇に起てる、一休は、はたして當時の文運の潮流に、幾何の貢獻をなしたであらうか。若し文學を以て、唯だ名句を列ね調子を整へるといふだけなりとせば、一休は、文學者として、左程の價値のある人ではあるまい。されど、文學の究竟の旨趣は、之を横にしては廣く社會に普及し、之を豎にしては永久に涉りて一般人心に感化を與ふるにありとすれば、一休が少くとも、文壇上に一地位を占むるのは寧ろ當然であらうと思ふ。成る程、彼は、我が文學史上、何の新機軸も出さなかつた、又何等の波瀾も捲き起さなかつた。彼が『狂雲集』二卷と謠曲、雜文の數篇とだけでは、我が文學界に於ては、一

砂粒程にも當らないであらう。是れ彼が牛馬の愚であると罵倒した所謂文學者たることを好まなかつた爲めであらう。而かも彼の名聲噴々として、我が社會に廣く且つ永遠に持て囃さるゝに従ひ、彼の零碎なる詩文も亦同時に世人に持て囃さるゝのである。是れ少しく彼を文學上より觀察するの必要がある所以である。

一休の詩稿を輯めた『狂雲集』は、彼が一生八十八年の間に、機に觸れ、時に感ずるに隨ひて賦したもので、或は教戒あり、偈頌あり、諷刺あり、諧謔あり、狂味あり、而してその題目に於ても、千種萬様であつて、人の想像し得ざる對象まで捉へて詠じて居る。然れども、彼が少年にして、慕喆攀公に作詩法を學んだ頃、『榮辱悲嘆目前事、君恩淺處草方深』の句及び、吟行客袖幾時情、開落百花天地清』の句を吟じて、時人をして、その才華に驚倒せしめ、遂に當時の詩人祥球書記をして、作家の風ありとまで、嘆賞せしめたに拘らず、彼が後年に於ける詩才は、余り煥發しなかつた様に思はれる。今彼が『狂雲集』を繙讀するに、概して詩人としての感情が缺乏して居る。凡て詩人の生命とする所は、純潔にして燃

ゆるが如き感情である。詩人はこの感情に依て、宇宙の靈火に接觸し、宇宙の秘密を捉へることが出来るので、又之に依つて一般人類の靈妙なる心琴に訴ふることも出来るのである。故に詩人にこの感情が缺乏して居たならば、是れ生命なきこと枯木と一般であつて、到底人の心に感動を與ふることが出来ないのである。詩人としての一休は、強ひて燃ゆるか如き情熱を滅殺して、恬淡瀟洒に安んじて居た爲めに、この第一要件に聊か缺漏のあるのは洵に己むを得ないのである。要するに、彼の詩は、多く理窟が勝つて居る。従つて又佶倔聱牙のものが少くない。併し、彼の詩に於て、よし水晶盤上珠玉を轉するが如き、華麗莊嚴を望み、又は雲を起し雨を呼ぶが如き雄壯高遠を索むることは出来ないとしても、落想颯然として群を抜き、而かも滑脱にして諷刺的なるものゝ多いのは、彼の詩の得色であらう。故に詩としての價は、彼に於て決して最上のものではないが、亦常人の模倣することの出来ない妙味を有するを覺ゆるのである。今二三を抄すれば、

元來有物不離身、揚手同揚伸足伸、全體分明無面目、起居動靜似侮人、

題人丸像

歌道根源即化身、若非菩薩佛歎神、至今明石浦朝霧、有鳥有舟無此人、  
と、その廳逸滑脱のところ、誦するに足るではないか。又自ら像を描き、且つ讚して曰く、

東海純一休子戲讚

流落生涯伴白鷗、風波颯々水悠悠、可憐世外風流客、漁房殘燈一點幽、

讚達磨大師半身

東土西天徒弄神、半身形像現全身、少林冷座成何事、香至王宮蕙帳茵、  
と、詩としては、或は上乘のものと云ふことは出来なくとも、天真流露、奇骨稜々たる處、寧ろ妙味があるのである。

和歌も亦彼の好んで詠じた所であるが、已に詩人としての長所を缺いて居る彼の歌は、また流麗典雅を缺き、幽玄縹緲たる神韻の乏しいのは、洵に止むを得ないところである。そしてその多くは、所謂道歌調であるから、純粹の正

歌と云ふ程のものは少ない。併し彼の歌には、彼の詩の如き、信屈蒼牙の趣きがなく、句調面白く語路輕快であつて、諷詠するに適して居る。彼と蝮川親當との道歌問答の如きは、最も輕妙で、殆ど奇想天外より落つるの趣きがある。門松は冥土のたひの一里塚馬かごもなくとまりやもなし (一休)  
年越は冥土のたひの問屋場か月日の飛脚あしをとめず (親當)  
又曰はく、

釋迦といふいたつらものか世にいて、おほくの人をまよはするかな

心とはいかなるものをいふやらんすみ繪にかきし松風の音

問へはいふとはねはいはぬ達磨どのこゝろのうちになにかあるへき  
と云へるが如き、奇抜なる落想、洒脱なる諧謔は、世人の好んで諷詠する所である。

更に彼の散文として傳ふるものを見るに、その數も甚だ尠いが、その尠い中にて、『骸骨』や『佛鬼軍』などは、頗る珍とすべきものである。『骸骨』は、禪宗の教理を骸骨に假託して説いたもので、簡潔にして而かもその句調の流麗なるこ

と寔に誦讀するに足るものがある。特に文中多くの歌を挟みて、深遠なる福音箴々として聲あるの感を起さしむるのである。彼は卷末に、「一切經八萬法をうちすて、此一巻にて御心得候べし、大安樂の人に御成候べし」と認めて、自己の抱負を洩らして曰く、

かきをくも夢のうちなるしるし哉さめてはさらにとふ人もなし  
と奥書して世に示して居る。今其一節を抄出してその妙致を窺はう。

いづくをさすともなく行く程に、知らぬ野寺にいたりかゝり、袖もしほるゝ  
ふしころも、日も夕暮になりぬれば、暫しかり寐の草枕結ふたよりもなき  
まゝに、あなたこなたを見ませは、みちよりはるかにひきいりて、山もと近  
く三味原と覺しくて、墓どもその數あまたある中に、ことの外に、哀れなる  
骸骨堂のうしろより出で、曰く、

世の中に秋風たちぬ花すゝきまねかはゆかん野へも山へも

いかにせん身をすみぞめの袖ならんむなしくすごすひとのこゝろを  
なんと流麗典雅ではないか又『佛鬼軍』は、佛と鬼との戦争を、いと面白く描い

たので、その筆致の飄逸なる所一種の興味沸くが如き思ひがある。

すでに極樂に、我もくくと物の具ぞろへして、兵具くらべはじまりけり、出  
立玉へる九品蓮臺の大名高家たれくぞ、等覺山の觀音左衛門、蓮花野の  
勢至太郎、横笛の藥王兵衛、笙笛の藥上武者、懺悔の里の普賢殿、琴上手の自  
在五郎、三賢寺の獅子吼十郎、同じき陀羅尼三郎、能滿福智の虚空藏冠者、觀  
喜地の徳藏庄司、同弟に法藏別當、又金剛太夫、光明太郎、珠寶平内、指箭の山  
海惠太刀の華嚴王、大箭の日光王、小箭の日照王、はやり男の定自在、一番か  
くる三味王、ひたやふりの大自在王、一人當千の白象王、打物の大威徳、はや  
ばしりの無邊身、かくの如くの廿五の菩薩、一人して九億萬恒河沙の郎黨  
を打供して、乗物は好みくとなり、紫雲にはする人もあり、蓮臺に鞭打つ人  
もあり、或は馬、或は龍、或は獅子、或は大象に乗るものあり。此の外に、生死の  
大海に弘誓の船をうかべて、十萬餘艘までぞ指出さる。(中畧)大將軍の阿彌  
陀佛は、青黄赤白の錦の鎧、ひたゝれる、相好莊嚴の小手をさし、大慈大悲の  
御冑に、三身即一のかなものうちて、八萬四千の白星の冑に、四拾八願さし

たるやなぐひに、僧祇劫経たる功德の重藤のふる弓に、妙觀察智の幡さして、青蓮のまなしりを、一度めぐらせは、光明遍照十方世界とぞかやきける。かゝる大將をまもつて、憶病なる郎黨一人もなし。月の十五日を吉日に定めて、地藏菩薩しるへして、毎日晨朝入諸定の明ぼのにぞよせかけたる。その縦横に煥發せる、彼が才華の一般を知ることが出来るのである。是等の二書、共に彼が自書自筆を以て、世に傳はつてあるとの事である。

吾人は、既に彼の詩歌散文等に就いて一瞥したが、是等を以て、直に彼が文學上の眞價を評定することは、出来ない。是れ以外に、更に見るべきものは、即ち謠曲の製作である。先にも云つた通り、謠曲は、足利文學の精華であつて、夫の奈良朝文學に『萬葉集』あり、平安朝文學に『源氏物語』ある如く、近古文學の代表者は、實に謠曲であると言つてもよい。今一休の作『江口』『山姥』の兩篇に就いて見るに、『江口』は、西行法師が『撰集抄』を基として、江口の君の幽靈が、西行法師と、歌よみかはしたる昔語をする事を、骨髓として作つたのである。又同書に、性空上人が、普賢菩薩を拜みたしと祈念して居ると、天童が來て、室の

遊女を拜めと告げた。よつて遊女の家に行つて、目をふさぎ、心を靜めて見るに、生身の普賢、白象に座して居給へりと云ふ物語を交へて作つたのである。今その片影を窺はんに、江口の君の幽靈、幻の如く現はれて、來て綿々たる感懷を洩らして曰く、

河船をとめて逢瀬の波枕、浮世の夢を見習はしの、驚かぬ身のはかなさよ、  
佐用姫が松浦瀉、かたしく神の涙の、唐土舟の名残なり。また宇治の橋姫も、  
訪はんともせぬ人を待つも、身の上とあはれなり。よしや芳野の花も雪も  
雲も波も、あはれ世にあらはや。

更に、人生の迷夢なるを説破して曰く、

紅花の春の朝、紅錦繡の山粧ひをなすと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の  
秋の夕、黄纈纈の林、色を含むといへとも、朝の霜にうつろふ、松風蘿月に言  
葉をかはす賓客も去つて來ることなし、翠帳紅閨に、枕をならべし妹脊も、  
いつの間にか隔つらん、凡そ心なき草木情ある人倫、いづれあはれを遁る  
へき。かくは思ひ知りなから、ある時は色に染み、貪着の思ひ淺からず、又あ

る時は聲を聞き、愛執の心いと深き、心に思ひ口にいふ、妄舌の縁となるものを、實にや皆人は六塵の境に迷ひ、六根の罪を作ること、見ること聞くことに迷ふ心なるべし。

その靈妙の筆、その崇高の想、寧ろ尊いではないか。

『山姥』は、都の女か、山中に宿して、山姥の山廻りする様を見る事を、述作したもので、前後共に物凄き景色を以て装ひ、意匠經營、實に慘憺たるものがあるのである。『拾葉抄』に此謠の旨趣に就いて、

此の謠の大意につき二義あり、一には、旅行く人の行き暮れて、一夜の宿を借り、山姥に逢へると云ふ事、昔より童部などの物語に、いひもて來れるを、此の謠に作れるなるべし。二には、山姥とは、輪廻無窮の體を名つけて、山姥と云ふ。山とは世界を云ふ。姥とは凡夫を云ふ。一切衆生生死に沈淪するを、よしあし引の山姥か、山めぐりするとは云ふなり。よしあしとは、善惡の二つを云ふ。欲界に生まるゝ衆生は、智あるも愚なるも、輪廻のやむことなし。依て善惡ともに山姥と見るなり。

と、言つてある。兎に角、此一篇は、佛教の深遠なる教理を布演したもので、三千餘言の中には、『源氏』『伊勢』『平家』等の諸物語、及び、『萬葉』『古今』等の歌集、『朗詠』『白氏文集』『東坡詩集』などの諸書を引用し、更に佛典の教理を單んだもので、實に千古の佳作と云ふべきものである。今その二三の片句を抽いて見やうか。始めに旅行の景を叙して曰く、

都をいで、さゝ波や、志賀の浦船漕かれ行く、末は有乳の山越えて、袖に露  
ちる玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこそ遙かなれ、梢波立つ汐  
越の安宅の松の夕煙、消えぬ憂き身の罪を切る、彌陀の劍の砥並山、雲路う  
なかつ三越路の國の末なる里問へば、いと、都は遠さかる、境川にも着き  
にけり。

更に夕景の寂靜を述べ、四邊の深山幽谷の物凄き景を描きて曰く、

あら物すごの深谷やな、寒林に骨をうつ靈鬼、泣くく、前生の業を恨む、深  
野に花を供する天人、かへすくも幾世の善をよろこぶ、いや善惡不二、何  
をか恨み何をか喜ばんや、萬箇目前の境界、懸河渺々として巖峨々たり、山

又山、いづれの工が青巖の形を削りなせる。水又水誰か家にか碧潭の色を染め出だせる。

それより、山姥が山廻りの状景を描きて、凄惋の氣、人を襲うて悚然たらしむるものがある。

一洞空しき谷の聲梢に響く山彦の無聲音を聞く、たよりとなり、聲にひやかぬ谷もがなと、望みしもげにかくやあらん。とに我が住む山家の氣色、山高うして海近く、谷深うして水遠し、前には海水浪々として、月真如の光をかゝげ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る。刑鞭蒲朽ちて螢むなく去る、諫鼓苔深うして鳥驚かすともいひつべし。遠近のたつきも知らぬ山中に、おぼつかなくも呼子鳥の、聲すこき折々に、伐木丁々として、山さらに幽なり。法性峰そびえては、上求菩提をあらはし、無明谷深きよそほひは、下化衆生を表して、金輪際に及べり。そもく山姥は、生所も知らず宿もなし、たゞ雲水を便りにて至らぬ山の奥もなし。然らば人間にあらずとて、隔つる雲の身をかへ、假りに自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前

に來れども、邪正一如と見るときは、色即是空そのまゝに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば山姥もあり、柳は綠花は紅のいろく、扱人間に遊ぶことあるときは山賊の樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷に肩を借し、月もろともに山を出て、里までおくるをりもあり、又ある時は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯絲くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、賤の目に見えぬ、鬼とや人の云ふらむ。世を空蟬のから衣、拂はぬ袖に置く霜は夜寒の月に埋もれ、打ちすさむ人の絶間にも、千聲萬聲の砧に聲のしでうつは、たゞ山姥がわざなれや、都に歸りて世話にせさせ給へと思ふは猶ほも妄執か、唯打ち棄てよ何事も、よしあし曳の山姥が、山廻りするぞ苦しき。

幽遠の想と流麗の筆とは、紙上に躍如たるの感があるではないか、而かも、從來の纖弱なる厭世の觀念を拂つて、雄嚴崇高の氣、鬱勃として、一異彩を千古に垂るゝものと云つて可いのである。

一休は又、書を當代の名手、曾我蛇足に學んで、大に造詣したことは、『扶桑書人



傳』などに記してある。この蛇足の父は、明の畫人唐秀文と云つて、相國寺の周文と對峙し、夙に宋法を則りて、一家を成した人である。蛇足は、また山水花鳥人物に巧で、筆致は疎であつたけれども、而かも氣韻があるので有名であつた。一休は、此流を汲んで、大に見るべきものがあつたと云ふ事である。斯様に論じて見ると、一休が文壇に於ける眞價は、彼の詩歌文章よりも、寧ろ謠曲に於て認められるのである。然れども、概して言はんには、彼は少くとも鎌倉以前に於ける、我が文學の病弊である所の、纖弱な厭世的思潮を一變して、茲に莊嚴剛健なる氣風を鼓吹すると共に、他方に於ては、從來の文學が、唯金殿玉帳の間に弄せられ、縉紳的氣風を帯びて居たのを打破して、輕快滑脫なる平民的社會的文學を勃興せしむるに、與つて力があつたことは、文學史上決して忘却することの出来ない効蹟である。

示會裡徒 「狂雲集」

樂中有苦一休門、箇々蛙爭井底聲、晝夜在心元字脚、是非人我一生噴、  
公案參來明歷々、胸襟動破暗昏々、怨憎到死難忘却、道伴忠言逆耳根、  
徒學得祖師言句、識情刀山牙劍樹、看々類々學他非、啣血噴入其口汚、

## 第八章 一休の理想

人は境遇の動物である。人は素より境遇を造るけれども、亦恒に境遇によりて造りかへらるゝ者である。今試みに凍氷を頭上に置くときは、冷骨髓に徹するを覚え、また試みに熱火を掌上に置かんか、總身を燬くの思あらしめるであらう。凡そ耳目口鼻の感覺する所、恒に外物の爲めに動かされ、外界の爲めに支配せらるゝを免かれないのである。豈唯是れのみならんや、社會の風潮、當時の時勢等より受くる直接間接の影響は、實に莫大なものである。外界は、恰かも一大熔爐の如く、人は之に依りて鑄治せられ始めて人たることが出来るのである。然れども、人には、この熔爐にも鑄治することの出来ない所の「本然の我」とでも云ふべきものがあつて、能く外界の樊籠に抵抗し、之を衝き破らうとする。その彈撥力の強大なればなる程、その人物の偉大なることを證明するので、彼の驚天動地の偉人傑士と稱するものも、或る一面より見るときは、慥に時勢の産兒であるけれども、亦他面より之を觀察するときには、

却つて時勢を左右する素戔師とも云ふべきであることは、東西の歴史上に於て、燎なる所である。而して夫の理想と云ふものは、即ちこの本然の我の指示する所であつて、人の一生は、この理想と現實との衝突の歴史であると云ふも誣言でない。故にその人の理想を看破しやういふには、先づその現實界を瞥見しなければならぬのである。

一休が一生に就いては、既に述べた如く、その境遇は、寧ろ厭世的方向に進まざるを得ない事情であつた様に思はれる。見よ、やんごとなき際の皇子として、一生の光榮を擔ふべき運命を有する彼は、洛西の賤が伏屋に誕生し、父君と呼ぶべき人在ませとも、その慈愛の接吻をうくることも出来ず、慰め樂しむべき一人の兄弟だもなく、寂しき家に母と共に暮せるたよりなき生活は、人生の最も快活なるべき彼の幼年時代を、一種陰鬱の雲を以て蔽はしめたのである。而して彼れが六歳の幼少にして、己にあぢきなき佛門に入るの已むを得なかつた所以は、全くこの孤寂の苦痛を通る、唯一の道であつたからであらう。蓋し當時の宗教界は、現實の社會に慊焉たる轉軻不遇の傑才か、そ

の鬱悶不平をやるには、恰好の隱家であつたかも知れないが、さりとして、また世の風波をも感知しない無邪氣の幼兒をして、この陰鬱の隱家に入れざるを得なかつたといふのは、まづ彼が母氏の苦衷に對して、同情の念に堪へざると共に、彼一休の悲惨なる境遇に對して、萬斗の紅涙を濺がすには居られないのである。斯くの如く、彼が幼年時代に於ける悲惨の境遇は、他の意志によりて、厭世的隱家に入らしむるを待たずして、自ら之に闖入せざるを得ざる自然の路筋であつたと云ふも、あながち揣摩憶測であるまい。

既に緇門に入つた彼が壯年時代も、また決して樂しき順境であるとは云ふことは出来ない。否、更に一層苦辛慘憺たる時代であつたのである。彼が笈を負うて當時の先輩に師事するや、螢雪の苦學を重ねて已まず、或は漁舟に投じ、沈吟苦行して曉の到るを忘れ、或は數日食を絶ちて石山寺に默禱せるが如き、その苦辛を忍んで研鑽した事實は云ふまでもない。當時彼は、その形容枯槁し、蓬髮長く亂れ、顔色蒼ざめて、殆ど生きたる人とも思はれない状態であつたとの事である。しかも尙、日夜孜孜として切磋し琢磨し、亦人の來訪を避

けんが爲めに、常に門戸を鎖し、爲めに佛法に戀せりとの逸話をさへ傳ふるに至つた。彼の艱難は是のみに止まらない、更に貧困なる運命の爲めに翻弄せられたのである。世の生計といふ係累を脱したる緇林に入りたる彼れが、猶ほ貧の桎梏に窮迫せらるゝとは、事頗る奇異の感がないではない、しかし、人はパンなくして一日も活くることが出来ない以上は、パン問題に一向無頓着なる彼等も、屢々この慘酷なる桎梏の見舞を受けざるを得なかつたのである。彼が少壯西金寺の謙翁に師事したときの如き、常に貧骨髄に徹すと云ふ有様で、謙翁が示寂した時の如きも、師弟共に赤貧の絶頂に達して、葬儀を行ふの費用さへなく、空しく心の中にて葬つたと云ふ事實に徴しても、如何に彼が境遇の貧窮せるかを想像するに足るではないか。彼が貧困は唯之に止まらなかつた、或は數日間食を絶つて村民より乞丐と見做され、胡餅數片を得て漸く飢を凌いだことや、或は漁舟に投じ、遂を借りて辛くも寒を凌ぎ、食を給せられて纔に飢を忍ぶことが出来た事や、或は食費全く缺乏して、態々京都に歸り、香包などを製して之を賣り、漸く學費に充てたことなど、是

等の事實を以てこれを見るも、如何に彼が貧苦の爲めに經營慘憺たりしかいわかるのである。要するに彼の修養時代は、實に血と涙との歴史であると言つてもよい。

翻つて當時の時勢を顧みるに、先きに述べたように、世は室町旺盛の時代で、上下浮華豪華に耽つて、京畿の地は、淫蕩浮薄の巷と化し、特に五山の僧徒は、權威の傘を上戴着いて、虚榮外儀に惑溺し、所謂、恰かも百官の紫宸に朝するに似たる「の徒、朝野に横行して、卑猥奸曲を敢てするを視て、敵愾の氣象天を衝くが如き」彼一休は、何とて黙々たることが出来やう。彼は十五の年少にして、二篇の偈を師慕詰に呈し、痛憤の氣概を洩らしたるが如き、或は飛ぶ鳥も落す程の威權ある時の將軍義持を睥睨して、意氣軒昂たりしが如き、或は滔々たる賈縉徒を木劍に譬へて罵倒したるが如き、彼が滿腔の憂憤煩悶、抑へんとして抑へることが出来ず、赤手直に天下の頽勢を翻さんと欲して、飢寒交々襲ひ來り、亦人生の事意の如くならざるに失望せざるを得なかつたのである。

斯様に悲惨の境遇に生れ、幼時より世の辛酸に遇ひ、螢雪の苦學、洗ふが如き貧困に泣ける彼一休は、再び社會の風潮に捲き込まれて、どうして無限の感慨に打たれずにとるゝが出来やう。彼はこの現實の桎梏と、自己の理想とが衝突するを見て、到底宇宙人生の問題に觸着せず居られなかつたのである。吾人は茲に、敢て哲學上の深奥なる問題を論せんとするのではないが、兎に角、軼不遇の運命に逢着せる一休は、自然の徑路として、寧ろ厭世觀に駆け入るべき境遇にあつたと思ふのである。すべて自己の理想と、現實の社會とが矛盾し衝突する、そこに不安を感じ不平が湧くのである。夫の世の風潮に漂はされて、波のまにまに浮沈する、子子の如き凡人は、暫く措き、苟くも世に對する的確なる理想を抱懐するもの、腐敗せる社會の現狀に對して到底平穩を感じ満足を得るとは出来ない。その理想が高ければ高いだけ、その不安不平も亦従つて大きいのである。故に人はこの煩悶に依つて活き、煩悶に依りて進歩幸福を實現する事が出来るので、古今偉人傑士と稱するものも、皆この煩悶の團塊に過ぎなかつたのである。然れども、煩悶は時としては遂

に人生の破壊滅盡を招致するに至ることもあるので、是れ實に人生の一大危機である。あゝこの一大危機、これに對して、能くその謎を解決するものは、即ち永遠の勝利を得、否ざるものは、即ち自滅するより外はないのである。彼の英傑なるものも、必ずその一生に於て、一度はこの人生の危機に、遭遇しないものはないのであつて、一休の所謂

我のみか釋迦も達摩もあらかんもこの君ゆるゑに身をやつしけり

とは、實にその機微を示して居る。この君とは何ぞや、曰く人生問題である、心靈問題である。適切にこれを言へば、即ち煩悶のことである。夫れ人は何處より來り、何處にか去る、人生五十、之を無限の光陰に比して幾何ぞ、五尺の身軀之を無極の宇宙に對して如何、昔江上の一客、歌うて曰く、匏樽を擧げて相屬し、蜉蝣を天地に寄す、渺たる滄海の一粟、吾が生の須臾なるを哀しみ、長江の究り無きを羨む」と。又唐の古詩人歌うて曰く、天地は萬物の逆旅、光陰は百代の過客、而して浮世は夢の如し、樂をなす夫れ幾何ぞ」と。恐らくは世人誰としてか一たびこの感に打たれないといふ者があらう。況して、有史以來、未曾有

の浮華驕奢を極めたる室町盛世に生れた一休は、不幸なる境遇に遭逢して、一層痛切にこの問題に觸着したので、彼は之が爲めに、煩悶懊惱の極、一身を水底に投せんと決心し、彼は之を解決せんが爲めに、殆んど前後十年の星霜、寢食を忘れて苦心修行したのである。

思ふに浮雲の如き人生の無常觀に到着したる彼がためには、その前途唯二つの行路があるのみである。二路とは何ぞや、曰く厭世觀、曰く樂天觀、而して彼は、果してどちらに向つて進んだであらうか。古歌に曰はく、「引きよせてむすべば草の菴にて、解くればもとの野原なりけり」と、見よ行く水の流は絶えるところはないが、而かも元の水ではない、泡沫夢幻の現世を觀ると、誰か生死長夜の夢を悟らないものがあらう。紅花の春の朝、紅錦繡の山粧ひをなすと見えしも、夕の風に誘はれ、紅葉の秋の夕、黄纈纈の林色を含むと雖も、朝にうつろふ、松風蘿月に言葉をかはす賓客も、去つて來ることなし、翠帳紅閨に枕をならべし妹脊も、いつの間にかは隔つらん、凡そ心なき草木、情ある人倫、いづれあはれを遁るべき、人生無常の觀念は、屢々彼の胸中を撃ちて、遂に「露とき

えまぼろしとおほふ稻妻の、かげの如くに身は思ふべし」と悟らしめた。然れども、現實の社會に臨む毎に、猶ほ愛着の念已むことはなかつた。彼その意を漏して曰く、

かくは思ひ知りながら、ある時は色に染み、貪着の思ひ淺からず、又ある時は、聲を聞き、愛執の心いと深き、心に思ひ口にいふ、妄舌の縁となるものを、と迷執の念は常に彼の胸中に叢り起り、絶對の理想を埋没せんとしたのである。彼即ち語をつけて曰く、

實にや、皆人は六塵の境に迷ひ、六根の罪を作ること、見ること、聞くことに迷ふ心なるべし。

と、斯くて世の人事を浮雲の如く遠觀したる彼は、驟然起ちて塵世を棄て、無我の自然境に入り、光風霽月を友とせしこと幾回ぞ。彼が黃塵萬丈の都を去つて、深山幽かに谿水清らかなる、讓羽山に遁れたのも之れが爲めである。又彼が大徳寺の精舎より、罪僧を出せしを見て、再び讓羽山中に隠れ、自殺せんとせしことあるも、亦之に由るのである。斯くの如く、苟くも人生の無常を

觀じ、現世の浮雲の如くなるを悟りたる者は、濛々たる黃塵の巷を脱して、光風霽月の自然境に通れんとするは、是れ人の自然の情である。自然は無我無心であつて、恰も慈母の赤子に於けるが如く、塵寰を脱出したる人を包容するに吝なる者ではない。而して人は無我なる、天然の懐に入りて、天地の靈氣を呼吸し、崇高なる絶對に歸一せんとするのである。夫の「鳴立つ澤の秋の夕暮」を詠じた西行も、自然の赤子であつた。夫の「手枕の野べの草葉の霜枯に」と歌うた兼好も、夫の「方丈記」を著して厭世の福音を傳へた鴨長明も、亦その自然の愛兒であつたのである。彼等は共に興亡の陣跡、世態の轉變に驚き、現實の社會は清高の理想と衝突して、遂に無常觀に驅られ、厭世の洗禮を受くる様になつたのである。一休も亦彼等と畧同一の徑路を辿りかけたが、さすがに彼はまだ深く迷ひ込むには至らなかつた。勿論彼とても、この世を厭ふべきものとも思つたであらうし、又自己は罪惡なものであるとも觀じたであらう。しかし、まだ神や佛を我以外に立て、天や極樂をこの世以外に造らうなど、そんなたわけを盡す程の意氣地なしではなかつた。縱令この世が悪か

らうとも、それを善くして行くのが我々の務である。縱令我等に罪があらうとも、それは我等が心の研きやうが足りないからである。たゞ人間の世の事は、百事千事悉く人間に依つて決せらるべき者で、又これを解決して行くのが人間の本分である。要は、我を進歩させ、我を發達させ、我を大きくし、我を廣くするにある。佛といふも極樂といふも、實はこの外にないのである。といふやうな考が、油然として彼の心の奥底から湧いて來るやうになつて來て、始めて彼は、路を轉して、樂天の境に歩を進めることゝなつたのである。蓋し彼が少壯の時代は、快活といふよりも、寧ろ陰鬱の方であつた。和樂雍々たるよりも、寧ろ憂心忡々たる方であつた。滑稽癡輕といふよりも、寧ろ沈着眞面目の方であつた。而かも後年、全然正反對の方向に奔つたのは、寔に奇異の感に堪へないようではあるが、しかし、彼をして、茲に至らしめたのは、彼の固有の性情に、幾分か樂天的素質があつたからでもあらうが、而かも吾人は、禪の教理が與つて力があつたのであらうと考へるのである。我が國佛陀の法門は、幾多に派れて居るけれども、禪の如く樂天的傾向を有

する宗旨はあるまい。禪は無我を主とする宗教で「本來無一物、何處惹塵埃、現世がどうの來世がどうのと、そんなとに醒醒する様な宗旨ではない、従つて陰鬱の氣を轉じて快活恬淡となすといふやうなことになるのである。一休即ちその境を寫して、

おもしろや、實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねとも、隨縁眞如の波の立たぬ日もなし。波の立居も何故ぞ、假なる宿に心とむる故、心とめすは浮世もあらし、人をも慕はじ、待つ暮もなく、別れ路も嵐吹く、花よ紅葉よ、月雪の、古言もあらしよしなや、思へば假りの宿に、心とむなと、人をだに諫めし我なり。

と。是れ現世や來世に醒醒しない禪も、大悟徹底の曉は、森羅萬象悉く、隨縁眞如の波立ちて、和樂雍々たる境を實現するのであつて、娑婆即寂光土とは、即ち是を云ふのである。一休は這般の禪の眞理を悟了し、彼の心裡は、恰も明鏡の拭はれた様に、忽焉として喜戚を其間に留めない。大道坦々として宇宙の間に同化せられ、而してその一舉一動は、悉く知足安分平穩満足の影に外な

らないものはない。

是の如く、曩きに厭世的傾向を抱いて居た一休が、一朝翻然として樂天的境界に轉じ來つたとは言ふ者の、しかも翻つて考へて見れば、厭世觀と謂ひ樂天觀と謂ひ、實は共に半面の眞理であつて、前者の眼中には人生の暗黒なる半面が映じ、後者の眼中にはその光明なる半面が映ずるところから、茲に相對的名稱を生ずる様になつたので、その終極の理想に至つては、即ち歸一するのである。瀛西の古聖も謂つた如く、哀む者は福なり、其人は安慰を得べければなりで、つまり哀む者の福は、たゞ哀むが爲めでなく、哀むに依て遂に安慰が得られるからである。故に厭世が厭世に止まらず、この厭ふべき世に在つて、努力し活動して、着々その厭ふべきところを除いて、樂しきものを植ゑつけて行く、そこが即ち樂天である。佛も迷へば凡夫なり、凡夫も悟れば佛なり、要は悟ると然らざるとに在るのである。一休即ち曰く、

佛は、厭離穢土欣求淨土と教へ玉ふなり。穢土とは、けがらはしき土と書けり、迷ひの衆生の肉身體なり、之を厭ひ離れよとの義なり。淨土とは、いさぎ

よき土と書けり、悟りたる人の肉身體なり、之を欣ひ求めよと教へ玉へり、云云。

と然り、五尺の臭骸を抱きて、もとより生のはじめをしらざれば、死の終りをわきまへず、やみ／＼ぼう／＼として苦の海にしづむもの、誰か一体の所謂「かりの世にあだなる露の身をもちて、千とせをいはふ人のはかなさ」を感せず、に居られやうや、人一たび茲に想到するときは、豁然として「すみのぼる心の月のかげはれて、くまなきものは本の境界」に接することが出来るのである。彼はこの境界を寫して、

長き夜の闇の晴れたる心地して、雨夜の空も晴れ、真如の月現はれ出て、胸中の爽なること、兩鏡の相對するが如く、又此の五尺の境界も、十方の虚空に齊しき様に覺え候。

是れ即ち見性成佛といへる義であつて、森羅萬象は、隨緣真如の波動である。而して宇宙間和樂雍々として、萬物悉く清淨の光明を放たないものはない。故に彼の眼には、常人が不淨不吉として嫌忌する「されこうべ」も、清淨潔白な

る芽出度き物と見えたのである。人の汚穢視する糞尿も、之を啼つて梵天に捧げたのである。此くの如きは、事頗る奇矯にして、沒常識の感がないではないが、彼が立脚地よりこれを觀れば、寧ろ尋常茶飯事に過ぎないのである。彼即ちその樂天の眞懷を吐いて曰はく

あら樂や虚空を家と住なして心にかゝる造作もなし

是に於てか彼が胸中は、光輝ある森羅萬象を抱容して、一點の塵影を認めない。煌々たる真如の月は、心中に澄み渡りて、不平なく、憂悶なく、悲哀なく、忿怒なく、嫉惡なく、彼が一舉手一投足も、彼が滑稽諧謔も、悉くその眞情より流露したものでないものはないのである。彼が後半生は、實に樂天觀の使命者であつた。布教もこれに於てし、道交もこれに於てした。この故に、翁媪は彼を見ること、猶ほ赤子の慈親に於けるが如く、孩提の兒童も、彼の袖を引き裾に纏つて親しんだのを見ても、彼が皎々落々たる眞懷を知ることが出来るのである。

要之、彼は半ば悟り損ねた、禪僧の如く、枯木冷灰化しなかつた。彼は人生を厭



うて隠遁せる厭世者の如く、獨善主義に陥らなかつた。而して彼は、佛教の汎神觀に基いて、最も樂天主義を宣揚し、現世を重視し、迷信を打破し、力を平民的教化に致したる點に於て、我が佛教史上、優に一頭地をぬきんでたる、一大偉人であつたとはいはなければならぬ。

參玄僧名利 (狂靈集)

- 迷道衆生劫外愚 人々涙不識窮途 諛官只願佳名發 眞菩提心一點無
- 戒參玄僧智愚 未聞少智菩提扶 一千公案繫驢轡 學者江湖飯袋徒
- 大智元來迷道愚 示榮街惡知識 參禪婆子楊花鏡 入室美人蘭蕙苗 近代箇邪師過謬 馬牛漢不是人倫
- 捧心自稱法王身 世上弄嘲徒怒嘆 一箇胡蘇沒巴尾 出頭大用現前人
- 破邪禪 墨墨四十九年說 看々毘耶與摩羯 邪師臆說拈話頭 關王前豈免拔舌
- 閑工夫辱榮街徒 金襴長老一生望 集衆參禪又上堂 樓子慈明何作略 風流可愛美人粧
- 示會程俗徒警策 前軍覆所後車驚 警策忘時禍必生 牛醉半醒夜遊客 烏啼月落月三更
- 詩歌吟詠失全功 天上人間軍陣中 意舞醉歌休度日 飛揚跋扈爲君雄

第九章 一休の逸話

一休の傳記として、今に傳へられてあるものは頗る多いが、大概は後人の作爲にかゝり、妄誕不稽にして、信するに足るものは甚だ尠ない。しかし、その滑稽能く人の腹を抱へしむるもの、善謔能く他の氣を奪ふもの、一讀痛快を覺えしむるばかりでなく、その間また、多少の教訓の味ふべきものがないでもない。今強ひて、その最も趣味あり、且つ史實として信するに足るべきもの數條を撰び、以て彼が眞面目を窺ふの一助ともし、吾人が記載の遺漏を補ふの料ともしよう。

一、一休の機智

一休は幼稚の頃から、利根卓絶して居たが、一日參學の爲めにとて、かね／＼親近の門徒、皮袴を着して師匠の許へ訪れ來たのを見、彼はすぐ門側に、  
一、此寺の内へかはのたぐゐかたくきんせいなり、若皮の物入るときは、其身にかならずばちあたるべし。

と書いた立札を出したかの門徒のもの、之を見て、内に入り、さて「皮のたぐひ禁制とならば、此寺の大鼓は、何とし給ふぞ」と詰問した。一休即ち「だから晝夜三度づゝばちがあたるのであります、あなたも皮袴をぬがないとばちがあたりまするぞ」と答へたと云ふことである。其後、師匠一休を伴うて、彼の門徒の處へ招かれて行つたが、その家の門前にある橋の處に、高札を立てゝあつた、曰はく、

此はしをわたること、かたくきんせいなり。

と師匠大に當惑げな顔つきして、これを一休に謀る。一休即ち「その橋のはしを渡らないで、中央の處を渡つて参りましやう」とて、反つてその主人を驚かしめた。斯くして一休が猶ほ年も幼かりしたため、俗衣のまゝであつたを見て、主人乃ち、凡そ沙門の形といふは、忍辱二躰の衣を着、罪障懺悔の袈裟を掛けてこそ、眞の僧とは申すべきに、如何に小僧なりとて、俗衣のまゝとは心得ず」と詰めると、一休一首の歌を詠じて答へた。

着て來たぞ本來空のくろ衣袖ながらで人こそ知らね

その主人も師匠も、手を拍ちて、その頓智の優れたのを感賞したといふことである。暫くして御齋を出したが、一休には、わざと魚類の膳を進めると、一休平氣で之れを食べて了つた。すると主人は、「法衣を着た沙門が肴を食ふといふのは、戒法を破るといふものである」と責めた。ところが一休即ち「口は鎌倉街道だから、貴いものも行けば、いやしいものも通る」と答へた。然らばこれも通るか」とて刀を抜いてつきつける。一休直ちに「敵か味方か」「敵だ」「然らば通すことは出来ない」「いや味方だ」。そこで一休えへんく」とせき拂ひして、くせものが通るといふので、只今俄に關を閉めた」と答へて、けろりとして居る。一座その頓智の卓絶せるに驚かないものはなかつたと云ふ。

## 二、一休別號の由來

吾人は曩きに一休といふ別號は、彼が師華叟の附與したものであると述べたが、坊間之に就いて異説が傳はつて居る。その起因面白き節があるから、左に掲げやう。

或人一休に、その號の由來を尋ねたところが、一休即ち一首の歌を詠んだ。

有漏路より無漏路へ返る一休雨降らはふれ風吹かばふけ

と。その人即ち有漏路無漏路の意義をたゞすと、一休拂子を以て、その人の顔をソロ／＼と撫で、その人の驚くを見すまして、徐ろに言ふには「その何とも心得ぬ所が無漏路で、又そのハツと驚いた所が有漏路である」と、某又「その雨降らばふれ風吹かばふけとはどういふわけでありますか」と問ふと、一休又「唯僅の道のことだから、雨も風も厭ふほどのことはない、別に深い意義があるのではない」と答へた。是に於て某大に悟る所あり、直に一首の歌を詠んだ。うろちむろち一休みぞと聞くときは十萬億土すぐさきとしる

と。一休即ち善哉々と諾いたと云ふ、この一話は、直ちに一休の號の起因とは、信じ難いが、兎に角、人を化導するに巧妙にして、且つ親切であつたことは、之でも知れるのである。

### 三、佛法に戀慕す

一休が、近江堅田の華叟門下にありて、心靈上の煩悶に驅られ、苦心慘愴せしこと、吾人の已に述べたところであるが、彼が當時、一大事縁の工夫の爲に、苦

心經營して、頭髮蓬々、顔色蒼白、身體瘦せ衰へ、見るからが大病人のごとくであつたものだから、彼の知人など痛く憂へ、彼に醫藥をすゝめたけれども、一休は却つて之を五月蠅く思ひ、門を閉ぢて面會さへしなかつた。然るに餘り衰弱が甚しいので、或時二三の朋輩が集まつて、一休が兎角儻々勝ちなのを以て、血氣盛りの若者の事なれば、或は戀の病などではあるまいかというて、遂に一休に面會し、仄に其意を窺つた。ところが果して一休は、誠に耻しいことだがお察しの通りだと打ち明かした。彼の知人等、案に違はずとて、その戀人は誰であるか、人によつては、随分周旋の勞をとりもしやうと言ふと、一休「面の當りその人の名を言ふのは、如何にもきまりが悪いから、筆を以て書かというて、さら／＼と書いて渡した。そこで知人等、暇をなし立ち出で、かの書を開いて見ると、左の二首の歌が書いてあつた。曰はく、

本來の面目坊がたちすがたひと目見しより戀とこそなれ

我のみか釋迦も達摩もあらかんもこの君ゆるゑに身をやつしけり

と。彼等は思ひがけなき戀事を知り、一休が求道の誠心に感嘆して、世に畫に

寫し木に刻んだ佛は澤山あるが、生きた佛は一休ばかりであるとして、大に歸仰する様になつたと云ふ、この一事、彼が眞面目を、最も明に寫して居るではないか。

#### 四、各宗祖師の像贊

一休があるとき黒谷に詣でたところが、寺中の人々、一休の高徳隠れなきを慕ひ、秘藏の善導法然二師の畫像を出して、贊を頼んだ。すると一休直に諾ひて、先づ善導大師に贊して曰く、

末法出現名善導、則是彌陀化身形 濁世末代導惡人、一切衆生易往生、法然上人には、

傳聞法然活如來、安座蓮華上品臺、教智者如尼入道、一枚起請最奇哉、と即時に書いてやつたので、一門の僧等、大にその適切なる贊文を得たのを喜んだ。然るに當時淨土宗と日蓮宗とは、軋轢葛藤甚しかつたが、淨土宗の門輩、之を以て、日蓮を排擠するの口實とした。是に於て、日蓮宗の僧徒等大に之を遺憾となし、日蓮の像を畫いて、贊を一休に求めた。一休筆をとりて、

傳聞日蓮活如來、香座則是妙法臺、尼入道同愚痴輩、一遍題目殊勝哉、

と題し、且つその像があまり小さかつたので、其奥に、

ぼうすく、小坊主、まめの粉にぬりぼうす、

と書き添へた。然るにその頃また、永觀堂の住持之を聞き、當寺の寶物なる、半金色の善導大師の畫像に、一休の贊を需めた。一休亦之を諾して、一首の歌を書きつけて曰く、

くろからんころものすその黄になるは善導大師はこをたるらむ

奇想天外より落つとはこの事である。又或年、高野山に登つた時、山の坊さん達が、弘法大師の像に贊を頼んだ。

弘法大師いきほとけ、死ねば野原の土となる

とやつてのけ、あつと言はせたらうである。

#### 五、法衣に膳を供ふ

一休或るとき、富豪某、祖忌を營み、大に佛に供し、僧を饗せるを見て、その門に立つて食を請うた。すると家人、その衣の破れて垢じみて居るのを見て、平凡

の乞食法師といやしむ、僅に一紙半錢を與へて之を逐ひやつた。然るにその後、一休燦たる法衣を被て、その富豪の前を通つたとき、その家また法事を營んで居たから、直に門に入ると、家人大に喜び、一休を引いて上席に請し、殊の外大切に待遇した。一休はその膳上の物を顧みず、自らつと立ち上りて、衣を脱ぎ、膳を執つてその衣に供し、自らはその側に座つた。そこで家人大に怪んで、その故をたづねると、一休即ち曰はく、老衲さきに來たときに、破衣をつけて居たので、わづかにこれに一紙半錢を與へ、今日美衣を掛けて居るので、美食を供せられるのは、これまことに僧を尊敬するのではなくて、たゞ衣の美しいのを尊敬するのではないかとやりこめた。家人は之を聞いて、大にその過を愧ぢ、これを謝したと云ふことである。その虚儀形式を惡める彼が眞面目は、こゝにも躍動して居るのである。

#### 六、 獨體の年賀

正月元日は、一天四海の人々、賢愚貴賤を問はず、祝ひよろこばないものがないのを、一休あはれに思ひ、寔に恐るかな。朝がほの日蔭待つまも盛り久し

き花とながめ、がげらふの青天に羽を振ひて、楽しむ間もない世の中に、糞に箔ぬる正月も、たい時の間の煙となるをも知らざる愚かさよと、自ら墓原へ行つて獨體をひろつて來て、之を竹の先きにつけ、正月元日の早天より、洛中の家の門口へ、「この通りく」と彼の獨體をさし出し、「御用心く」と言つて廻つて居た。然るに人は之を忌み嫌ひ、門を閉ぢて避けたものもあつた。すると或人之を見て、正月元日は、一般の人の祝ひ日であるのに、斯る忌はしき事をするのは、少しく違つては居らないかと問ふと、一休答へて、「いや、我も祝ひて、此獨體を各々に見せて歩いて居るのである。凡そ世界廣しと雖も、この獨體位目出度い物は外にはない、

にくげなき此されかうべあなかしこ目出たくかしくこれよりはなしよく是れを見給へ、目の出た穴ばかりが残つて居るではないか、何れ人は、こゝうならなくては、ほんとに目出度いのではない」と言つたので、聞く人、却つてその至言に感じたことと云ふことである。彼が狂態を装うて、しかも當時の人民を化導するの婆心、なんと剴切ではないか。

## 七、虚儀を排す

一休の當時、七月十四日には、方々の寺から、内裏へ灯籠を献上して、これを紫震殿の前に装置するといふ常例があつた。そこで、大徳寺でも、開山大燈國師より、代々献上する例規となつて居たのだが、一休は、こんな役にもたゝないことに人を勞することの愚さが、どうも氣に入らない、そこである年、内裏へ灯籠をあげるとき、狂詩を一首つゞりて、灯籠にそへて献上した。その詩に曰く、

性靈今日出來迎、雨露直供萬葉棚、掛得燈明天上月、松風流水讀經聲、  
と、その意蓋し、精靈棚を飾るとか、盆燈籠を捧げるとか、實に面倒臭いことだ。雨や露が手向の水で、草木の葉が、そのまゝ立派な精靈棚ではないか、燈籠が欲しければ、空を見ると月が輝いて居るし、お經が聞きたければ、松風の聲、流水の音が、直にお經の聲ではないか、といふのである。是に於て帝叡覽まし／＼て、まことに一休の詩の通りであるとして、自今以後、大徳寺からも、何方の寺からも、七月の灯籠を献上するに及ばないと仰せ出だされた。世人之をきゝ傳

へて、一休が虚禮形式に拘泥しないのを感嘆したと云ふ事である。

## 八、人民の冤を雪ぐ

其頃、江州烏山村といふ所に、六條某といふものゝ領分があつたが、久瀬又右衛門といふ家老が、非道貪欲で、百姓を虐待し、農具までも取り上げることが屢々であつた。百姓はその苛酷を忍びきれず、或は移住するものさへ數多あつたが、結局、上へ訴へるより外仕方がないといふので、その訴狀を一休に依頼した。一休即ち、

又もまたとりてもきかぬ一村の農具残らずくせやとり山

と認めて渡した。百姓共は、意外には思つたが、何は兎もあれ、これを御上へ差上げることとなつた。そこで六條某はこの奇なる訴狀を一覽して、一休の指金であることを知り、早速その無法の役人を罰して、農民の安堵を得させる様取り計つたと云ふことである。これたゞ一例であるが、こういふやうな、人民の悲苦を救済したことは、屢々であつたのである。

## 九、養命補身丸

又京洛に、能勢小作といへる貧困の者があつて、極月の除夜にも近づいたが、活計の方針も立ち兼ね、親類知人でさへ、薄情にも救助して呉れなかつた。そこで或人の勧めに任せて、一休を訪ねていふ様には、人間は、四百四病の其中にも、貧苦ほどつらい病はないと、古人も申されてあるが、某も、この頃此病に罹り、しきりに苦しみますが、或る醫者に尋ねました所、この病は、一種風がはりて、借金病と名づくるものである。之を治すには、唯妙薬金銀丸に限るとの事でありますから、何卒一包御救與に預りたいと頼んだ。一休あはれに思ひ、奥より銀一包を持ち來り、上に養命補身丸とかきつけて與へたと云ふ事である。その濟世救民の仁徳、後世に至るまで、稱讚して措かないのも、洵に故あることである。

#### 十、天の笠

一休關東をさして、日々旅をする頃、或日大名の行列に出會つたが、一休が、炎天に笠も被らずに歩いて居るのを見て、使のものに笠を持たせ、何卒古笠なれど御被り下されと言つて差出さしめた。すると一休は、これは折角の思召

近頃有り難いことではござるが、拙僧は天といふ笠を被て居るから、あつても何ともない、兎も角、その笠は返上致しますと答へたので、大名は不思議に思ひ、この坊主只人ではあるまいと、猶も同道して、同じ宿屋に宿らせて、さて使を以て、此の暑さ故酒一献進じたいと招いた。一休辭儀なく大名の部屋へ往くと、大名忽ち大喝一聲、「コリヤこの坊主、無禮者め、なせ笠を脱がずに參つたか」と怒鳴りつけた。一休騒がず、天の笠は、脱いでもその掛け場がないからと答へたので、大名も全く閉口し、それから、禮を厚うして、いろ／＼と話を聞いたといふことである。

#### 十一、花のありか

一休が、常陸國の鹿島の宮へ參詣した時、社近くの森の中から、一人の山伏が出て來て、「佛法は如何に」と問うた。一休直に「胸に在り」と答へると、山伏焦つて「然らばその胸を割つて見やう」と、いきなり氷の如き刃を引き抜いて、これを一休の胸元につきつけた。大抵のものなら、ギョツとするところだが、流石に彼は落着いたもので、

春ごとに咲くや吉野の山櫻木を割りて見よ花のありかを  
といふ古歌を咏んだ。この無形の鋭刀で以て、あべこべに扶ぐり去られた山  
伏は、一目散に消えてなくなつたさうだ。

### 十二 海老釣問答

一休嘗て江州の堅田の庵に居た時分、常に湖邊に出て釣を垂れ、魚を捕へる  
ので、同輩のものが、その破戒の行爲を譴責したところが、一休即ち諸子は學  
問をなせる身の、これしきの事を知らないといふ筈はない、我は昔の祖師の  
真似をするのが、即ち禪宗の學問と思ふ」とて、得意の筆をとり、直ぐ蜆子の海  
老を釣りに喰ふ圖を書き、一首の歌をかいた。

いにしへのかしこき祖師は蜆を釣りし我はあほうで魚をつりてくふ  
と、皆々この繪を見て、その奇異なるに驚嘆した。然るにその中にも老いた  
る僧は、古の祖師が蜆を釣たからとて、貴僧の若さで魚を釣ると云ふのは、恰  
も鶉の真似して鳥の水に溺るといひし類である、一體貴僧は、蜆子和尙のえ  
びを釣つた心根を知つて居るか」と嘲つた。一休即ち「貴僧等こそ、蜆子和尙が

海老を喰つた心根は、よもや知らなからう、凡そ道に於て、男女老少を擇はず、  
老僧悟道すれば門外のむく犬も悟道する、我等が祖達摩大師の事蹟を聞く  
に、ある時般若多羅尊者が來て、光明赫々たる壁を捧げ、三人の王子に見せ、そ  
の心を試さうとて、各々この玉を寶とはし給はずやと問はれたとき、他の兄  
弟は之を所望したが、達摩は僅に七歳であつたが、此玉は世寶で眞の寶でな  
い、智光の珠こそ無上の寶であるとして、之を擲ち棄てられたとの事である。さ  
れば悟道は、決して老若によるものではない」とやり返した。誠に年少にして、  
己に吞牛の氣象を有して居たものといふべきである。

### 十三 吹いて往く

或る時一休が、虚無僧の姿で、尺八を持つて旅をして居たが、途中知り合の修  
験者に出會つた。ところがその修験者は、一番和尙を困らせてやらうと思つ  
て、「虚無僧何處へ往かれるか」風にまかせて參る。若し風の無い時は如何、修  
験者、心竊に「してやつたり、これには流石の和尙も返答は出來まい」と待ち構  
へて居ると、一休やをら尺八を持直し、ふうと一吹き吹きながら、「風がなけれ



ば吹いて往く哩。

十四、河豚の中毒

泉州堺にて又次郎といふ町人あるとき河豚汁をしたゝか食うて、その毒に中てられ、即日死んだので、その者素と深く一休に歸仰して居た縁により、家人一休を招いて引導を依頼した。一休直に承諾はしたが、何と思つたか、自家式場に出るには及ばないからといつて、引導をつぶさに書いて遣はした。その語に曰く、

海中有毒魚、名云河豚魚、面腹白背斑、人不食此魚、

嗚呼痛哉、又次郎、食之忽死來、彼歳五十四、彼歳五十四、

合せて數珠一連、百八煩惱のきづなを、ふつときつて、行きたい方へつゝとゆけ。

木曾十七寅の年、角のないこそ添ひよけれ、

その虚儀の弊を破ることに勇氣のあつたこと、驚くべきである。

十五、狗子佛性

一休和尚の門徒が、狗子佛性の話を聞いた時、狗子とは犬の子のことである、これに佛性とはどうも合點がゆかない」と申したところが、一休即ち、

犬の子にあやかる人のしわざこそほとけともなり地獄へも入れ

むかひどのゑのころはまだ目があかぬおつばにまゝを入てころくやとやつた。門徒「いま目があいて狗子のところはやうくわかりましたが、趙州の有無の處は千年工夫しても、愚なる我等には得道し難い」と言ふと、一休、左の歌を詠じて、参考せよとて、

なしといへはなしとや人のおもふらんこたへもぞする山彦の聲

ありといへばありとや人のおもふらんこたへてもなき山ひこの聲

と誨へた。彼暫く工夫して後、然らば有りともなしともしれぬものでございませうかと問ふと、一休又、

有無をのする生死の海のあまをふね底ぬけてのち有無もたまらず

と、是に於て彼も得心して、一首、

有無ぞしるなにおもひけん趙州もなかりしさきの犬の一聲

と申したので、一休も始めて諾いたと云ふ、その人を化導するに諄々として倦まなかつたこと、概してこの類である。

十六、暴風雨の見舞

或る年の秋、八月下旬、偶々大風雨が起つて、洛中の家屋堂塔は、多少の損害を被らないものはなかつた。嵯川新右衛門、急ぎ大徳寺に駆けつけ、一休に見舞せしに、幸に當寺は何事もないとて、

わが宿は柱もたてず、葺もせず、雨にも濡れず、風も當らず

新右衛門は「して其御菴はどこにありますか」と尋ねると、一休笑ひながら、

わが庵は都のたつみしかぞすむよを宇治山と人はいふなり

「さては喜撰法師と御同居でございますか」と戯れると、一休即ち喜撰法師から借りて居る「然らば借家で御座るか」と笑ふ。そこで一休、また一首の歌を詠じた。

かりの世にかしたる主もかりぬしもかすと思はずかるとおもはず

と、新右衛門此歌に深く感心して、扇子にかき留め罷り歸らうとしたが、ふと

思ひ出して、この歌の心如何であるか、

吹ときはものさわがしき風なるがふかぬときにはいづちゆくらんと尋ねた。一休即座に、

吹くときはうべさわがしき山風もふかぬときにはふかぬなりけり

新右衛門即ちその禪機に感じ入つて、勿々に歸り去つたといふことである。

十七、松の曲直

或日、池の邊に、曲りくねつた松があつたので、一休弟子達に向つて言ふには、「誰かあの松を真直と見るものがあるか」ところが一同たゞ顔見合せるばかりで、一人も返事をするものがない。すると新右衛門、曲つて居ると見ました。一休手を拍つて、「エライ」と賛めそやした。曲つたものを曲つたと見るのが即ち真直なので、若し曲つたものを真直だと見たら、それこそ曲つて居るのである。新右衛門、彼もまた、なか／＼話せる男だ。

十八、死なばごつとり

一休と、嵯川新右衛門とは常に和歌を以て、種々の問答を試みたもので、彼の

前章掲げて置いた『道歌問答』の外、尙多くを拾收し得らるゝのである。

おもかげの變らぬ時はいかばかり變りてだにも命惜しさよ (親堂)

おもかげは變らば變れ年もよれ無病息災死なばごつとり (二休)

世の中にあき風立ちぬ花すゝきまねかばゆかん野へも山へも (二休)

十九、山路を拾ひ往くかな

或時、一休、新右衛門を同伴して、比叡山に登つた時、新右衛門、比叡の山路を拾ひ往くかな、と咏じて、どうか上をおつけ下さい」といふと、一休直に「さし解けて麓に四貫の錢ばらり」とやつた。その機智は、どんな時にでも、躍動するのである。

二十、無學文盲

新右衛門曰はく、

一文や二文は何と思ふなよ阿彌陀も錢で光る世の中  
一休應じて曰はく、

金持を十人寄せてながむれば中に五人は無學文盲

また以て、一休が世態に通じて居ることを證するに足るではないか。

二十一、箭の手打

蟠川新右衛門の宅と一休の菴室とが隣り合せであつた時、或年の三四月頃、其庵室の簀の箭が垣を潜つて新右衛門の庭中に生ひ出でた。すると新右衛門之を見て、提げたる大刀を抜き放ち、夫の箭に向つて云ふには、「汝武士の第内をも憚らず、無斷にて入込とは、不届千萬の奴、手打ちに致すぞ」として、二本の箭を根本より斬り取つた。一休此事を聞きて、使者を遣して云ふ様、聞けば今罪人を御手打の由、誠に不憫の事である。死骸は役目に任せ、此方へ渡して貰ひたい。新右衛門更に返報して、「死骸は御手敷を煩はすのも如何と思ひ、臺所にて已に葬りましたから、せめて形見として、衣服だけなりとさしあげやう」として、彼の箭の皮のみを送り遣はした。一休之を見て、「新右衛門の頓智も、なか／＼上達した哩」と云つて、大に笑つたと云ふことである。

二十二、扇子と五戒

或るとき、新右衛門が、一休を尋ねて来て、當時の佛教の状態に就いて談り合

つたところが、一休が、現時の僧侶の墮落は、寔に痛嘆の次第で、佛は五百戒を保持せらるゝに、責めて五戒だけなりとも保たせ度きものであると言ふと、新右衛門、左様、沙門は云ふに及ばず、世俗も亦之を保持し度きものでありま

す」と答へた、「いや、俗人は是非もないが、天下にあらゆる物は、皆この五戒を保つものはない、例へば今、この僅か一尺ばかりの扇子でさへも、五戒を破るのであるから、況して僧俗の五戒を保たぬは是非もない。新右衛門、さて、不思議の事を承るものかな、扇子が五戒を破るとは、初耳であります、さあそのわけ承りまじやう」とつめ寄つた。一休徐に説いて曰はく、

- 一、扇子が殺生戒を破るとは、竹を截りて骨とするからである。
  - 二、扇子が偷盜戒を破るとは、虚空の風を偷むからである。
  - 三、扇子が邪淫戒を破るとは、要と要と合はせるからである。
  - 四、扇子が妄語戒を破るとは、畫そらごとを書いてあるからである。
  - 五、扇子が飲酒戒を破るとは、開いてざゝんざ言ふからである。
- すると、さすがの新右衛門も承服したが、唯偷盜戒に就いては、合點のゆかぬ

ところがある。そこで、古語にも扇是日本扇、風不日本風、とあれば、扇子は是れ日本の扇子を動しても、風は日本に限るのでなく、所謂千里同風と云へば、これを盗むとは云はれますまい」と詰つた。一休突然、「新右衛門殿」と呼びかけ、新右衛門、や否や、一休一首を詠んだ、

春もなく香もなき人の心こそ呼べば答ふる主も盗人

新右衛門、たい成程と感じ入るのみであつた。

### 二十三、口授と書授と

京都に、喉痺を治療する秘法を知つて居る老人があつた。一休その功能の尋常でないといふことを聞き、どうかしてそれを世の中に擴めて益を分ちたいと思ひ、或る日その老人を訪ねて、秘法の口授を頼み入れた。ところが、老人の言ふには、「これは誠に秘々密々の法であつて、誰にも教へるわけにはゆかないのであるが、外ならぬ貴僧の事故、他人には必ず口授しないといふ誓約をなされば教へまじやう」と。そこで一休は、他人には決して口授しないといふ證文を入れてその法を教へて貰ひ、歸るや否や、その法を立札に書いて、諸方